

127  
6  
322

三  
年  
七  
月  
標  
本  
徐

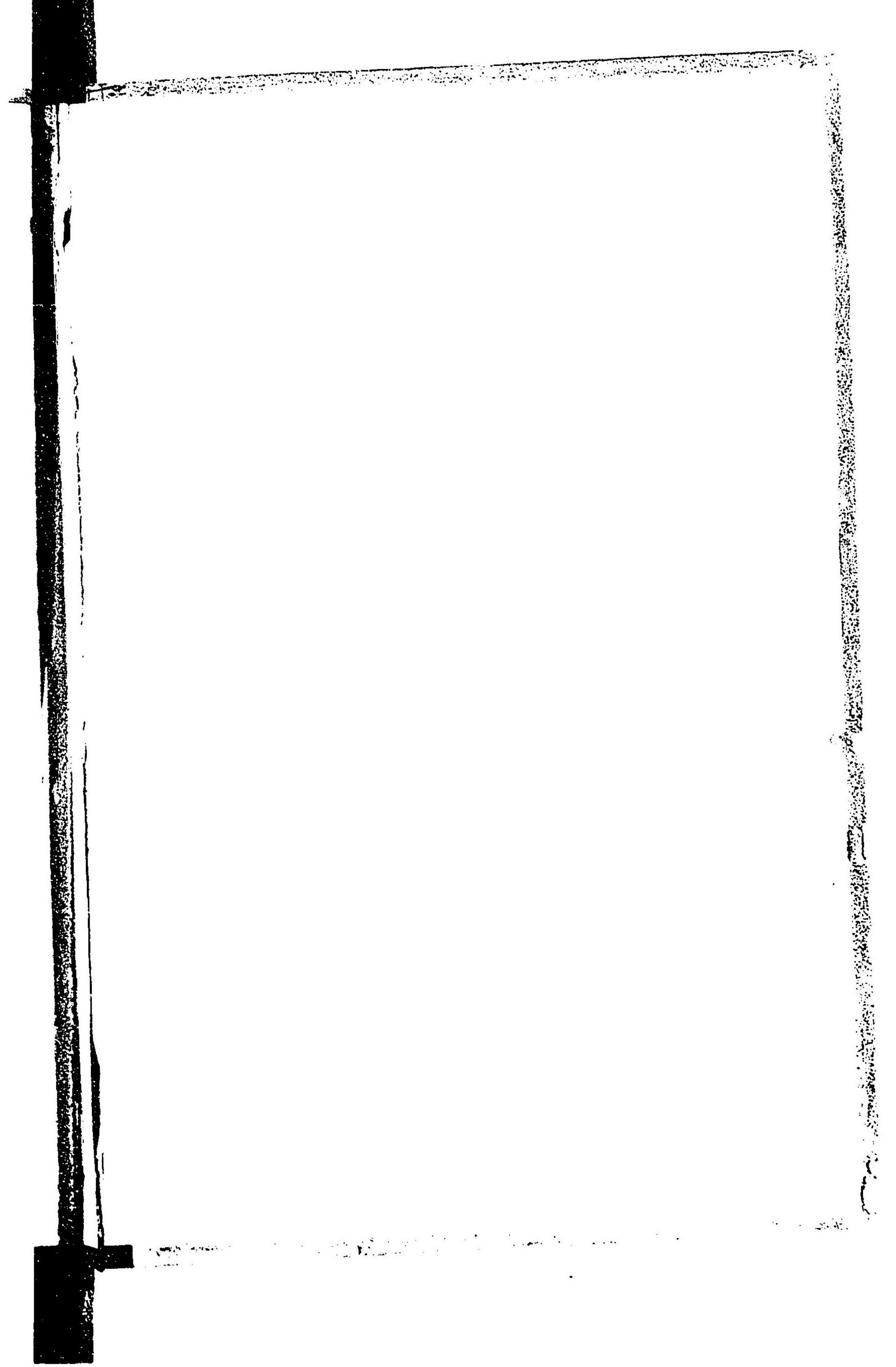
國

乃

光

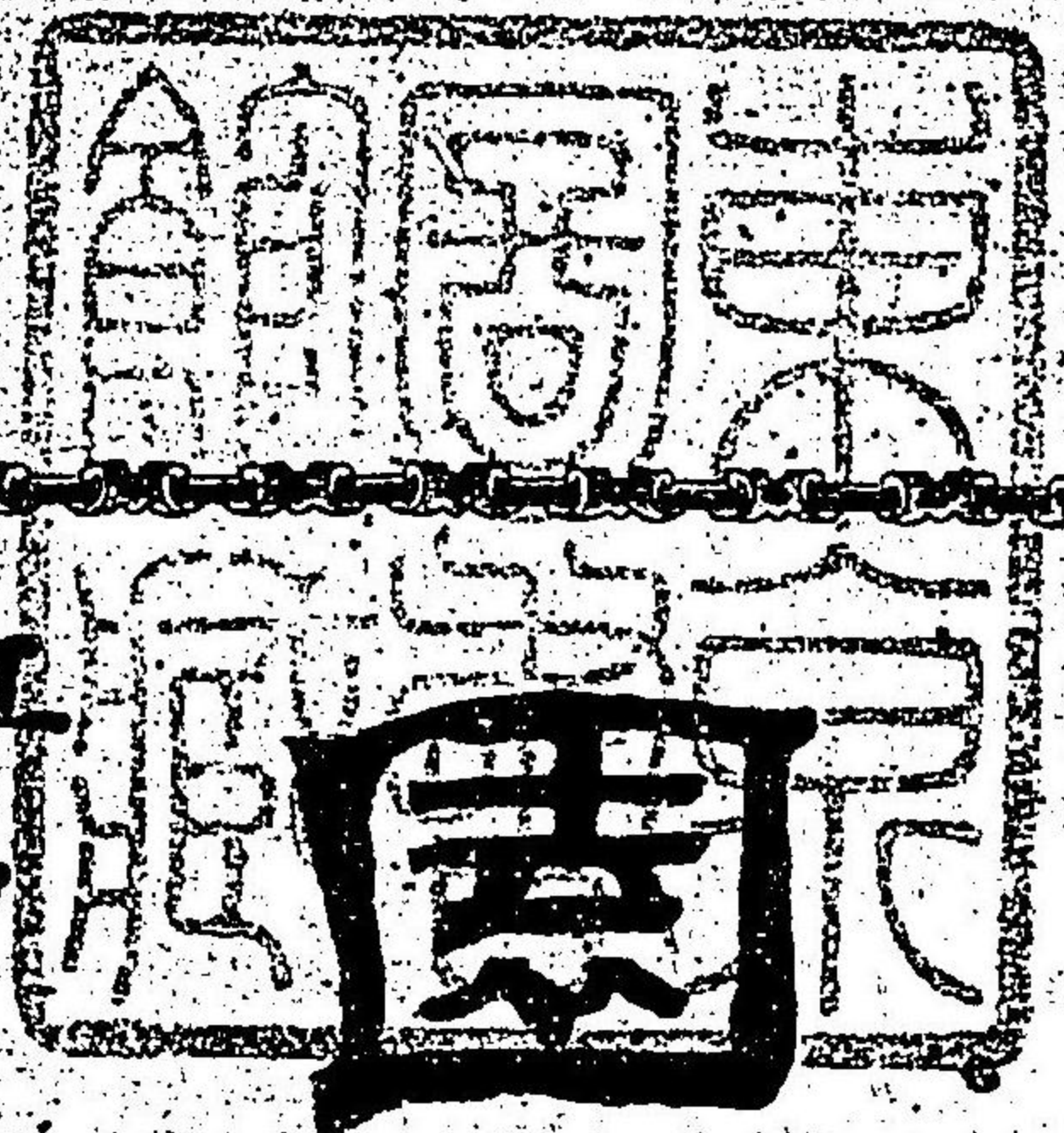








No 11607



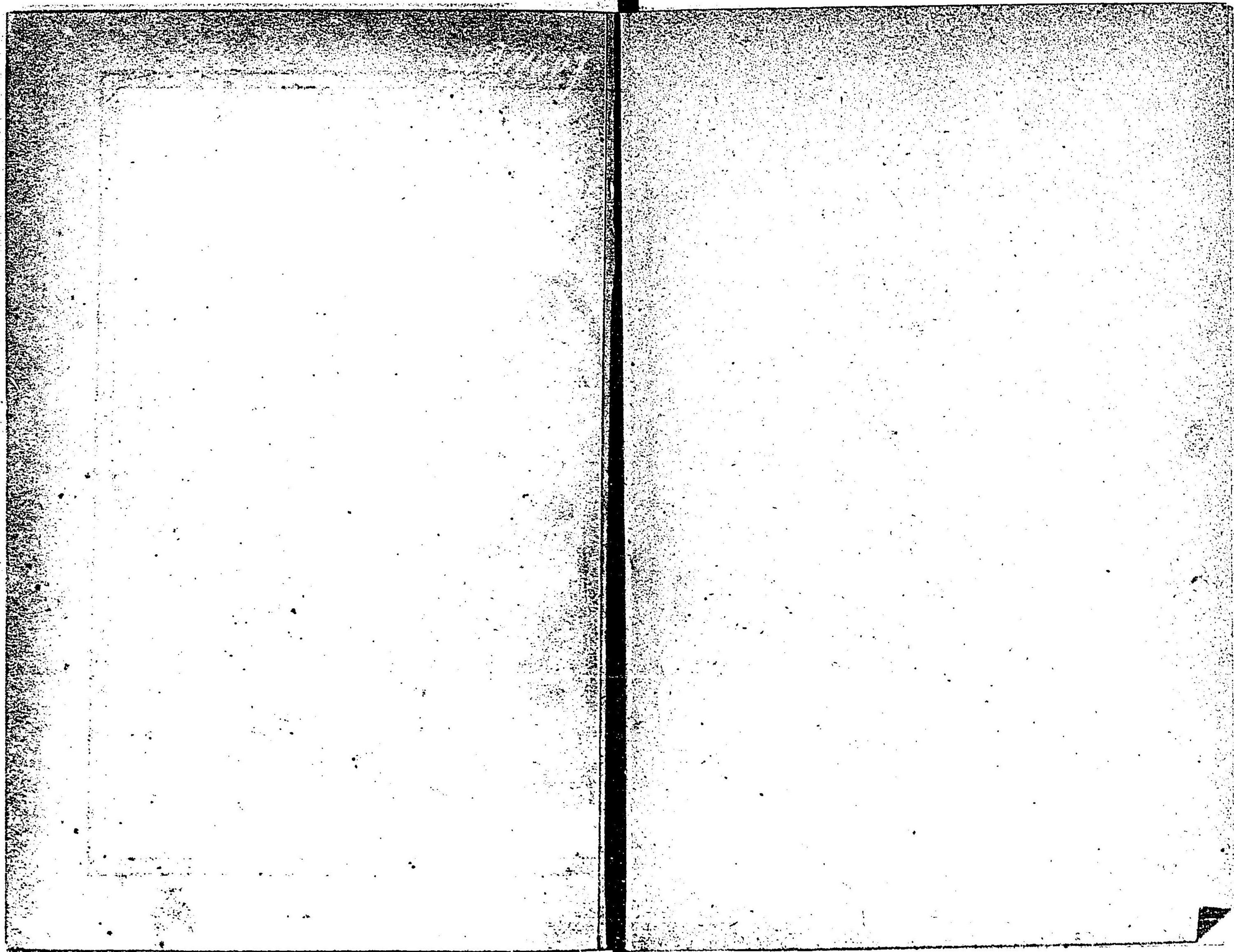
三勝半七貞烈美談

乃花合卷

江戶為永春水翁作









夢中の夢  
人間  
一世  
覚て  
猶蝶の  
如し



三世の奇縁  
二世のおとこ  
誓もかきまらぬか  
百折千磨の憂苦がこゝへて  
松の操も知らるるか

笠松家の  
三勝

笠松家の二男半七



第一章

特 10  
749

武士の驚聞て立にけり。どの子葉が文武の吟今の昔のことあり、らん鎌倉佐介が谷に屋鋪を賜り、食餘二千石を領して笠谷半太夫といふ者あり、り内室のお仲と呼なせしが甥をもらひて、聳とちし娘をめあひせて家内よく治まりて上下和順なりける所に半太夫五十歳の節に内室お仲妊身してありける、中半太夫病死ありければ、聳半兵衛家督を繼半太夫亡後にお仲の男子を出産なし名を半七と名づけお仲の結髪となりて法名を貞心と改め佛の道に志ざし深く欲に之子供の成人を祈るのまかて月日の矢よりも早く半兵衛おさよ乃中に女の子を儲け家内の繁昌いふばかりおし半七のとや十七の春をむかへ、まだ角髪丸額今業平と贈をいはれ、後室貞心の悦びいはんかたなく、樂しそ育てられけるが、或時用人十平の貞心の部屋へ機嫌を伺ひ四方八方の咄しのつゝ、その身に守る半七のことを云出し、盲目慢も忠義され十一イエ半七さすも能殿さまにお成おされましたが、さふぞ早く宜所へ御養子に被爲入様に、たしたふござります、後室「ナニまだ早からふモウ二三年過てのとサ十一イエ」先殿さまの御遺言もござります、餘りお歳がらさあると御心遣ひの出来、ますもの何方の御母堂も兎角いつまでもお側へお置おさうたがるのが一同で、随分御最でござります、が御身分をかためると少しも早いお宜しうござります、後「私も左様の思ふければ、養父のさげんもどり難やうし、第







四ります半「ナせ此様とをいふのだ三「イエ」くられでも此春上りました奥さまの従女浦次に貴君はわけがありそうでございます浦次も尊前に惚きつて居ますから尊公のお願ばりやて居ます私が部屋に居ますと妬心でいろくなどをやます貴君もお氣があるから浦次くど被仰ります半「何のあの様な者に三「イエ」くられでも此間お座敷の様で浦次さんと二人で何の被成て被爲入とがございませう其時私 が参ると私の方を御覽遊ばしてお笑ひなすつて逃て入らつたではございませんか貴君があの子と差向ひで被爲入と諷に涙がこぼれまますトまだおぼこ氣のあせけなく眼に持泪押かくし色を含めて伏しつむ姿の花の半開春の柳の風俗も露けく見えていとしらしました半七も艶しくて振わけ髪の頃よりも同じ住居も成長られ遠慮もあらぬ筒井筒くうべごせし幼氣の赤じみ重ねて隔なく主と家來の角どれて惚た同志のいと深く思ひ過しの愚智と愚智云わけするもあせなけれ半「そりやア手前の悪猪といふもんだ此間様側に居たの蜂の巢の軒にあるのをだまして浦次につかまして遣つたら中に蜂が居て手をさ、れたからそれで笑つて逃たのだ腔だと思ふなら浦次の手を見るがい、また大方その疵があるだらふたとへ惚られやうがどふ仕様が手前に見替る女があるものかと引寄られて嬉しくもはなれがたなき驚もみぢ美ましくと思はるべし折節浦次が呼次聲浦「半七さま」トいはれてびつくり二人は飛退半「なんだ浦「旦那さまがちよつと被爲入まじと半「チイ」く。コウ三勝この花を母はさんに上てくりやト言給て奥へ行跡に浦次と三勝と部屋の内を片寄ながら浦「三勝さんおまへ今の内髪をお結な三「ナ

ニ私の「ア」は用をす上てから結びませう浦「その花の用かへ私が左様すなふから早くお結なそして今日の晝すぎにはお客がゐるとナスことだからいそがし三「若いそがしくん結さいばかりだ浦「おまへは半七さまの用といふと浮身をやつして被成子それもは尤かねへ見たとが有ます三「チヤ浦次さん左様おかしなことをお言でさいは後室さまのお耳へでもはいるとわるい浦「左様ならばやく髪をお結私がお用をいたす三「チヤくおつなことをお言だ半七さまと譯でもゐるくらゐならば髪でも結たり白粉をべたくどつたてすりも磨もするけれど何も洒落る見當もなから化粧をする氣もない三「これ浦次とば浦「ア、おまへはは容儀がい、から其苦サ私どものやうな者の白粉でもつけませんとお客の前へ出るも家の外聞にありませ彼お方にお化粧をしないのが町風で宜とサ〇何がおわたる戀の意趣たがひに氣をもむわかい同志色の世界の常なりける程なく後室貞心は湯より上りて部屋に來る三「モウお上り遊ばしましたか半七さまの仰にはあの燕子花を十三日ゆゑにわざわざ進せられます後「チ、左様かへ佛さまの日といふても今日のいわすれ易い日だのお半七はよく氣のついたとだト殊更よろこぶ親心後「アノ半七に左様言てくりや佛前へ備へても餘程残りが出来るに依て床へ手生を頼みたいと母がゆふとて呼でたもノウ三勝ト言付る側に浦次がいつもの出過浦「ハイ半七さまの只今奥へ被爲入ましたか呼すて参りませうトそくさ立て行姿貞心は見送りて後「アノ浦次としたとが浴衣を干せと言付たにふつ、かなことではあるそれに引替其方のしとやか私の半七同様と思つて居るから



六何ぞ願ひがあるあらば必ず隠さず遠慮せず私に内々吐すが宜しいふ此程二人が其風跡水ももらさぬ無分別ありのせまいが若ひよんかこともゆらふかいあづらも餘所よせられとはと案じ煩ふ親は慈悲よき折節と三勝の手をつかへ三身に餘りましたるお言葉誠に嬉しうぞんじます思ふ死でもわすれませぬそのは意ふあまへまして後「チ、何ありともいふたがよぬ聞てやらうとやのらかぬ情も深き真心の言葉に膝をす、めつ、あどかたとをねがひけり

第二章

彼三勝のしきと願へば後室心を察して後「チ、かひぬさうに娘心の一筋ゆる今にも聲の出来る様に氣をいためたか堪忍しや夫を保がぬやあらば否で通して居やるもよからふ縦令親父が何といふても此真心が請合やせにかあらずさきさきかゝるやるさき三「ハイ有難ふ存じますそのお言葉をいたしきまして胸のつかへが下ましたチヤ私としゑとが身勝手ばかりや上てお火の消たも氣がつかませんト火入を探て立て行これより万事真心の不便をわけてくへつ、何事もなく春秋を三ツか重ねて今のとや半七の歳十九才たどへ男でめればとて七難九厄をまぬかる、祈をなさでなくへさ敵と母の案じに随ひて大師河原のは縁日兼て其日を待けるが彌生の空け開らかに連は出入の草譯醫にて野鼓筒とよばる、稲田安幸光る顔を振立て安「サア、若旦那早出とやらうのしませう何は永日でも路が遠いからサア、モシ糸さん衣類をとやく出しなせへさ、糸三郎といふとなりこれの三か三「ア、又其様仇名

をお言なさる私は梅我さんどのやません安「それでも梅我がおまへ敵おまへが梅我歎いづれどつちか似たのであらふ旦那のお迷ひなさるも無理ならずサキ三「存じませんヨ、これよをとりにだして半七にさか三「モウおわすれものいませんかアノは母堂さまとお兄さまへおいとまごは遊ばしませしヨ半「承知、安「イヤア三勝さんの心配そこらが惚た性根イヨうまいとやまず先お支度もよし是よりチヨン、森の引返し浪の音にてつなき道具かいつて品川の塙坊主と美少年の道行といふと若旦那が寺の寺性の様だモシチツトらの字かチ三「それならんさい餘り多辨だからさういふ禁句をオホ……安「イヤア大和屋ア引三「また其様とを安「トキニおまへも十九の厄歳此和尚が代参でお守を三「イ、エ貴丈へは願ひませんいたゞいて来て道らふと被仰か方があります安「ホイまたしくじりおひそづかしたチトこの内半七の奥へいどまを立出る安幸は前立立菊平といふ奴を供にて出かける三勝の半七を呼ぶいめ何か呷くかのよさ安幸は立もどり安「イヤア床ばなれでいさい出放のわるい事モシ今夜は品川泊で明日の日輪さまが鬱金色半七さまの愚僧の肩にか、つて腰がぶら、モシ三勝さんようございませるか三「さふとも思只次第私存じません其代り後室さまへ告げます安「イヤアそれの大變、若旦那が上らふと被仰ても此坊主が諫言や上無理に引てかへるか和尚の寸志なんと頼母しい方丈さまでござんせんかいさア三「おそい、いひあからし、元氣だねエ安「イヤ本どうに左様だッけ品川のキイさんだッけチ、それ、若旦那の三「モウ先へお出さざりませした安「イヤそれの





大變出し抜れたか残念を遠くのもくまい追跡かけてチ、さうじやト身振このいろ出たらり  
 になりさもちらして走り行かくて大師へ参けし途中の酒興いはんかたなくおそひつ、やが  
 て我家へ歸り道三人づれの路草に勞れをわすれ元氣よく安幸の門前にて安「私直に是か  
 らお別れにいたしませう若旦那もさずおくれたひれ菊半どんは太義また明日参上いたしませ  
 うトゆくを半七引止て半「アアよからふ其様に宅へいそがすと此生海苔でちよつとひと口  
 安「いかさま是も野暮からぬことだねトさわざらして歸りければ待まふけたる家内の賑  
 ひひ三勝のいそくとお茶お火をトぬり目なく三「衣類も温てはさいますか、ささまも  
 お待かね早ふ奥へお出おそばせト心をつけて立つ居ついのねを知られし譯ある中半七の三  
 勝に向ひ半「和尙に一口トいへば三「ハイ、お看も出来ました半「そんなら安幸さん  
 一盃やらおしなちよつと私のお部屋と奥へ行て来るから始めさせへ安「そのつ有がた山  
 櫻ト古い地口を仰山にさわけばおかしき元氣もの三勝の酒肴をいだし三「今日のわいしい  
 ものを澤山わがつたらふから此様ものはいけすまいサアお酌をいたしませう安「イエ  
 く「まア旦那のお出を待ませうイヤ時に三勝さん今度高輪の茶屋でおもしろいことがありま  
 したせ三「どんなことがございましたかへ安「若旦那をせめて寮物がたりにお聞かせへ三「さ  
 ふして其様な事が出来すもの歟安「それでも若旦那がおまへのことをおれはおれが本妻だ  
 と被仰ましたイヤ奥様く「三「アアまたそんなことを言ておさふり被成ての否でございま  
 九 すト是がはじめのからかんにてしばらく時刻をうのし半七も来りて酒ごとわり夜もふけ



十しま、安幸もいとを告て立かへる跡に二人はさし向ひ半三勝母人さんの方の用  
はないか往て来ればい、三「たゞ今まいりましたらおれが方はい、から半七の方の用をた  
せと被仰ました誠に酢も甘いも存のは後室さま貴方のお仕合でございませぬやらしい様  
でございませぬが孝行に遊ばしませうしては養子に被爲入お身でございませぬから夜遊びあ  
んぞにとお出あそばすあわゆるいお噂でもあるとわゆるふございませぬ半「評判がわるくッて養  
子にもらひてがあけりやア猶い、といふのだからこはいとこねへおいらは別宅して手めへ  
を女房にさへすれば外はすこしも望みしといふの何と實じやアあるまい歎三「誠にお  
うれしうござるまどが何ば私が出来しいとすては主人さまや親達の心盡しが水の泡をふし  
てマア私がそれを宜とすて居られませうとすてもお別れになつたら死ぬと覺期して未來を  
頼むとかないお願ひお察しなすつて下さいますし無理をすたらさぞおはらがたませうは  
堪忍遊ばしませト涙を流るにてかさくどくんとわりせめて哀れあり半「なんのマア今のとこ  
やアあるまいしそれを苦勞にするとか殊に手前もるに養子にゆかきいと言たら悪からふが  
身もちをわるくして貰ひ人ねへやうにするからい、じやアねへか其様に遊すとい、はな  
マア酒でものみあそしてモウみんなが寐た様子だからだれも來いねへ三「ハイありがた  
ふ存じますト涙をぬぐひ三「おなたは左様思召ても若もさう言ふ身におなりなされたらは  
後室さまのどの様にお歎かあそばすでございませうとふも左様となりませぬ私は尼に成ま  
すから貴君はは出世あそむしませ半「感心した手前の異見今時の女があか〜其様に勘辨  
が出来るものかト脊をさで他目もなられば對膳にて食事も濟み床も延て三「左様あらお休  
まのそむしませ半「手まへも今夜のこ、へ寐な三「それでもひよつと寐過しますといけませ  
ん半「ハテ野暮らしい母人さんもお承知の此惡縁何の遠慮があるものかそれとも否なら詮  
方がねへ三「アまたそんなことを被仰ます何の勿躰もい否のあんのといふ様とかが夢にも  
思ひませう歎半「そんなら來やト引寄る屏風の書にも戀の山枕のちりのつりては高く  
もあらん浮名の癖立まはしたる六枚のさもひつましまさうつがひとなれぬ中と見えにける

第三章

彼三勝は半七の身を立親に安心させ孝養をすす様に諫めしかばさすが發明の生質あるもあ  
忽ち心をあためて稽古に通ふ其外は他所へも行ず慎み居る其行狀のこれまでとらうつて  
替りし孝行に母のよろこびいんかたあく所爲くる珠數のたまたまに他人なき節を幸ひと  
三勝をちかく招き貞「ノウ三勝おぬしに禮をぬいふと思つて居たが人目もあれば叩て居た  
が外のとでもない此や半七の行義目に立平どの慎みと不殘其方の心から實に嬉しむとら  
とからひ其代りには其方の身の上此貞心が身にかえて世話をする程よかならず〜案じ  
やるお私を母と思つて居やヨ三「存じがけかい其仰半七さまのおどなしうならせられまし  
たは令堂のは苦勞をお聞遊ばしてのお慎み元來は孝行のは生質私風情のゆゑでござるま  
せん貞「イヤ〜かくすにおよばぬと私のよウ〜知つて居ます先日半七が大姉さまへ參  
つて歸つた晩用があつて半七の部屋まで行か、り這入とするとひそ〜聲誰か今ごろに咄



しをするかと隔戸の透より覗き見れば其方が異見の涙聲始終を不殘聞ました三三、左様ならぬ時にト貞を赤らめさしうつむく貞「赤んの恥かしかるといふない貞實ものとはじめから見くの置ても娘心戀に思案も出来ぬがならひ男でさへも半七がわざと身持の放蕩の養子に何かす宅に居て其方とさかれぬ心のそこを察して居たれど赤ま中に異見をいふも善悪と扣て居たが心の内で誠に苦勞にして居ましたといふたら其方の此母が見て見ぬ風俗の昨日今日を情の罪科と思ふであらふが過もかれし夫の遺言是非とも養子にやらねばならぬが家内に跡目もあけれぬ願養子ふは決してするなと仰ふかれた深い所存故人の言葉もそひかれず儘にならぬが浮世の常アアとふなるか知れぬけれどこの上とも頼むぞやとい言ながらわの様に閉籠つてばかり居るとまた煩らひでもしようかと案じられておらない三三天にも地にも一人の男子とふぞ末よいやうにと後生願ひにくる珠数もアア半分はわの子の爲親やと親を思ふ子があつても苦勞のたえぬが人情氣のやすまらぬも身勝手かト譯のわかりし後室の縁言いふも親の慈悲と聞三勝の猶さらに涙のそれ聞なかりーがやうーに貞を上三三おまさまと親の眼をかすめてこれまで勿躰ないかゆるし遊ばしてくださいませお恥しいと赤がら半七さまの厚いお情をふした譯の縁言やら昨日に今日の彌増てトいひかけて涙にひせる貞「深くなるのが戀の癖三三氣に癖つけたいたづらを憎いやつともおしかりなく此うへどもに頼むどの意の此身の胸に針これまでの大膽をおゆるしなされて下さいますしト恐入たる三勝の脊をさすりて貞心の貞「赤んの其様に誤るとは赤いいのふ私

取持て遣つたも同前るれも半七が不便ゆゑ殊に其方も乳兄弟それもいろ／＼譯ある身今でも半七が養子に行ゑらばともじも相應にして縁付様と違から心にかたて居て万事つましく隠居料の中から溜たその金もモッ百兩やまできてゐるトかねて用意の金の數小判小粒をとり雜交てありけるま、に小たんすより出して三勝の前ふおき貞「この金とゆ乃木地色の重だんすの衣類は不殘其方に遣るやどにかならず／＼悪しく思やるま三三「どういたしましで勿躰ないあしく存じますとはございませんがどふぞお家にいつまでもお置なされて下さいますし貴嬢のは壽命万々年をお過わそばして後に尼とありませ私「願又半七さまへ對しましても縁づくなんやとサスとは赤か／＼存じも寄せせんたどへ夫と表向定まつたお方でございませずとも女は男を一人の外肌をゆるさぬいませしめを百人首でも覺て居ますましてふれまでにくからぬ仰に女房と思つて居ると身もふるへる程嬉しいお詞たどへは思のお主さまの御意をそむくとお吃りでも他へ縁付ますとばかりは屹度断りや上ますト心にちかひし金銀の操は天晴賢なるかな貞「三才兒に淺瀬のたどへとやら他の娘に縁付させて貞女の道を破れどは私が鹿相じや堪忍しや其方がさう言心なら此身も便りにあつて嬉しい半七とても何時宜口が有て行きやるやら知ぬとア、しんみりとした咄しで大きに懣氣だ酒でも給て氣をはらさず半七も呼で來やト母子の中に三勝が水ももらさぬ酒ごとのしはらくうさをはらしけるま、に用人十平の此程半七を養子の口よるしき方よりや來りければ是非其方へ縁付んと思ひ定しが娘三勝の譯も知りたればまづ是を遣さけず承引あるまじと女



四十

房ども内談して親類へ行けるが斯ると、も三勝はしらであるこそ哀れなれ何心なく後室の部屋へ来たれば母の聲「三」チャ母人さんは機嫌ようお爺さんのまだは機嫌伺ひにお出なさいません手母「今日と本所の伯父さんが大病で其所へお出だヨそれゆるふまへもかいとまを願つて見舞にやらねばならないヨトまた後室に向ひ母「尊母も存じで入らせられま三勝の伯父さんよぞ一夜泊りのお暇をおゆるし被下まし貞「チ、それは無心配三勝も一通りの伯父でいな兼て贈もあつたと明日は見舞に行がよい去ながら能マア相談をしてのノそれからもくが能チ、そして半七に女入賢誌の後か来たから晩に謂でくれる様に左様言て呉りやト言付る心の中に半七によく相談して行といふ粹な使の手くだよと飛立嬉しさ三勝は「三」ハイ、くかしてまりましたト半七の居間に至り見れば庭下駄はさて泉水を詠めて居る「三」モシ尊前へ半「チイ三勝か何だ三「ちよッ」といふまで被爲入下さいまし半「だますと危かないせト椽側の際へ来たなり半「サア何の用だ三「アノッ御母公さまが御本を晩中讀でくれると被仰ました半「ソレ見たがい、晩のとを今ッからいひすとい、トまた泉水の方へ行にかゝるを引といめ三「アレサまだ用がございます半「何だ三「まことに困りますとが出来ました半「おにがこまる三「何なたも存じの本所の伯父が大病で私にわひたいとサスどて唯今一夜泊りのおいとまを願ひに出ましたが貴君がわるいと思召せば私「斷つて止ます半「どう歎それでおかすひなるまい幼年とさから七才までぞだてられた大恩があるでいさいか殊に母人さんには承知せらるやぐ往がい、三「おんだか私「いやでなり

ませんおら泊らずにすぐに歸ります半「それいどうも勝手にしち。ヨウ、能か化粧をして往がい、世手前の聲にならふといふ従弟が居るさうだ三「チャ、其様とをわッしやるおらモウ、私「参りませんト恨めしうに半七を見る、半「なんの馬鹿なよすとがゆるものかじやうだんだ、行がい、三「イエ、よします貴君もゑに命も存じて居ますから此くらゐな義理の欠ても随分よろしうござるます虚病をつかつて私「と参りません半「コレサそれではわるいツイぢやうだんを言ふのだ堪忍しや三「左様なら参りますがかならず、今の様なと思召て下さいます半「ナニ、手前の心と知りさつて居る十日廿日泊てもうたぐりはしないヨ三「んどうでござるますか、半「しれたとサ三「左様ならば母に挨拶をいたしますト行を呼とめ半「コウ、三勝ちよつと三「ハイ何でござりますへト元の様側へ来たれば半七の莞爾笑ひ半「遠方御苦勞三「エ、お憎らしい急ぎますものをト立て行

五十

かゝる二人が其中をさくも忠義の十平が方へ養子を言入れしは去頃半七が大師がはらへ参詣の途中大家の娘と出合しが其節娘と懇話て大病とありしゆへ傳手を以て十平の方へ入入れけるが誠に願ふてもなき大家も愈半七をつかはさんと思ひ込し也されども三勝の忠義の十平が種なればその心貞實あるもゑに操をまもると鉄石のごとしそれ忠臣の孝子の門に出孝子と貞烈節操をうしなはずまた此もゑに身をくるしめ辛氣辛苦の愁歎あり嗚呼世の中ふこそ是非あけれ



さて翌日になりければ三勝は支度を調へ半七の前に出三左様なら貴君参ります半一が、早く行て来なナ三何だか私は参るのが否でございます半其様な世事をいはずと早く行がい、大分立派にお粧が出来たの早く行て見せるが。ナット左様でいさい見舞ふ行て来るがい、三貴君の其様とばかりいふも何だかお別れナスがいやでございますト暫時ふさぐ半「實のなれも今日の遣りたくさい様だが大病人のとだからしかたがない往て来を三今さらやめにいたすも他前がわるしとふいたしたらよからうやらト案じわづらふ折からにふそい〜と迎ひの催促三勝と思ひ切て三とふいたしてもちよつと往て参ります半「さうサ左様しなユウ〜此は守の日違さまのは直筆爺はさんのかたみだが病人の所へ行のだから貸て遣らふとしてこれは少しだがト金を紙に包んで渡し半「見舞に何を買て遣りやト残る方なき親切に守をいたさ立出けり三勝の爺親に伴れ伯父の方へといそぎしがろも〜伯父の本庄にて川非野得玄と呼ばれたる此邊の流行醫者親子四人弟子坊主下女と下男すべて七人ぐらし富るにはあらぬとも衣食の料にのとか、ぬ表間口も立派にて實相應の住居なりあ、に來か、る三勝を伯父の家では出格子からはやくも見つけ伯母チャ〜とんぐ早やかつたト玄關へ立出伯母「サア〜とやく上んなサアあちらへ」トいそいだ故かどうぎに暑いト袴を取り三勝も中の間へいたり三「ひさ〜お目にか、りませんいつもは機嫌能しかしながら此節の伯父さんの病氣さぞお心づかひでいらッしやませう誠にお案じナ上

ます早く伺ひたうございますにお床はどちらでございますか伯母「ナ〜その様に機嫌の實にわるいといふではないが餘まり久しくわはぬからなつかしかつたけれどしかたもなし病氣といはずのいとも出さいとそれで病氣を言て遣つたのサマア〜安堵して休みあトぬ中十平の奥へ行三「チャ〜左様でございますか私のまゐ大そうおわるいと承りつて肝を潰して参りましたナニ其様にこしらへ事をなさらずとも随分おひまが出ますものをとふした譯やらお爺さんの思召もわかりませんとすこし腹た、し死思ひれ伯母「マア〜何のともあれ多葉古でも呑みナやんにかんがへて見ると五年がとわぬいノウ大そう容儀がよくあつたと云こと聞たが誠に娘盛になつたノウ替りがして梅我の貞に寫真だそれでは男も迷ふ苦サ三「チャ其様おじやうだんを歳はとりましても屋敷をたちでございますから世間をさつぱり存じません伯母「私は随分知て居ます然し若旦那も能はきりやうださうだトぬそれしていつと三勝が貞に紅葉の夕映や猶ほさやかに見へにたり伯母「さんの赤面とることがあるもの人の為ないことであるまいし〜いひながら三勝の貞をぢつと詠め伯母「ホンニ見れば見る程い、肌目だノウ思ひ所爲のせへか此方の貞がうつる様だ三「チホ……能伯母さんいゝ〜とおあぶり遊ばします久しく私がは機嫌をうかいひませんからそれでいじめなさいますか是から折々参ります伯母「ナ〜いじめのしさいヨ是から毎日私がつれて諸方へ行ませう三「ハイありがたふ存じますが今日は日がへりのつもりで参りましたからまた重てとんぞお願ひ申します伯母「ナニ當分此方へ留ておくつ



もりだから其氣で居な三「イエ」此節のいにくと主人さまの方も人すくまで困ります  
 からは是非今日の歸りましておば「ナニ」案じさんか主人は方親父さんが宜様にす  
 ると被仰ぬ「マア」衣類を着替て三「イエ」をいぬしても今日と歸りましてまた参  
 じませよも氣が、りでございすからト何分承知せざりけりされば三勝が心の内に案  
 じてみればはじめより何かあやしき様子といひ伯父の虚病も子細をあらん今日半七と別れ  
 際にあふとなくなしく昨夜の夢も氣にか、れば是非歸らんと思へともいまだ伯父にも  
 あはぬこと父が何やら先刻より伯父とひそく相談のもれて聞ゆる言葉のとし半七さまと  
 いふト言が耳にはいれば三勝は思はずハツト胸さわぎさて我身のうへのと父がくはし  
 く知りあるもへに引放さんとの工極のいどまですれば屋敷へかへすまじ今日と知らねど  
 兼ての覺悟案じとはなけれども老年たあと、さまた厚恩の伯父さまは夫婦は苦勞なさ  
 るも我身のいたづら今更悔んでかへらぬと不孝と知つても女の道まらねばさらぬ薄命者  
 も別れとなるさらば此黒髪も今が名残と思ふもの、男子でさへ髪をばをしむものやらん  
 たしか宗貞ぬしの出家をささるとて

たらちねはか、れとてしも鳥羽玉の

我くる髪をさですやありけん

亦尊の姫君のは歌に

心から千筋を撫し黒髪を今ひとすぢとさるうかなしだ

發明のるに悲しさをさる浮世のよしふせせ思ひくらへて哀れありさすがに伯母も餘所を  
 らで心の中を汲んで知る茶の間へこそは立て入る三勝は猶よくと半七のこと思ひ出て  
 包し涙とら〜〜あまりにはかないこの別れせめて最一度お目にか、りおいとまごひを  
 しみぐ〜といや〜それもかへつて思ひの種モウ〜愚智は思ふまじと思案を定めし心底  
 は男もあよばぬ賢女ありさて十平は得玄と相談調へ三勝を呼寄ければ三勝は伯父に向ひ禮  
 義を尽して挨拶すれば伯父の得玄「得」コレサ〜其様に義理を述るにはあよばぬとた子も  
 同様お身で遠慮のいらぬヤ〜い、娘になつぬノウと死に早速ながら此伯父が手前に頼  
 みがあるがさんと承知してはくれまいか三「チャ」あらたまつた伯父さんの仰身にかなひま  
 したとならば何なりとも背ひさすまい去りなからお主のある身でございすからお熱み  
 あさる筋に依ましては爺さんの仰でもそむさすトすつけりいりれて親伯父もすこし、ら  
 けて見えけるが得玄のにが笑ひして得「ホ、ウ」ある程ぬしのも尤だ志かし外の頼まで  
 もない此方の次男の種次郎と夫婦になつて親父さんを懸居させてくれまいか。エコレあ  
 の様にお年寄れたお身で奉公は大いほ苦勞など、の思はぬかどうで氣には入るまいか  
 種次郎の甘才其方の十九似あやしからぬといふでもあ。エ承知してくれまいかトいへど  
 三勝返答なくさしうつむけば父は性急たまりかねて十「コレ」返詞をせぬか三勝親と親どが  
 ゆるした婚姻ありがたいとは思ひぬかこ、お不孝ものめがトかどつくごとく吃られてしよ  
 んばりとせし哀れなすがたされ覺悟の一心には前後おそれぬ烈女の一途側にありあふ



差をぬくより早く嶋田齋の根よりふっつり切放す。乃手れうちの稱妻よりとやき自在は武  
 士の妻女とあしたき生立すらずや人々これほどおどろけば三勝の切落せし島田をしづかに  
 伯父れ前にさし置て三「藝の上から七才まで産の親よりあを深い恩を請た伯父さんの仰  
 にそむくみの三勝亦一ツにと爺さんが不孝ものど乃お吃りと不義いたづらとのかふく一み  
 は尤ではございますすが十五れ歳らら今日れ日まで半七さまの厚さお情とじめとやんの浮氣  
 と義理後は互に誠とまといとささつて命までちかひにたてお身乃あやまり半七さまは  
 は養子にいらせられねばならぬお身逆も此身は假のふと死ぬやいとしう思ふてもかなは  
 ぬ縁とあきらめて半七さまへは養子にとおす、めやた心の切なさ朝夕おが神さんへ思ひ  
 さらせてくださなましと願て居るとは思召さす初てりあかくおさ、入れあくとふして  
 養子には往ぬ貫ひてのないやうに嗣業をするとおつしやつて始終の所は私を女房にする  
 と嬉しい仰せられを此方から辞たいしてやうくおす、めやたは養子を私がお邪しをす  
 る様に思召のがおうらめしいかあらすどもに開わけのない身と思召すすなと涙ながらに立  
 派の理害親とづかしき此場の仕義とわりとこそ思はせけれ

一首を證として人情をおしめ

偽と思ひて人も契りけん

かゝるちらひれ世こそつらけれ

第五章

烈しき所爲もさすがに女くりかへしたる涙だごゑにて三「半七さまへは異見をヤ上たを後  
 室さまがはからす不開遊ばして段々のお禮二人が中は私がゆるすぞかし養子に遣つたらば  
 あきらめて居ても恨であらうと私もおゑにしまつをなされて百兩といふ大金と簞笥にお  
 たくのへ遊した小袖を獲らすやる程に是で身のかたも付て遣ると被仰たのは四五日以せん  
 それ不ぞおまでおひひるを請ても不義と不孝の罪は除せぬ此身のいたづらごとく免あされ  
 てくださいまし髪を落すも我儘らしく恐入ては居ますけれと貞女を立て不孝のいひわけ思  
 と情の二方へおいとま乞もいたさぬのがお名残惜い後室さま。おなつかしい半七さまも  
 此世ではおめもじもかなひますまいとふぞ來世はお側に居て此世の恩を報じたい今朝  
 も半七さまの被仰にささふも今日と遣りともないが大恩ある伯父の大病と聞てやらねば不  
 便に思ふ手前に義理をか、せるとも心ない儘ならぬ浮世だとおつしやつては守とお金をお  
 手づから下すつて伯父へ土産を持っておけ病人へは不實だれと今日歸て又おけとおつし  
 やつてそれから二階へお上りもへさふしたとかと存じましたに私をお二階からお見送りな  
 さる爲それおまでに思しめてくださるとかと存じたら引かへされる後髪こ、まで参る  
 もうはの空此様に遠深い中を義理と恩とにふり捨る心の中くるしさを推量なされて下  
 さいました人目もはぢす今のとや性癖もあくみかれわび泣入姿のいぢらしさをばに聞居る  
 人々も消たき思ひと見へにける得支の感心なして得「かもふお方をお諫めやて其身の尼に  
 さらふと男もあよばぬ身の覺悟また半七さまも三勝へに身をうもれ木とあさんとす



二十

思ひこまれし悪事を切すて女は異見に取入て養子に行ふと身の懐と天晴きは發明後室や  
まも其所をば存わつて知らぬふり親への言わけ大まの金もをしまの賢女の智慧只懸のへ  
に身を忘れさわくと思ひしつづかしさよト歎息してぞめたりけるがや、あつて得「今さら  
悔んでかへらぬとその頭髪でのかへられぬ十一のへらぬ時つる程におぼしめしたる半七  
さまおうたがひの起るは必定 得「若旦那も意地づくにあつたらば養子あんどに決して行  
ぬと被仰らふし十一サア當惑な此しだらト親と伯父との心配を見る三勝が氣のどくサさり  
とて手づよく出されば操を立るとならぬばせひあく不孝になりしとを心にくやとて疊の塵  
をひねるより外所爲もなし伯母も涙の眼を拭ひ 伯母「このうへのどふも仕方がない此子の  
髪を延るを待てマア今宵と伯父の看病いたさせたぬとお願ひやて亦明日の得「チ、明日は  
三勝の急病と披露をしそれから髪を延るまでマア此外には思案もあい伯「髪掛かるとも用  
ひての直に知れるの傍輩の女中かへつて浮名を立られやうや十一いづれ病氣と云がよから  
ふ今奸心の所で半七さまのお氣がそれて、此十平が何分濟ぬ私のは是から立歸つて伯父の病  
氣が手ばさされぬもへ三勝ことこのモウ二三日と願て置ムアハヤ是まで嘘いふたこのない此  
十平忠義の爲どのいひながら嘘で固める今度の一條さて是非もないとではあるト老の癖に  
て性急にいとまを告るせわしなさ得方を出ししが途中さすが思ひ出す子への間の親心  
たつた一人の娘なれどお主の爲に不便やナア今の若サに切髪の刺ねを心の尼法師とふの仕  
やうはないとかト思ひす足の歩行さへとかさどりかねし思愛に迷ひて辻をどりちがへ路を損

して心付「ア、血迷ふたナンノこれお主のためには我子を身代それから見れば何でもあ  
むトいとまを告ることを願ひけれ

これより十平は後室に三勝のひまを五六日と願ひまた半七の養子のとをどりとからひけ  
るが後室の心にかあひ半七も大師河原の途中で逢し娘にて知らぬ方にもあらず兼て三勝  
のす、めしとあればまづぐ、此身を固めるにしくとあし亦笠谷の家よりは四増倍の先方  
なれば母はじめ兄其外も達てす、めしもへ得心なし娘の方は兼ての懸望早速相談ひけ  
る

三十二

扱半七の三勝が伯父の見舞に行てより引つゝいたる急病と聞て心もやすからぬ彼是に日  
を過したづねもやらぬ其内にとや鴛入の吉辰と今日を賑ひふせわしあさまた今さらにおど  
ろかれ氣にもか、れハ心のたけを筆にいのする巻紙も胸を焼書給半切されぬ二人が中子  
とは神もあこれと玉へかしてこまぐしるす花形のやさしと見する倭文字封の二重にする  
かけてとかれぬ心押粘を付て密に姉を頼と他知らぬやうに三勝へお届をされて下さいま  
トさすが親身の姉弟心置を頼母一と抑半七を懸望に貫はんとする先方はいかかる家とた  
づぬるに所はあしか姉多川にて海へつゝさし沙入乃泉水筑山草木まで茂り榮る繁昌の他も  
うらやむ一ト構へ乳母や腰元大せいにて娘の病氣を保養のあぐさみ釣をたれたる庭の池  
「コンとらん遊ばせ此様な海老が釣ま一た娘「チャ、くやんに能釣たのふ手前は上手だヨト  
莞爾笑へは乳母は歡び 乳ヲ、久しぶりでお嬢さまのお笑ひ白を見ました 娘また空兵衛



はかへらぬかへ乳「ハイまだ歸りませんがあちらすお案じ遊ばしますな先刻乳母が待乳山へ使を遣はして觀光といふ人に墨色を見て貰ひましたが此は縁談の訖度出来るとしてよこしましたといふ折からに腰元が ▲「モシ」くお乳母さん空兵衛さまがお歸りト知らせに娘のいとくと娘乳母や空兵衛が歸つたことおと、さまの方へ出たらふから私も奥へ行から髪を早く結んでくりや乳これとしたりとんだとをマア「くお醫師さまに聞て上ますかるとつみを遊ばしますお今に空兵衛がこちらへ参りますお待ちはならば私がちよつと承つてまゐりませう 娘ヲ、そんならはやう行てたもトせり立てやる娘の一途病氣もいつう何所へやら返事をよ、に松浦瀧佐用媛ちらでわこがる、思ひの石にもあつかねじ若も願ひががあとすはあの泉水の水底へそうじやくト覺悟して顔色さへも常ならねば付添ふ女中も手にゆせを握るばかりに染じける所へ一家の若旦那ととなへられたる墨太郎成之甘を七ツハツとして色さへ名のごとく黒く憎氣を生質 娘に心を通として 墨お爾さんのおお梅とごふだの 女ごふも同じ様ではかくしく遊ばしません 墨それのわるい久しく逢ぬから今日のちよつとお寐間へ行てお目にか、らふ 女「イエ」くお寐間へ入らッしつてのわるふございます 墨なんのわいらがだまつてゐる 女「イエ」くそれでも取乱して入らッしやる所へいどおたでもお留ませとあるとへ 墨「おん」の「く」おれは録も同前やがておれが女房だ死れた伯母さまが園は手前の女房に遣るといされた其おれに何れ遠慮があるものか取乱さふが寐をへらふが大事さい 女「イエ」く何と被仰つても 墨「ハ」強情な女めらだ病氣



扇面を得て  
於その  
意情を  
ます



見まひがあらぬとの餘り無禮赤分ト腹立貞よこしもどもあされはてたるばかりなり折か  
ら乳母の空兵衛を伴ひ來り娘の寐間へ通りて大零調ひたるやうにすければ娘の嬉しさいと  
んゝたなく娘それでも半七さまが何と被仰るか空「イエー」あちらでも餘程お氣のわるほ  
様子娘「ナ、嬉しいト思はずも身をふるはして必付貞赤らむるも理り也乳母わたくし共もど  
もぐいにお嬉しふございませすがお聲さまがいらつしやつてから只今までの様にお我儘を遊  
ばしてとすみません爺さまへは孝行お聲さまへは貞節お氣よさからはぬ様になさりませ  
へト

そだてし乳母の信切にいふをいつよりおとなしく聞も願ひの縁むすびかあふといふに歡  
びてたしなむ心かくどもまだ三勝はしらざるべんおなたを思ひくらべて物の哀  
れを知り給へと看官の娘はたちにはナスにせん

第六章の はじめ

我身ひとつの秋ならぬ物おもふ日は桐一葉庭に散るへ哀れ氣に過りしかたも思ひ出す彼  
半七が案じ顔折からお園の側へ來りろの「どふぞなさいましたか半」あんだか塞で來た  
その「それとわるうございませすへト顔を見わけて案じ入る恍惚子娘ぞかはゆらし半」ナ  
ニ不斷のくせだヨその「イ、エ全肺此間はお顔色がわるふございませすものすいふ時乳母  
も次の間より來るその「ノウ乳母やお貞の色がどふもわるいナ」乳「左様でございませす誠  
には苦勞が座います様だから案じませすヨナ」お嬢さまホイ又ツイは遊ばさませすナ

のをわすれましたオホ……ろの「ナニ尚お嬢さんといわれる方が能ヨうば」それでもわれ  
は恋しがつては新造さまにおなり被成たものを半「最倦たのかへ余り早いノウ乳母そ  
の「ナンノ勿替ない倦ますものか貴君こそお否で被爲入から私には何でもお隠し遊します  
半」何をかくすものかその「イエー」それでも私を隔ていらつしやる證據の大そうは苦勞  
遊ばしたは由縁さまのおはさしをすこしもお明しなさいませんでございません私とはど  
海から其ことを聞きましたヨノウ乳母乳「左様でございませすこれの旦那さまがおわるふは座イ  
ますお隠し遊ひすよりはは相談のうへで此方へお引取遊ばすがよろしふございませす。ナニ  
一人や二人の女中は殿方には當然でございませす半「これはしゑり乳母までが其様ないやみ  
を云か成程實家に居た時側ちかく仕つた女も在たが今での死んでしまつたからしゑたが  
るまい引取たくつても地獄極樂へ左様言て遣るのだからマア出來ねへ相談だその「マア  
嘘をおつさ遊ばせ先月私に聞ましゑ誠には客儀もお心づきも半分がなくつて貴君に惚さつ  
てゐておなたもモウ／＼ひどくお惚さすつたから今までそれに引されては養子に被爲入  
すにお宅にばツかりお出遊ばしたとナスことを聞ましゑ。どふを見たいものでございませ  
すへ其様にまで貴君に思われるとは誠にマア仕合な方どふぞわやかりあふございませす半  
「死んだ人におやからずともいふことだそれ」アレまだ嘘をおつた遊ばすノウ乳母トこれより  
乳母もともぐいにお愚癡をあらべて恨をいへば半七も詮方なく半「其様にうたがふあらば念  
を晴させて遣らふ見せまいと思ひまつて仕舞て置たが念ばらしたトいひながら小簾の引



出しの奥の方より帛へ包みしも乃をとり出し半「サアこれを見せるからたれも来さる茶座敷を乳母も一同に来るがい、トいはれて二人も氣味わるくもしや腹でも立しかど。さうよなくしなから半七乃跡についで二人とも園に入れば半七は半「サア」是を見て念ばらしをするがい、ト帛包をお園に渡せば手を出しかねて娘のふるふるなる一ながらその「わたくしは何だか胸がささくいたしましてト怖々ひらく帛の中思ひもよらぬ嶋田醫これにそへたる一封の券の則遺書なりお園のひつくりその「ア」こわいト投出せば乳母もどもに肝を潰し乳をふしたとでございすか私も何だか怖ふございす半「ナニ」こわい譯すこしもさい先月十三日の晩に川へ身をなげて死んで仕まつたのだトぐみて。その券を讀んで見るがい、左様れば分辦とだ「い」へどもさすが女氣におそれ驚き顔見合何とこれへもあらばこそ娘も乳母も黙然とへ半七券をとつて乳母にさし付半「サア」乳母讀がい、ト手にわたされよんごころさくひらさ見ればさるうつくしき手跡の文章「サア」誠奇麗奇お手だ「い」ひながら中窓とさうりど明け乳「サア」お嬢さまよくお聞遊ばせト操ひろげたる券のあや筆によじこし口紅もりたるところ知られられ

連理の枝も今りとや浮世の義理の隔垣過り卯月の御  
別れ斯もさうなほさうの思ひ極め一筆あめらめら

あま此身のきき覺悟のりり候へとも直さるあめ  
き御別れと夢あを知らば御顔を未来世も忘れぬ様  
とあめめあめらさるごとくと御りとな申上りりえ  
ゆのを神あらぬ身のともあさら伯父のやまひあせり立  
られ何の晩も御目あめられ候をのをと心て異見氣  
ととけあしはるそのあし御別れをれが此世の御顔の  
見とさめ最早お目もとの限りごとと思のりりとの悲一  
とさるうらあめらごの身あめら心をなみどれを泣きさん涙  
ゆのをぬ胸ぐるさせめて最一度お顔の見とさめ一人  
駈りぐらお屋敷へとぞんと立候へとも逆もあめらと御  
側もせられぬ御縁と知りあめら一旦御別れをわあし  
もしや御了簡達ひのありさうさ命もりんと御り  
しとぞんと上候御身のうら枕とありあめら一ツもた親



の忠義も水に泡とらふ候りなるとのうらむ一々思案の  
 うねはうらふ父と伯父との強異見身を切よりゆはらふ  
 しく不孝の罪を悔みらびきぶふく物とられ申上たると  
 姿り物とらふとも御まへ様や後室さまはお身のうへまふ  
 ね世もあま母の後世りのり申ふく草乃庵に住まふ  
 叙ゆる一候様申て聞入ねまをぬ老乃齊伯父の悴を夫  
 婦もあり家を懸との悲一死云付

ト讀かけながら舟のうへに乳母は涙をばら／＼お園も始終顔をもげすまた今さらには  
 七が泣じと奥齒のみしめて横に良とぞそむけりる

七才の時より御側もはとめつひよ一度と御まはるゝと  
 ちほはあともあふ和合らふらのそ入／＼御まはるゝと  
 の時をぬらふもあまの御まはるゝと

は内ら／＼一々誠もあつと一々おまはるゝとめよらわをね  
 りまへ／＼との勿躰なく君もあまの御情うけ一此身の  
 果報の末の操の尼となり恩と情のお禮とと極め一あ  
 ころ親知らず重たゆうへの小夜衣りさほくお目あか  
 る時何面目もあつとあまの御まはるゝと男もあまの御まは  
 らんせあまのうらまへ／＼口惜一候ゆる尼や法師も成る  
 あとの仰りあはそて居まあまの黒髪あまのゆまよ男  
 を保とせらりらる事とびづらりなり／＼ああめを  
 そむくものとりお命と親の座めを髪切りの  
 心り／＼千々／＼とあまの黒くさ

うらむ／＼あまの御まはるゝと  
 うらむ／＼あまの御まはるゝと  
 うらむ／＼あまの御まはるゝと  
 うらむ／＼あまの御まはるゝと



伯父の御方より御出せの儘伯父の方より人となり  
 りらう一御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 候中より御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 さぞ御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 りと御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 とも御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 よら御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ  
 も御出せの御出せの御出せの御出せの御出せ

ト讀か、られてお園はといめその「乳母や鼻紙を持て来ておくれ知らさいと、はいひなが  
 ら此お方の心の中思ひやられておいとしい「ア泣やひまですつておくれトひせかへりたる  
 お園より半七が心はいかならんおは次の巻へ書つてくぬの哀れと人々の身のありゆきをよ  
 み給ひ、人情を知り哀れを知るやさしさ人となりぬべし

貞烈美談園の花初編了

貞烈美談園の花二編

江戸 狂訓亭主人補綴

第六章 ついで

お園も乳母もや、しばらく涙にくれて有けるがまゝお遺文を採ひろげうばエ、今何といふ  
 文まで讀ましたッけチその「樂み居ひ甲斐もなふトいふ文章までだまらば「ホニニ左様でござ  
 りましたッけチ。チ、よ、でござりますエ、ト、アレサお嬢は其様にお引遊ばすナ

お園も重なる身乃難儀申向け候てを我身の取すふと  
 りあり思向る人々難儀もかゝるなりとてその身を過  
 候てと貞も操も破らぬをあらぬとけとてをさうあつ身  
 あし候へ死ゆより思案もあつ十三日にお祖師様の  
 御命日去頃御貸下され候御題目あれも我まゝと御あゆ  
 りあららうとぞんとあゆらも後世の爲御あつと申請  
 祈りよりけりあゆとてり、亦此黒髪を御あつ様は御差  
 圖みて辰己ふととあゆむをび候島田髪ちりごろあつ



ものあつらせめて御手もあれさせ不便と物候しめ下  
それ候りしつらむらり草葉乃蔭よて御嵜し

トお園と乳母と永文を引つ戻しつ泣ながら その「モウ」後ハ讀まいヨ誠に悲しくツてか  
わいそうでならないものを うは「ホンニ左様でございませ私も涙がとまりません若旦那さ  
まれおいとしいとおぼしめすも御無理でございません顔色の美しいのはいくらもござ  
ますが此様なあゝろざしのお方ないものでございませぬのやうきものでも自分の惚た  
その人なら縦令男ためじやとて一年と別れるとは出来ません左様して見ると貴君はちッ  
と實が薄ふございますませとナスに貴君もゑで斯ならふといふ女をふり捨るとゆんまりな  
私 が男だと此女中に之家も命も捨ますハ 半「イヤ」それハ了簡ちがひださかし女の氣  
でと左様もあらふが凡世間の人が勘辨のつよハ人々や勘忍の深い人を男らしくないの切はな  
れがわるいといふが男の慈悲で女の不實を見ぬ顔するとのろいと思ツて馬鹿にするのが  
いくらもあるがそれから見と此三勝となら家も命もといふはづだぶそふしたときハ親兄  
弟に恥と敷きをかけるばかりで両方のためにならぬまたこの任義は三勝の親が此身ハ忠義  
の一途にておとなしづくにせふともあるをいやまりすぎて一人娘を殺して仕舞てさぞ心で  
悲しからぬと察して居る その「ホンニおし」ことばはございませ私ハ貴様のお心をお察しサ  
てせふも涙がこぼれますこの嶋田を解て私ハ入髪にいゑしたふございます 半「なんの縁起

のわりいよすがい、その「イエ」其三勝さんが生てお出なさるとならば此方へお呼申し  
て睦しくいたさせうに此世にお出なさるから詮方がございませんせめて此髪を入レ  
がみにいたしたら三勝さんもお側に居なさる心もちたらハ此身を二人まへとい無理を願  
ひでございませすが三勝さんだとおぼし召てさうぞ不便にお目をかけて下さいますし「いふも  
恍惚の性一倍顔赤らめてさしうつむく半七も満足良 半「イヤモウ如才のさいそなたの發才  
おいらハ果報ものだ三勝といひ其方といひいづれおどらぬ心ど顔そうハ其方の心なら鹿  
未にしてよいものか三勝も御葉のかけからさぞ悦んでのやうは「うは「ナ、ホンニよく  
被仰ましたささずでございませ世間知らずのお嬢さま何時まア其様におどなくおなり遊ば  
したそのおぼし召で私ハ安堵いたしますお爺さまへ被仰様に或儘ばかり出やうかと毎日  
くお案じて居ましぬにモウ「私がお側にいらいでもモウ大丈夫でございませト乳で  
育てしお主をば我子のやうに思ふのとすべて浮世の女の情かあしき中に乳母乃よるこび半  
七ハ赤をとりわけ 半「サア」後はモウすこしだト以前の文を巻いて 半「ドレおれが讀て遣  
らふ

そのうらむくも何れハ御捨被遊候とゆふら  
ム〜〜〜は此文もゆふらその御側〜〜候  
様それのまゝの御側〜〜千代よりゆふの御





榮の世あり達の臺に端もくも御臨仕候御ゆる一被下候  
 やう夫のそこの一みせりらる一死出の旅路をのめれ  
 候まと思ひあやま一あとの業に十とめどくくその一ッ  
 ものどまららぬ筆のあと渡あはれとあう一とらう  
 残一ら一はくあは文をばらう一をのりとりぬ一も  
 おまへさあきの御ぞんトゆきととムくらああ一とら  
 あふくをら一はくあは一をのりとりをさあ一あま御見  
 わけのちを願ひあがり一し

三勝

若旦那様

ほもと

くらあゆ一あの世界をのめらあま御にせられあ  
 思ひありせをまららるを御名残と一く草葉乃陰もて御



夫婦様の御壽命ののりなるらば候御後室様へ是まきの  
 御恩送りゆりゆりさすあさうらうらう候へども今さら甲斐  
 斐あさめて御名残よ一筆とぞんと候へども却てとぞり  
 りと和らぐ君よりよしあま御願ひのりまを盡ぬ様よ  
 と夜明もちうく候ゆゑをいれ筆とめ候し

半「ヤレ」くあがい書やうぶ その「モウ」くさふしたら能ございませう涙がこぼれて此や  
 うにト泣いらしたるお園が目もと亦これ稀なる一箇の美人嗚呼半七が身は入味持薬の始終  
 かるべし折からとりつぐ従女が 女お表へ安幸さまと被仰るお醫師さまが入らせられまし  
 た 半「チ、その醫師とおれが大心やすい人だ久しく病氣だと聞たがコウ」くお園今来た醫  
 者のアソソフ去頃高輪で逢た坊さんだが爰に呼んでもよかるふノ その「エ、および遊ばし  
 ませぬのお人のとんだ能さそうお方だの字 うば左様でござりますお氣の輕いとしてあ  
 のお方には屬のお恩がございます これそのと半七たのありおていじめておひしどきとな  
 しとどさつ 半「おんの屬のおれがのだ その「イ、エ」く貴君のかへせと被仰るのをあのお  
 人が宜ござりますと言ましぬら貴君もしかたなしに下さいました 半「ホイこれのしたり左  
 様だつけかそんならアそれにして乳母やとりはからつてくんお何も面倒にせずとい、マ

うを「ハイ」く畏りましたト立て行さて薄命で用ひられねば腸寒論も相應によみて古方も  
 辨へし身を草澤醫者と賤しめよんさふろさく彰簡醫師となりゆく類となるぞのし六枚では  
 つたくと殺すなりとは川柳のいたづら口さうしたとに極りのせねと立派ありとておか  
 く由断はあらぬ玄關附人目をつくらふ薬探待して置のが山醫者とは知つても裏家の醫  
 者さまでの世間がすまぬと病人にも見ぬのみつくる當時の人情下手も上手もわからばこそ  
 こけをせしをする薬籠などの光りを見せる流行醫者より彰簡醫者の罪のかるくして人命を  
 損するうれひなしやもこの醫師が訪らひ来て又如何あるとかあるその次の條下をよみて詳  
 に知りたまへかし

第七章

さても稲田安幸は舊恩深き半七方へとしめて來たることなれば笠谷れ家へいたると違ひあ  
 らたまりたるその風情案内につれて奥に通り半七を見るよりもはや和らぎし輕卒にて安  
 さて久々尊顔を拜しませぬいか被遊ましたかお祝義にも出ませぬもあさだめては立腹で  
 もございませしが種々の取込がございまして聞もなく大病のイヤ既に地獄へ轉宅いぬす所  
 でございましてアハ、ハ、ハ、ハ、ト笑ひながらお園を見あげて 安「イヤこれは奥様で被爲  
 入ましぬかト亦別に首をさげて手をつかへ安「ハイその後とは機嫌よく誠にいや高輪の儘  
 でございます。イヤラツかりいたして居ましたか半元服におあり遊ばしました手見けてお  
 美くうよくお似合なされましたト例の口まめならべたてしやべる所へ従女が手毎にはこ



女酒肴これよりしたらく酒盛ありて安幸のやる酔機げん安「トキニ旦那私之塚地へこの間  
 轉宅いたしました餘り引つゝいて病人や何かでござりますから住居でも替ましたら宜らう  
 と存じまして夫からの思ひつきでござりますが、イヤ奇妙おい、景色で海をすツかりと見  
 晴しますそれに此間去お屋敷から小倉の色紙を拂ものが出ましたか誠に結構らしい品で  
 ございますが眞偽の程がとぬも知れませんが何分旦那の鑑定を願ひたふござりまするがと  
 か此來駕が出来ませうか鹿酒の一盞も差上て毎度の恩をすこしも報じましてとせせば大  
 そふマアだん／＼と厄介に成たは禮をさしくづしにいたしたふござりまするイヤさかし當  
 時に千金の身身のうへいかいでございませうか半「それの千萬 忝き私も久しく家内に  
 ばかり居ますかいつれ近い内に其色紙の見たいものな何とせでも見られるといふ品ではな  
 いとの「イヤさう云ものでござりまするかとの問貴君のお留守の時墨太郎さんが小倉の色紙  
 をお持なさつてお爺さんの方へ届けてくれると被仰て乳母に渡しておいでなさいましたか  
 ら跡で見ましたら歌が書てござりました半「ナンノめつたに正真のがあるもれか何といふ  
 歌だか百人一首の歌だから覺て居るだらうその「イヤ、エ百人一首は不殘ぞんじて居ますか  
 あのの中の歌でございませせん半「なんだかあの人のいふことゝあてにのあらねへ。トキニ和  
 尙おめへのは實正かの安「イヤまづ正真のでございませう半「うたのたれたへ安「エ、二條  
 院讀岐でございませした半「ハテナそれじやアこれもわからぬ安「マア何にいたせは來臨  
 の上で半「ろんから左様かの安「わが袖の沙干お見ぬを御覽なされてくださいませしとヤ

スとすみし勝手か半「イヤ／＼折角の信切をあたにのなるまい今ツから出かけやうトお  
 園と乳母にかたらひて菊平といふ奴隷をつれ庭の水門より舟に乗彼菊平が楫をわやどり忽  
 ち塚地へ乗切て安幸の方へいたりければ安「サア／＼お客だヨといへば女房の飛で出で  
 女房「サア／＼わか旦那ららへいらッしやいませト中には安幸夫婦の酒肴を用意さ  
 して半七を二階へ伴なひんとて安「サア二階へ参りませう半「とんだい、宅の海を見晴  
 してとふもいへねトいひながら鼻紙入より小判三枚取出し半「コレは今夜の土産だヨ家  
 見の祝義とまた此間へ急度しやせう安「これは誠にふそれ入りますトいたゞいて脇へ置  
 折からはこぶ酒肴しばらく盃とありて半「トキニ小倉の色紙のどふだ安「ハイ／＼只今  
 トいひながら女房お鯛に何かひそ／＼呷さて安幸は肴を二階へはこび安「旦那どふしても  
 二階がよろしうござりまするサアマアいらッしやいませトのしごを登る安幸につゝいておが  
 る半七が半「イヤこれはとふもい、さしだドレ／＼と一をいいたゞきやせう安「今  
 お酌をする娘をよびにつかはしました半「さうかそれの奇妙だトいふ問はとなく女房は娘  
 を伴なひ二階へ來る半七は酌に頼みし娘をいがある女かど顔見ゆはせてびつくりし半「  
 ヤア其方は三勝とふしてマア此世を去たと思ひの外トあやしむ様子三勝も先だつものは涙  
 にて猶豫なせしが思ひ切て半七の側へより三「おあつかしうござりまする膝にすがりて生  
 弊も身も代もあらでふるへ臥人目も恥もうちわすれ嬉しなみだぞ道理ある半七を見て安幸  
 はにこ／＼と笑ひながら安「さんとこの色紙の正真でございませう入こそ知らぬう／＼と問



もなし。モシ旦那ごふでございます何程發明な方でもこればかりと知ませんたら半一  
 イヤモウ何だかまだわからねへ夢じやア有りへか今日もけふとて書かきを讀んで涙をこぼし  
 て居たごふもさつたりわからねへ狐にでも化されはしないかトうたぐる風情三勝は流る、  
 涙を押ぬぐひ三「そのふうたがひの無理ではございません死そこなつて今日のおめもじ  
 日柄が立ても片時と忘れぬ貴君のお顔ばせ夢に見あげた其時の猶いやまざる凡腦とやらモ  
 ウ〜誰が何と申すまでも義理しらすと笑はれても今さら思ひ切ことは出来ませんかなら  
 ずごふも見捨なふは不便かられて下さいます安幸さまのおかけで命をたすかつた此三勝  
 ろれ〜親族もおよばぬは夫婦のお情ごふを貴君からお禮をよウく願ひ申上ます半一  
 イヤモウおれも同じこと手前がわるく義理だてをしてつよく異見をいふゆゑにそれから此  
 方も恥入て養子より往たもの、せめて手前が存生居ることなら折節おふを樂しみにする  
 必死んだと聞たそのとき俱に死ふかと思つたくらぬだものナ何今さらに見捨るものか  
 それについてもごふして命をすくはれたかさつたり情由がわからぬ。身を投るとの遺書  
 に親父も伯父も氣ちがひのやうにさがしたさうだが見詰の橋の中程に見おぼへのあるさし  
 櫛が落ちてゐたもゑ其川を見たら川下に女の死がいがあつたもゑ早々に引取て野邊の送りも  
 何もかも不殘母人さん 貞心院の お情で此半七もひそかに呼よせられて念頃に向合せいと  
 の仰涙ながらに死骸を見たら其佛もかはりはてトまた思ひ出す半七か此座をわすれて涙  
 とゑ半「おんの因果で此やうな哀れも最期をしたと歎と身もふるはれてくやしいはど泣た

第八章

は夢か此場が夢かまだ迷ひが覺やらぬト狂氣のごとく見えにけり

誠を見するためならねと自然と顯す半七の歎きにいと三勝もわれを忘れて聲をあげ三  
 それほどまで私を不便とおぼし召すか。そのお歎きを見るよつけしはらくながらも此  
 世を去りしとお聞せすた勿躰なさと 涙をどぶろけ堪忍遊ばして下さぬまし。とは申すも  
 の、私も死んで居るかと思おれす 半「實に菩提所へ送る其ときいおれも冥土の道連に既  
 にならふと思つたくらぬだコレお寺からおくられた法名までも此通り寫して爰にト取い  
 すは夏書にあらで二世安樂せめて未來の夫婦ごと替て懐中おしたる戒名 妙操院再對信女  
 半「二七日の追善も四五日前に備へた香氣又書置の十日以前にといいたのだ精進するも養  
 子の氣兼ねあからさまにいいれもせずさまじ遺物のこるも悲しき哀れさも日にますか  
 ら四十九日も過たらばわれもお寺へおさめたらへ別供養もしてもらひふと思ひつめて居  
 た所だサアア生た譯をはすがい、三「いつもかはらぬ後室さまなり貴君あり誠にあり  
 がたふ存知ますさぞおふしんでございませう安幸さまごおまへさんからお咄しなされ  
 てくださいまし安「ナット合点いぢ、らばエヘン若旦那アとつくりと御聽聞ト扉を採て  
 四角にすこれば半七の笑ひおがら半「また和尙がのじまりか女房「モシヒやうだんじやア  
 ない早く譯をわいなしあさいナ安「ナットよし〜四文のお豆で惚ら糖かア、志かし此  
 本を賣出す時分は流行がらがうだらうイヤそれよりか女房も其方はお供へ酒でも飲して



たもこればつかりが私のお願ひとふ予かあへて下さりませ頼みまするとばかりおてすがり  
 附たる姫鷲のテテンのなれがたなき女「い、かげんに馬鹿をいひも其様を義太夫節が何  
 所にあるものか子三「チホ……安「イヤアめつらしく三勝さんの笑顔此春見た儘だヨモウ  
 く安幸も安堵いたしました。トキニ今夜の物語。エヘン頃は七月十三日残る暑の彌まさ  
 る爰に尊き醫師一人しかも美麗の色男余義ない用で夕方より腰に疊で小提灯端手を浴衣よ  
 黒緞の羽折三三餘り流手でもありすまい安「ナット東西の東西……小七をちよいと  
 犬をどし市原邊の去方へ参つてのららずお生酔其所へ倒れて正酔をうしおはんとする耳元  
 へ風もろともに入江町鐘はたしかに入ッの時酔てもわすれぬ十三日南無三ばう仕舞たど心  
 附たる題目講書遅くも顔を出し言わけせんといとまを告すたたく歸る見詰の橋上しよんは  
 り立た女の形勢ハテわやしやと伺ひながら彼が後へ近づくととも知らず「橋上何かはし  
 らねとくどくと哀れに見ゆる其風俗たしうに身投と見てどれどもしやつまらぬか、り合  
 になりもしようかと用心してよくく見合す其中にはや思ひ切命の際一ト聲ワアツと泣出  
 した。イヤその聲の物哀れサトムへば三勝はづかしさうに三「アレマア嘘をお吐なナニ其  
 様に泣はしないものチ安「イエくそれは大違ひあの時之十が九死んでお在だものチどふ  
 して泣たか泣かいか御存じなものは半「夜中の時鳥じやアあるまいし泣たか泣かいかとは  
 かつな争ひだの。それから跡は安「そめて時鳥の半「茶納か安「アレサくさう雑言て  
 へ行ませんエ、ト何だッけナニサそれからやがて手を合せ南無妙法蓮華經くどお題目を

二三遍唱へて既に飛込を此方も一生懸命にいだき止るをビツクリしアレどふ予となしてゐ  
 ろしてくださいましといふ聲さへも聞なれたらだな聲音と極いなさす無理に後へ引戻して  
 お貞を見ると臆かげ大恩人の戀人も此方もビツクリ夢ではいかど眼をねじり亦わいて  
 見ても猶その人娘の一向氣もつかず死なせてくれるとあせるのをしつかりおさへてマアま  
 つた心を静めてよく見たまへといゆる我等は安幸たハテこれしたり氣をつけられ「稻  
 田安幸を見すれてカッリヤ貞をとつくりと半「チイく和尚さんモウ文章や聲色かたり  
 を止て地ではなしてくんねへな安「アハ……三「マア酒でもおわがりや安「ハイくわ  
 るくいはいれまいと思つてアハ……そこで子若旦那私が言ことにやア。コレ三勝さんマアど  
 ふぬふもんだ死なふと覺悟しあさつたは何れ容子のゆるとたるふがマアくせらすと私に  
 譯をおはさしなせへ膝ども談合若も若旦那をふり捨て他に色でも仕なさつたかろれが顯は  
 れてこのわりさまかと言へ三勝さんがアイく三「アレまたあんな腔ばツかりい、へ  
 左様な浮氣などいございませんとすましぬ安「ム、なる程左様く其所で私が言のにい  
 假令どのようちとがあるにもせよ死で花見は出来やせん三「そのお志といかばかりかか  
 嬉しういございませすがどふも生て居られせんお慈悲に見退し被下まし安「イヤくな  
 んど云ても今はころさぬ一ト先私の宅へ来て委く譯を聞たうへどふも力におよばずは其時  
 死んでもおそくはあるや三「ある程それも左様おれと思ひ切ての今宵の門出再度の思ひ  
 をしようよりどふぞとらつて放さぬ安幸さん安「此方も臆のつやくた



け放して殺してよいものかと段々譯をいひつくし三「とふく其所での承知あれと心の内  
 の暫時の氣休透をぬらつて一ト思ひ安「それは此方も先刻承知願を引はして三「わたし  
 の帯をしつかりと安「ついで歸る此家の内やうくと引こんでも三「たゞ悲しくつて泣  
 ばかり安「そこで夫婦が其夜は鴈番三「遊るふとはさし置いて手水に行にもお二人さん安「  
 だんく心の落着様子三「誠に厚い御深切ツイやだされて是までには有し事どもこまぐと  
 安「聞たは安幸夫婦ばかりお柔じなさるな他人には言ぬ三「かあらすよふ他人に安「  
 ナ、合点サ其代りおまへも死なずに居るがよい若旦那も此間にお連アて来る程に楽しんで  
 居なせへましそれも聞ず死ぬ氣なら若旦那のお身にも際るやうに世間を觸歩行左様し  
 て見たらお前故旦那も恥を斯の通りサアどうだ子と無理ふじつけ三「無理も異見も義理の  
 るお言葉安「どころへ附込だんくとやのらを入れて得心させ三「わたしも日がらが立にし  
 たがひ今は死ぬ氣も薄らぎまして日をば過せせ半七さまへ書置までをわけて置一ツに伯  
 父の所下さがすの必定また取戻してどのやうな安「チットそれは此安幸が命に代てもかか  
 くまひ申す大船に乗たと思つてお出させへと三「頼母しいおこ、ろよ安「死ぬのを止め  
 て私も安堵一日二日見合所他の投止の死骸を見つけて三勝さんと心得て葬式をしたその際  
 三「何所のお方かしらないが何のことお安「おまへの身代り三「さうして見ると守おい  
 たしたお題目安「題目講を思ひ出して歸る途中の橋の上身投にかゝる其人も同じ信者のお  
 題目介て見れば旦那のは秘蔵どころが、髪は二ツ鬘いくら結ても兎に角に三「聞わけぬでは





ないけれど一旦切たこの黒髪 安「おまへは死んだとだれもかも思ひ捨て今日このごろ三」  
 急とへ知るものがないにもしる心になつて浮世へは安「出られもせぬと堅意地も思ひ付  
 た工風は異見 三「わたりが髪を切て居て半七さまを呪咀の事も同じ事と云ふやらみわひ身  
 の罪障 安「それじやに依て半七さまが姿を替すに居るとのふと 三「左様聞たれば片時も二  
 ツ鬚がいやみなりまして 安「直に噂の入髪を 三「お借すて此様に毎時のお好き。ひく鬚嶋  
 田 安「さらば昨日日那をど 三「お言さるるを聞ぬ風俗 安「聞は留ると知りたぬる噂にば  
 り内相談者かし知らせもしたい譯 三「それぎり何とも被仰す心の内での樂しみに 安「待て  
 お居どの百も承知。所で噂アが俄の病氣他行のあらぬ愚老の身のさへやうく手煎の薬で  
 全快ろれから今日暫居まで 半「驅出して来てくれたのか 安「あつれば出かゝた和尙のた  
 らさイヤじやうだんでいせへません實に心配いたしました 半「イヤモウいつものとなが  
 らあか〜今度の骨折のちよつくり禮のいそれねへ聞て居てさへ汗が出たト溜息をつくば  
 かりなり

第八章の下

さて安幸は何やら用事ありとて妻もろとも下へ行は跡に半七三勝が久しふりなる對  
 面 半「ノウ三勝誠は奇妙な縁じやアねへか先刻逢たとき肝が潰れたせ 其着物何だ宜稱  
 だノ 三「仙臺平の半練だとかヤッます 半「だれた三「此方へ参た翌日之乃單物と謂を「半  
 「帯は何だ粘なしの小柳が甲州の緋織だのヤ其櫛はどふして持て居た 三「あなたのおか

たみだど予んじたらから死んでも持て参るつもりでお守と一袋にして置たから残りました半  
 「さう聞て見れば本庄は餘程都合が悪いかノ 三「ナニ其様でも在ませんが物領が胴樂で母  
 があまいといふものでございますから帯も着物も不殘。それいふでも宜ございますか外  
 に大變悪悪心などをたくみましてマア此間にゆるりとお咄しませうそれいさうとほ新造  
 さまのお耳へ端入ましたら大さわざでございませうとふも夫が亦苦勞になりますヨ 半「ナ  
 アニお園之誠に宜者だ手前の遺書を見て涙をこぼして泣入て生て居るなら引取て同所に居  
 たいと言たくらゐだから何も知れたとて案じることもないとして知れもしまい此近所へ普  
 請でもして其處に居るのい、安幸も此度の餘程の物入だの 三「左様でございます此まへさ  
 しも五兩三步で四五日前に買てくれました。そして單物も最一ツ木綿の縮而絞りと京染の  
 三重形れをこしらへてもらひました帯と前さしと都合で十二兩三步だとか聞ました 半「さ  
 うであらうしかし安幸も借金をしたらふ 三「貴君のお屋しきの名何と被仰すすへ 半「  
 フウまだ知らないか 三「どふいたして本庄では委しいと知れません 半「赤根養之進とト  
 聞て三勝ひつくりし 三「チャ〜とんだとでございませうそれで御用人の名は増井男三と  
 申しませんか 半「ナ、それに違ひないとふして知つて居るうとふも悪い奴らしいから由縁  
 はならない 三「その男三の妹が本庄の伯父の嫁でございます 半「フウそれで先日男三の  
 甥だと言て二十才ばかりの男を中小性に出したか本庄の従弟でいさゝ色の白い體分宜男  
 だが少しにやけた風の 三「ア、それではちがひございません 半「よし〜まだ委しい様子と



聞きか手まへを苦しめた代りにおれがそのひくひをして遣る三「ナニあの子は其様にわ  
 るいものではないとごいませんそして伯母も恩のあるものでございすからと云ふ御免し遊ば  
 せ半「チャ手まへと大分あの男のひるさをする奇手前と夫婦にしやうと言れた従弟とあれ  
 だナこいつはと云ふも怪しいはへトいはれて三勝涙ぐみ三「君のママ其様な浮氣な者とお  
 はしめしますと云ふいたしたら此胸の内があなたへ知れますたらふトおろしくして困る様  
 子半七もじやうだんもゑ半「ふれサ手まへの心の不殘おれが知つて居るめつたに申儀もい  
 はれねへ堪忍しやト引寄て半「手まへも此度の一件で貞も操もわかつたのよか十平と云手  
 前のおかげでおれが斯いふ身分にあつたからたどへどのやうおことがあつても見捨はせぬト  
 脊中をさすりながら半「それの左様と安幸も何所へか行てしまつて蠟燭が消か、つた呼で  
 貰のふト手をた、さにかゝるを三勝はその手をあさへ三「アママお待ちなさいまし折角氣  
 を利してつづいたものをお咄しは暗くつても出来ますトのあしの中にや九の鐘三「ア  
 子刻だそふでございす意地のわるひ夜の短いことだのやく歸ると被仰たが今すこし被爲  
 入てもよろしふございすかへ此後からお止すはいたしません半「ム、まだい、蠟燭をも  
 らつてト手をあ、く安幸の聞つけてらうそくを持來り安「イヤ氣の利たわかりだ眞暗な  
 中が餘程ながい幕かチ「ア△引三勝さんの嬉しそふなお顔は三「嬉しくなくつてと云ふいゑ  
 しませう知れたことと云ひます安「左様いわれてとモウ跡は何ともいふと出来ません  
 アハ……氣は強くななりなごつたらうちがい、正直もんだトいふ折斷半七の紙入の金を不

殘紙のうへにいだし半「和尚さん今も聞たがだんくの深切殊に種々の買物さぞ困るであ  
 らうが今日の持合がないママ是を取て置てくんなど小判小粒のまじりにて二十兩は紙に  
 くるくど巻て安幸に渡し半「またいづれお骨折のお禮の跡からするヨ安「イエモッ此様  
 にと入ません是でいふとと陸下をいたすのかへつてお氣にさひりますから平氣でお預  
 り申す誠にのりがたい仕合半「ナニくそれは買物の代ばかりだ命の禮の別にしやすそ  
 こで亦お頼みかあるテ安「へい何でございすか半「ナニ外のことではあいが三勝を入れ  
 て置様を住居の此近所にあるまいか安「へいございませうともまづ表が黒堀で間口が三間  
 半興行五間七尺の内二尺がエ、ひさしで二階の所の間口と同じと跡と平家すみし狭いが湯  
 どのものり雪隠と別に細いぬれ椽の小ひさし乃所を通して行どわかり窓から裏店が見ゆるの  
 がすこし底だがママ圍見へた四疊半ものり庭に相應石も入てあるし見越の松も緑日仕入  
 ではあし市松の疊といふ所がわやしい料理茶屋めくれと不省して一間の沓履のひらさ戸  
 を除にしてぐり戸附の格十にでもすればい、と半「これは何所よあるのだ安「イエナニそ  
 のくらゐ宅で能らふかどナスことサ半「アハ……つまらねへとをいふせ三「ナニ私其  
 様お家があるとナスはなしのど存じました半「わりい癖だまじめななしかと思ふといつ  
 ても其様あると云ふせ安「ハ……夫の陸だが眞正にありませ此度のまじめにエヘン半  
 コレサ最むだをいはいねへで安「イエくふの極實録も、から一町はとござりませすがす  
 こし廣すぎませせきか半「と云ふだ奇麗かの安「イヤその家ならば半分ございません直段が



八拾兩だどやますが家作の勿論内造作園でも何でも揃はぬもの一ツもなし十分おこしらへ  
 サ只不足は三勝さんの様かい、娘は今まで住はず去所の隠居が三「アレサ他のをわくる  
 いはすとマア實正のとを安「イエ〜」わるく半「コウ〜」そりやア實か 安「エイ實正サ半  
 「そんならばそれを掛合てくんち地請人のかめへに頼むせ安「エイ〜」のしこまりました半  
 女を一人と飯焚親父其外さし當て入用おものは不殘わつめてくんち何れかいらもわした來  
 やう今夜のママのやく歸らふ左様しねへと又出に〜いから三「お出に〜いよりかお宅がお  
 はちれ悪ふございませう 安「左様〜」三勝さんモウ〜」養子にいらつしたから大丈  
 夫で何でも側へ引つけて酒の肴は鰻と鶏切くのわあんと夢にも禁物持薬の私が七加減  
 滋陰降火湯を節々用ひて三「ア、ソレ御酒が溢れます安「チット身上釋尊衣裳三「チホ……  
 釋尊着ものとの何のとでございませとエ 安「天にも地にもおれ一枚半」ハ……勿辨あいとを  
 いふ坊さんだトこれより又少し酒をのさねて其夜の別れて歸りけり

第九章

存命てさへ思ひ絶男の爲に身退さのさきりめたりしとなれど死なねばならぬ仕義となり既に  
 死すべきうれ所を安幸の助に依死をどまれば縁の糸も如ぬ誠の相合て再會したる半七の  
 いつもかいらぬ深切にまだ凡腦のいれやらす別れしわどつ〜と寐られぬかどに思ひ  
 結過越かたや行末を案じ苦勞に目もあつて明日といひし半七れあよりを待て樂しとにわか  
 せし翌日彼家を買調へ女男の召仕まで何足らぬともなく萬首尾をあしつれば頼しさいの

んかたもあく是より三勝と安幸の方へ日〜に音信半七の來たるをたのしみくらしける  
 が半七も日毎に通ひ水もらさじと契りける斯て此程五六日遠ざかりしもゑ半七はいかに思  
 ふか三勝は待もこがれて夢になど佛ばかりもあひ見んと巨燈に寄て轉寐の枕元には種彦  
 の諸國物語といふ合巻と梅兒與美といふ人情本が借てあり折節旦那さまが被爲入ましたと  
 いふ聲聞て起上り明日仕立た御納戸の山まも縮面の小袖と袷巻の上にいそいで引掛て襦を  
 とり着丈纏半を見せるといふいやみお心はそこしもなければ急げばひらつくも美しく次  
 の間へ出迎ひ三「お早ふいらつしやいしました手しかし此間は毎日〜お待やました半「さ  
 うだろうヨおれも四五日用が重つて來るとが出来ないから誠にじれつたかつたどふだ盥梅  
 はい、か随分身を大切にして安産するがい、今日の大分顔色がわりいやうだ三「ナニ何所  
 もおんどもございませんが今朝權助がさあおいはなしをいたしたので吐しました半「それ  
 のわりいとだ最來月帯をしめるのじやアねへか随分氣をつけなヨ三「ハイ氣をつけて居升  
 ヨ半「どふ男の子をがしるものだ三「チャわたくしの女の子をがしうございませすは半「  
 女でも男でもい、のらはやく産が宜三「チャ馬鹿らしいことをお言なさいまし其月であく  
 ヨてのどふして早く生れやすものか半「ハイ〜こらつし〜つたそりやアそらと酒で



四十五

ものませねへか三「たい今左様な付ましたア着衣でもは着替ぬとばせ半「トキニ和尙を呼に遣つてくんち三」モウ權助を遣はしましたといふ時節稻田安幸 安「へい今日はわりのたふ三」チヤ能お宅であつたつけねへ折角呼にゆけてもお留まだといけないとお案じすましたヨ半「待兼たといひたいがあんまり早くつてまだ一向お肴も何も調とねへといふ所へやうく酒肴も出て暫らく盃ごとありて三勝は此程求めし三味線をいだし調子を合せて三「久しぶりだから何ぞかたりナ安」をふしてく此間はさつぱりいけません半「アアく酒をおもいれ呑してからサ三」夫でもたんと酔と寝ておしまひだものを安「サアく左様なら穴蔵でかたる様おるでもよくは語りませうト扇を持って膝を直し安「エヘンくかみがたうた 八嶋

「釣のいとまも浪れらへ霞渡りておさ行やあまれ小舟のやのぐと見へてを渡る夕暮に浦風までも長閑にてしうも今宵の照もせず雲りもやらぬ春の夜の臘月夜にしくもれぞなき西行法師となげけとて月やりのをとおもひするやみとしのふに下畧

安「ア、引くるしいくモウをふもいけません語るも聞もくるしとだチアハ……三「それぢやア私がおとなげなく一ツかたりませうチト調子を直し 清元の喜せん

「わたしやあまへの政所いつか果報も一森とやめられたるの身のねがひ

「不れ過る程ぐち赤氣に「心の底のしれ兼て「じれつたいでは「あいないな

安「イヨく相かはらすすまいとやますア、いまましい今夜の旦那が別してのるけることだろふイヤく早くおいとまをいたしませうト氣轉利してそこくは。歸る安幸それ跡は。惚たどふしの閨中筆にするすも無益にて好漢好女と自然察し給ふとあるべし斯て月日の立もきて當十月にやすやすと玉の様おる男の兒を産ければ三勝半七の歎ひたどへるにものもなくいよく深く契りしがそれにひさかへお圓はまあ懸舞ありし半七が此程家内も落つるすろりくしたるこのみあれば心一ツにくみかねて乳母とよくく相談し半七の母貞心尼にふまぐどはあしければ母の大きにおどろけてひそかに心をいたりけるさてまぬ半七の産せし男子を半次郎と名附て乳母を抱へ大切にそだて明朝の半次郎の宮参りありとて三勝と女どもに向ひ 三「ゆしたは旦那も早くは出だらう今朝の様におそくつてのあらあいま最成刻時分だらふと思ふから私も寐るヨ乳母も一同も寐なドレちツと半坊を抱て見やう うば「サアお抱遊ばせ賢にお鼻とお口元は貴嬢に生うつしお目つさは旦那も其儘何れにお似せてもあかわいらしいとつてりごぞりませすが 三「モウ笑ひそうなもんださうば「男兒方におそくごさひさすサアく御母上の膝へお出遊させしう折節に裏口より。とふ

五十五



ぞたすけてくださいましたと真くらやみより一さんに蒐まされ三勝のじめ家内の者驚かせる  
 が能く見れば女の少しの心も落付て三「チャ」〜おかわいそふ髪も乱れて衣類もト近付  
 よりしが利發の三勝 三「コウ」權助ヤ裏口をのやくしめて氣をつけそしてお霜ヤそのお湯  
 でも一口持て来てあげちモシマア貴嬢れそのお姿大振袖を召ましていつれ由緒あるは嬢子  
 サア〜とゆくは様子をお咄しなされましモシ〜ト〜と一向挨拶もあらざるゆゑによ  
 く見れば其儘息も絶たる様子人々これと亦驚き熊の脛やら延齡丹やら水三薬と大どいぎ  
 娘は死せるにあらすして全く瘡の發りしと見へ種々の介抱にすこし治りしや眼をぼつちり  
 と開た ちすめこれの最誠にありがたふ存じますアノ私の途中で悪漢に出會まして家來は  
 不殘ちりぐに私の捕へられました此所までつらまつて参りましたがどふいふとか其人が  
 こゝろんで私を投出しましたから一さんにこのれ宅へ逃込みましてア、嬉しいと存じまし  
 て氣がゆるみすすと持病の積がふりまされたがモウ〜大きに宜ございすすとふぞ私を  
 少しの間お置なごつて下さいましたと云ふる〜と云ふる三勝も不便に思ひ 三「それ  
 とマアほんにあふないと女はかりの家でございすすが貴嬢も女中のごとで被爲入すすから随  
 分お心易ふ思召まし今に此方の亭主も歸りませうマア髪でも結てお貰ひございすしマ、  
 御着用品がだいなしになつておりますマアわるくとも私の着物をアノお霜や奥の敷紙





の上にある辨慶さまの編ちりめんを更紗ひくをニッ出してあげてくんさしも「ハイ御着帯  
 のどふいたしませう三ツ、それ〜帯は簞笥のを何れでも出してあげておくれしも」ハ  
 イとお霜は立て行むすめ「イエモウ着物は上のよこれよしたのを脱ばよろしふございます  
 トいふうちにはや下女お霜と敷紙に載し小袖を三ツ帯までろへて持来れば三勝のこれを重  
 ね三ツサア〜お召替ならいヨよくはございませんが垢付てはおりませんトさも深切に世  
 話をちし着かへさすれば氣の毒らうにむすめ「まことにマアふしぎな女とで此様にありがた  
 ふ存じます三ツお奥へお出遊ばしませサア〜何にも御遠慮のいりませんアレマア奥へ  
 ト手をとつて伴ふ三勝つれられる娘も花の貞と顔またこれ一双の美人なりけり

第十章

さて三勝の家に入りし娘はいろ〜と介抱をうりて奥の方へ伴ればじめて心落着て三  
 勝の貞を見ればその艶色なると國貞英泉の書きたる美人尽しの錦繪もなかくこれにはお  
 よふまじさうつくしと眉毛のそりてあらねども歳の十九か廿才を越さず別て粹元おさやか  
 に耳元清く玉の如き肌は仙女香をすりこみある艶光てらく〜としてまぼしき程あり衣裳は  
 本結城の藍万筋に黒の小柳の半袴を掛り緋ちりめんの對丈襦ばん半袴の藤色と白天鷲絨の  
 帛袴帯と唐襦子と同糸模様縮茶博多の鯨仕立髪のかざりすべての粧や分なく珊瑚珠を袴

の花に磨上たる兩点とも重さうに見へたり後へ銀の糸打陰陽編帯と本金にて細工せし指込  
 真砂のふなしの櫛を横にさして立膝をして敷瀧圍をのづして脇に置銀の喜世留のながらう  
 を持し其粧ひ女も見とれる容姿なり三勝もまた娘の貞を見れば半元服の眉細く艶くとして  
 雨をふくみし花の如く自然と備はる其人品しちやかにして櫻を柳に咲せしとも云べしそも  
 く兩個の形容の拙さ筆にしるしがたし吉野初瀬のいろくらへ伊達と内美との違ひはあれ  
 といづれ甲乙なかりけりかくてお霜の三勝にいひつけられ娘の髪を結ばんと島田に結か、  
 れば三ツサア〜お霜ヤ。おまゝ島田にゆふのかへ半元服でお在だものをしも「マアはん  
 に左様でございしましたッけ子左様なら夫婦鬘にでもいたしませう亭君とお放れあそばさぬ  
 様にトいそれて娘の莞爾と心のうちに悦ひける髪をむすぶ中に三勝の其所等を取片付させ  
 三「お嬢さん明日よくお宿のお名や何かをお聞やてお使を上ませうマア今晚のとやくお休  
 みなさいませむすめ「ハイありがたふ誠に御厄介になりましてお氣の毒でございますトい  
 ふ中にはやみさ〜も察かし三勝と娘とまくらを並べいかなる夢やむすびけん春の夜半と  
 て明やすく経よび鳥の音閑暇に庭よりさし入る日蔭さへ障子にすつりてやう〜に起立ば  
 三勝の娘に向ひ三「アレマアおまへさんしつかにお起なさいまし未其様にいとくはご



いませんヨ、ひすめ「ハイ、ありがたふ心づかひで勞れましたからツイたんどふせりましたト  
 起出て朝の仕舞も済ぬ中、下女が取次「下女」モシのあたへてこのか女中がお出なされました  
 三「チャ、さうかへどふも何人もお出のなぬはづがト娘に向ひ「三」モシヤ、貴嬢のお宅から  
 ではございませんかへ「ひすめ」どふいたして私か此方に居ますとをだれが存じませう「三」  
 あるやと左様でございませう「コウお民ヤ、何といつて来たのだへ下女」ハイ、お通さまと此  
 方でございませうかどお目にか、りたいと申ました「三」どふも風だへ下女「ハイ、一寸  
 見ました所が五十才の茶煎がみで生壁色の襦子の皮布とやらを着てお連のお方もございま  
 す「三」そんならば「マア、奥の座し」へお通しやてお茶でも出しな。そしての下女「ハイ、三」  
 唯今化粧に替て居升から少しお待下さいましたとさうや下女「ハイ、ト立て行跡にて三  
 勝は娘にむかひ「三」左様ならお嬢さんお宿へのお参り認めおそばせお宅でもさぞお案じで  
 いらつしやいませう私ばちよつとお客へは挨拶をいたして参りますト立上り「三」お霜お  
 硯箱をあげさるヨ「ひすめ」まことにモウいろくおせわさまになりまして「三」何さつばり氣  
 とつさせせんヨ「下女」今お客さまかお坊さんをお抱寄さいまして誠に、お見ださわやし  
 ていらつしやいます「三」チャ、さうかへドレ、お目にか、らふト一間の隔紙さらりとわけ  
 客を見るよりびつくりし何にもいはず轉ひ伏せて貞さへわけされば三人來りし客の中わけ

ておどろく女客「客」チャ、どふなさいました何もある歡ささいませうと譯かわたりま  
 せんトあやしむやうす三勝と漸くに貞をわけ「三」お見わすれ遊ばしますも御尤願もかいつ  
 て居ますゆる面目次第もございせんが私の三勝でございませうお爺さま母上さま御免なさ  
 れて下さいましたと聞いてあされる三人の中にも皮布を着たりし女は半七の母貞心院三勝の側  
 へすがり附「貞」なんとへおまへが三勝だとトいひながら引起して貞見合せ夢かどばかり  
 おどろき「貞」ア、眉毛のおどしてないけれど七才の時から片時も側を放れぬ三勝じや  
 どふして、はトや、しばし貞を見つめて居たりける十平夫婦も死したりし娘に再會する  
 となれば嬉し涙を押ぬぐひ「十一」さて、とんだわけもあるものだどふも實正の縁ではなぬ  
 貞「マア、どふも譯で生かへつて居たか早くはなして聞せるがい、はやうくとせり  
 立られ三勝は猶涙のはてしなかりしがやうくに心をしづめ始終をつまびらかにばなせば  
 三人のその辛苦と操のやどを感じ入るこび合ふこそ道理なれ貞心尼も今日來り「は此程  
 半七の身持ゆしく家内に居つかぬ其仔細のこと、にわけある娘が出来てそれを世話してはく  
 めへに萬のことが手につかぬと聞いて三勝と知らぬもへ金でもどらせて縁を切嫁にも安堵させ  
 やうと十平夫婦に相談し來つて見れば世を去りし三勝なればなかく「半七が身持も無理  
 ならずと三勝に力をつけ「貞」ノウ、三勝かあらずとも案じまいヨ、たゞ一通り聞ものご心  
 ものと思ふで知らふがたとへばはしたない戀も其身にあればするとげぬなかと知りつ、意  
 地づくで無理な仕方も出来るものこれのそれに引かへて誠の道を立どやし男に出世をさ



せやうと其身を捨る貞女の鑑此様な女子が他にあらふか今度のとこ此は、が何所までも引請て嫁のお園にもくわしく理を。はなして頼んで見たならば聞わけのさみ子でもない相談づくにしたならば屋敷へ其方を引とつて随分世話も仕兼ね氣だてと噂と涙のその座敷へまゑも泣聲涙にてゑ、にまろびて入る娘貞心尼の又びづくり貞「チャとふしてこ、へ其方のお園三「エ、十」とふしてこ、急御新造さま十平女房「まことをいしぎさことをございませす三」左様あら貴嬢がお園さま知らぬととて昨晩から餘所外のお方の様に免なされて下されましその「なんのママ私ども同じと三勝さんと知らぬへ屋舖もつ、み陞ついてはんに思へばいつかしいかならずあしく思はずにくださいましヨこれからあまへも屋敷へお連中て私と二人で旦那さまを大事に仕やうじやございませぬかト常々思ひし心の誠のからず聲を高くあしける時丁度來か、る半七が何國の客と伺いにお園の聞のまきこえしかば一問へすいと出て見れぬ母をはじめ十平夫婦お園も俱あ安泰を見て心の落つけを母の面前目なく赤面して居たりける母貞心尼の半七に向ひ貞「エ半七其様に案じるとはなし三勝の譯は委しく聞せした他の女と思つた時いつまらぬこと、思ふたがかうしたわけすら無理もあゝそれは左様とお園のはまたとふふわけで此家へ來て居られるのだへ半「だんくの厚い仰せ三勝が身の上をお隠しやせし段御立腹あくありがたふ存じますお園の昨日大師河原へ参りました所途中で狼藉ものに出合しとて供の者ちりぐに立歸りお園の行方知れぬといふ告におどろき追取刀家來を連れて諸所八方心を尽してたづねましても一向

に知れませず昨夜よりして屋敷中寐ましたものは一人もあゝ今朝程お知らせ上たら母上は御佛参お兄いさんも御他出どのお返事お園がこれに居ますはとらういふことか私も只今もへ参りしはありとんと合点がまいりませぬママ三勝お園二人ともに母上へわけをおはなしの上な誠にふしぎなことであるト手を組半七貞心もしばし兩頬をまもりつ、溜息ついで居たりける

貞烈美談園の花二編  
貞烈美談園の花三編

第十一章

江戸 狂訓亭主人補綴

三「サアお園さまが此所に御座なさいます其譯はトいひつ、はすす轉寐の枕の許に半七は烟草を吞ながら半「ナイ」三勝「コレサ目を覺しおトいはれてやう」枕を上げ三「チャ」マア不思議あことを半「何様したまだ逢もしね」お園のことを何とかいふがお園を夢にでも見たのかトいふは四隅を見まはす三勝「三」やんにママ氣味のわるひゆうにあやひ夢をトまじり覺やらぬ風情にて考へて居る自色少し眼のふちが腫々様に櫻のひらさか、りし姿にひとしく婀娜にうるはし死生質のたどへるゝ物もあし半七の笑ながら半「おにを其様に思案をするのだ三「エ最夢を見ましたのか貴君が御一人此處にお在遊ばすのが夢かわかりませんヨ半「サヤ其様ことをいふのだお園が何様した所を夢に見たのだへ三「イ、エ



お園さまとやら斗りでのござるません真心さまをはじめにして大勢が此家へ半一ナニ大勢  
どの誰々がト問はれてこれより三勝は巨燵に入て本を讀ながらいつしか轉寝したる其間の  
夢をくわしく物語る

○此書二編下の巻第九回三勝が半七の足の遠ざかりしを案ト待てがれて巨燵に轉寝する  
所より紙頁十丁の間ハ残らず夢のおもひさき其心得にてよみぬゆへと願ふ。看官の  
吃言○久しひものだまた夢か作者の白漢めが 春水「エヘン其吃言は承知だが原本の夢  
は何様に永からふ補綴と初丁にするして置のでよろしく推察たまはれかし  
三寔に何様考へましても夢の様ではござるませんヨ半「イヤ〜そりやアアア大變に長  
い夢だそれでハ男の子を産たとまで見たのだノ三「ハイ乳母まで置てくださいました夢で  
ござるますが何を悪事でも出来ます前表とやらではござるまするか半「エナニ其様な  
こともあるまひがお園の身はなんぞわりいことでもありハ仕方いかト少し鬱氣風情なり  
三「チャあんなお園さまの事では御苦勞がお出来さる様なハ心當りがござるますのかハ  
半「エ左様ヨ少しかハひそふでもあるが詮方がねハ三「おせでござるますへ何にも御不足  
のなひ御嬢さま殊とにお心だてあら御容義ならハ分のなひお方とは安幸さんのかねてのお  
噂何もゑに其様おもとを被仰ますか寔に氣にか、りますす手何様ぞ其譯をお聞せ遊ばして被  
下ましか半「ナニ今ハいハすとも願て知れることだから其節のことヨ三「イ、エ夫でも私が何  
心きひ夢にさへお案じナ様お園さま御災難の御心あたりがござるますことあら只今の中



五十六



何様してか上へおぼしな半「ナアニ左様いふ理にいけば、が此方が了簡に出来ることでもいさひ三「マア何様なことでござぬます、半「エ外でもねへお園がかわひそふでなひ様にすると三「何様なさると出来ますか半「エさればサ其方と縁を切て此半七か門口へも出ねへ様にすればいい、のサトいはれてハット三勝が道理にせよつて一言の返事も涙を目にうかめ三「左様思召ておいでなさいますとも知らず他に仁慈のあるお方とどんじて居つて身勝手から朝夕貴君を私の方へ斗り置つた其お腹立で其様に半「イ、ヤお園の露やども其方を邪に仕とせぬが養父。さんの御立腹が強くつて何様かお園と離縁の内談を最中の様子だ養家を追出されて看どおめく、と實家へ歸つて隔てた兄へ目むけもならず貞心さんへはなやの事お目もか、られさひ不幸の身のうへ安幸おぞへ對しても面目さひが是非およばねいよく左様あつたら其方はマア何様せうと思か三「左様ならばお園さまの何ともおつしやらさひで大旦那さまが御立腹遊はしたもる半「サア其方の心での養父にいはしてお園はおどなく仕て居るれだと思ふでわらふが決して左様ではなひせそれだからかひそふだといそれて元來賢三勝半七の不首尾の我身の再回せしめも半七に向ひて三「アノ貴君へ左様申ましたらお氣にさわりますかお知れませんが私と最既に覺悟をいたしまして一旦死んで蘇生されたも同ことの身が以前お側に居ました節よりも自由すぎました身の上考つて見ますと冥利がわるふとござぬますから心をわらためて私の半「縁を切らふといふのだからそりやアさかね、三「イ、エそれでもお園さまへ對してはさうぐまで半「イ

やそれと其方の持まへだが今度は少し了簡をかへて覺悟をしてくれねへぢやアあらねへマアはやく云て看れば意地づくといふ様なわけだから三「イ、エそれの貴君と私の自分勝手とやらでござぬませう何にもお園様をお恨みすて意地のりのと被仰ふとは半「イヤサそれでの其方の聞わけがわりいお園には此方も云分となひが斯いふ事が出来て居るのだそれゆゑに養父。さんの心が違つて来たのだト小聲に成て叫ければ何か知れね三勝は當惑の顔色乍ら得心して三「左様ならば左様しても貴君は御離縁をばして半「所詮むづかしい義父了簡だから夫を無理に取直しようもさひとだから其時にあつたら其氣になつて三「それの最おつしやらさひでも身を粉にいたして御恩をかへしますが若も左様にわそばすと御後室さまのお案じと何様でござぬませう何様ぞなるたけ御堪忍をばしてくださいまし私の身をばいどのませぬが貴君を日かげの御身にいぬしよしてのすませせんから半「マア、其様おことは何様でもい、氣とらしに一盃たべ様ぢやアなひか三「ハイ左様遊ばしませトいひつ、立て三勝は勝手に近き間にいたり婢女に言付着をわつらへ酒を温め巨燵の際にさしむかひ酒くみかはすもしめやかに盃の数を重ねて酔機嫌半七の陽氣にありて半「ノウ三勝何と思ふか知らねへが世の中といふもの、餘り野暮に四角ばる氣のろの身の損に

あるせ三「なせでござぬますへ半「おせといふければ是までの事をよく考へて見ると互に義理を思つたりまた親達の苦勞を勿体ないと思つたりして此方もなれにくる戀中を思ひ切つて他家へ養子に行てまつぬ不實といふ様だがお園を妻にして其方は死んで仕まつたど



あきらめて居る其様も死んで仕まつ氣に思ひつめたに違ひをひものが安幸またすけられて  
 それから斯して再會して見ると節々に死ぬ様を心持にはあるが最今ぢやア死ぬ氣はあつめ  
 へ三「エイト半七の顔を見る 半「ハ……なせおれが貞を見るのだ殺して遣らふかといふこ  
 とヨエ、イ姿の婀娜だが何様も堅ッくるしいにはこまるせ何様今些の中婦多川の唄女にで  
 もして見たいものだしかし左様したらまた町風の美男が幾等も通ふからその節にいな屋敷  
 ものの野暮らしいとか氣がさかねへとかいつて此方をば突出して仕まつたらうノウ三「ア  
 ノマア其様をこそを何様してやされまするのかわ体もひそれこそ直まばちがあたりませ半  
 「何様ですへまでその氣で居てくればい、が長い間に人の心も種々にある者だから油  
 断のあらねへといひれて三勝は恨めしそふに涙を落して 三「なせ其様ことをかつしやま  
 す何ぞ私に不實な様に思しめすことがござりますか 半「ナアニ左様ではあひが人の心とい  
 ふものは常にわかるものではないからサ三「チヤなせわかりませんエ 半「エそのわけかマ  
 ア斯いふ哥があるが實にも左様かと思ふからヨ三「なんとやますお哥でござりまするよ  
 ぞお聞せ遊ばせ 半「エ、引斯いふ哥サ  
 零落て袖になみだのか、る節  
 他人れ心のおくぞ知らる、  
 半「なんと違ひをひよみかたぢやアあるまひか三「あるやど左様でござりまするが私とまた  
 貴君の爲に極意の寔を尽して嬉しいと思し召す積なことが出来ましては何様で宜ことぞわ

ござりませんから私は益に立なひと思し召ても貴君のお身にわるひことがあひようにいた  
 したふござります 半「左様サノウ藝が身を助るやどの薄命とやらて其方を力にする様では  
 難義だけれと後子先を出て見ると賀家へ歸るも面目をひのら是非其方と兩側で何所へか遠  
 くへ立退て渡世をして活業すはあるまひと思ふから相談をして置のヨそれとも其様を節に  
 連添つて居るのが否ならば伯父の息子の種次郎の女房にゐるがい、左様すれば此方は京大  
 阪へでも往てしまふからい、三「左様かことがわりもいたしますまひがモシマア其様にお  
 あり遊ばしたら後至さまのお歎きを今見る様でござりまするも後りの私が貴君を期して  
 おしたひすてお宿を明させましたも名とお園さまのお憎しみ貴君が第一難義にありませ  
 ん様にいたしたふござります 半「インニヤ此方の左様いつて朝夕此様に資添てばあり居た  
 いもんだ三「アアレサチホ……ト小聲にて笑ふ

第十二章

瀧の瀬と變るならひと言ながら昨日の花の盛りなりしも一ト夜に散て今朝とまた恨みも甲  
 斐なさ夕部れ嵐されども其香こうせやらぬ梢木下あつかしと花の根岸の中村に柁木の垣根  
 竹の木戸芽が軒端の傾けと長家建にのゐらさりし小家を假の詫住居柱に掛し門札は命を此  
 所に茜根流琴の指南の其名を勝と記たるは是三勝の帥名ゆて世を忍ぶ草淋し氣に朝夕過す  
 活業乃助と看るも哀れなりかつ「お春さんお夏さん明朝と今朝稽古に仕ておくれよはる  
 なつ「ハイお師匠さんは何所へお出被成すかお使ならば私どもの男をおつかひをさみま



シアノウ左様して置けど母人さんが申しましたヨ。かつ「アイ有がたムヨナニテ明日の用は私が往きひければ足かねる用だから私が参るヨ。若子お前たち二人が遊んでお在で用が赤くは日中時分から此家で遊びながら留守をしておくれなはるか。」アイそれぢやア朝けいこに参るとき宅へ左様して参つてお留守居をいたしましや申さんのお薬を煎じて上るばかりでござるますか。エ。かつ「ア、よく知つてお出だねへ何様ぞ左様しておくれヨ。はる「ハイ急度参りますすなつ「ハイ左様から明日トいとま乞して立歸る跡には三勝が琴片寄て中の間の障子をしづかに押明てかつ「貴君へチャお眠りなさつてお在なさるますか。へトいふ聲に目を覺し四隅を見れし半七がさる力なさるふに息を伺さ半「ア、……寝るとつさらなひ夢ばかり見てならない何様ぞ白湯を一口口くんな。か何「ハイ最今ね薬も出来すすがアお白湯を上げませうねト湯を汲て持來り夜着をしづかにとり除て抱起し。かつ「チャお汗が出ましたねへさぞお勞れなさんませう。半「左様サ何様も眠ると胸が苦しくなつてあらなひ。かつ「なせでござるませうねへト白湯を呑せながら春中をさすり。かつ「お醫者さまへ其事を申すしてはナニそれは邪氣が有から其様な夢も見るのだ熱氣がとれると自然と夢も見なひ様にあると斗り被仰ますが何様も合点の何かおひことでござるます何ぞの祟ではござるますまひかねへ半「ナニ左様でもあるまひヨそれだけどもあんだう氣にあつてあらなひから何様も夢を見なひ様に仕度ものだ。かつ「少しのお心當りがござるますのかへ半「エナニ是れぞといふ覺へはなひが夢に見る女の貞の睡ぶん知つた者の様だから不思議なことだ。

かつ「そのことをくわしくお聞せなさないの何もあるでござりますか。何様もお案じやますヨ。半「ナニ隠すわけもなひが逐一はなすとまた其方が氣にして騒ぐだらふと思ふからたわひもあいことで氣をもませるも否だのられことよナニ頓て病氣が治つたら夢を見も爲まぬから其様に案じなひが、ト言聞らるれば猶さらに心が、りの半七が病は元來心痛のなす所爲なればあかしく容易く全快なすべし様なく醫者も難治のおもひを兼てはあせしふどもわり心細さも愛事も他に便りのなき身となりて悲しさいはん方もなく只大切に看病して其日くを過しける。

○さて半七と三勝が此所に住居するはいかなるもあそと尋るに、お園の父苗根養之進がはじめと違ひて半七を憎と殊に三勝を内々世話をあして此かたの家に在ること數度おれを其事などを仰山に言立終に離縁ふよびければ半七と實家へ歸るも面目なく其ま、に妾をかくし三勝の家をも賣らひ二個ひそかに此所へ引こみしありまた安幸夫婦の半七のめぐみを請て内外ともに都合よければ此仕合に乗じて一度在所へおどづれんとて生國安房國へいたりてひさしくかへらすこ、にひて半七の何事も仕付ぬ業も人頼みなれば損失多くそのうへ病氣となりしかば次第に貯へ少くなるを用心して三勝の琴の指南をはじめて活業のたすけとはあせしありまた真心院にも寵愛深き半七を養家へ對して大金の指毛をかけそのおに當主の半兵衛にも金を多くつかはせたり此半兵衛の聲にて義理もあり物堅き氣性あれば空谷の家名大切と言立半七を捕獲て別室にもあすすべしとの



事も多敷きながら行衛知れざるを幸ひとなし只十平に内々を頼み置れ一がこきとて  
 武家の作法のむづかしければ萬事を際便に於して埒あかず元來深く忍びかくれて半七の  
 名も仲次郎と改め三勝といふのみか是れ死せしものと思へばそれと知るべたよしもなく  
 佐介が谷の山の手の方中村といふ山の北ある田舎同様の事も久しく知れぬも無理なら  
 ずと察したまへ猶武家のことなればいかにもかしのことなしにてもくしく書とるこ  
 ともならず人情もの、常なれば理屈にからまりて野暮奇評をしたまふことあかれといふ  
 再説三勝は其翌日己の刻までに稽古を仕まひ彼弟子のお春お夏を留守に置薬とやら買もの  
 とやら餘義ない用事もあるもあつたさとして出行り跡みは久しくお春とお夏半七の  
 用をたして居たりしがさすが子どもの事なれば息屈して子ども「仲さんちよつと往て参り  
 ますヨト欠出して行そ跡へ」ハイとめんあそばしませ今日のおあんなばい何様で入らつ  
 しますますエ半「チャ浦次かおせ来たのだうら「ナセ何たどの餘りまアお情をひか言葉で  
 ござぬます此間中から折節御目に罹りに参りますのに一度もかひひそふだとなつしやつて  
 の下さいません其様なにも三勝さんばかりのといひと思召ますか逆てもあの嬢には叶ひ  
 ませんけれども責めてこれ程までにおしたひやますのを一度いやさしいれ言葉をお懸さ  
 れて下さいますし何様ぞ不便と思し召て三勝さんも幸ひな側に居ませす日頃の思ひをお否で  
 もといひつ、眼に之涙をうかめ恨めしそふに寄りそふ姿過にし頃の侍女の姿にあらで唄女  
 風元來重肌赤る牛質三勝より人品の賤しけれども化粧の彩立榮する貞かたち今日と殊な

ら半七に好る、心ば衣袋の出立黒給子に大柏の紋を首纏にして裾の白くしほりしとどくに  
 染墨繪の笹の寄合畫 諸所に朱紅にて其畫師の花押を深下着は極薄の柳茶に銀糸の細いの  
 を撰めて氷烈を纏せ桃色の糸にてちんちん梅の葉をボチ／＼纏たる無垢を二枚かざね白の  
 紋縮緬へ水淺黄の糸にて晴嵐を纏し半袴の、りし紅はんもつとも緋の山さや縮緬の對丈  
 帯は白博多の跳織りさし渡し一寸五分はどの雪輪を抜き染ある本紫その雪輪の中へ金銀  
 の糸にて茶の湯道具を纏せ織留は雨龍を淺黄の蛇腹糸にて縫ひ上しをむすび其外のこしら  
 へはこれに準してさつしたまふべし雪の様ある袴を横に見せて愛敬をふくみ半七といひ  
 風情千金の價といふとも惜しからずと思ひれたりさすがの半七もしばらく見惚れて心を迷  
 はしえはらく物も言さずしが竟に心の解をめて半「今は斯して見る影もあひ様にあつて居  
 るのに愛存もたさすしたひ来て異なるのは嬉しいが其方も屏敷を出てから久しい間の事だか  
 ら其中にのさぞ面白樂みも有たらふのに此節にあつて此方を又彼是といふのはちつとあ  
 かしひぢやアねへか今までの情人の方は何様したのだエうら「アソア其様かかはひそふ  
 な事をかつしやいますお側は居ました節も三勝さんをば是にモウ／＼かかひひがり遊ばし  
 て他の女をば振向ひても御覽もなさらまひぢやアござぬませんか其中でわたくしをば陸に  
 も折節戯言をおつしやして下さいましたのをいみ／＼嬉しひこと、ぞんじますすぢににお  
 とまが出まして宿へ歸りますと繼父の邪見から否奉公に遣られました悔しと貴君は苗根  
 さまへ御發子にね出遊ばしてお願さまと睦ましくわたくししますつて三勝さんのお側に居な



四十七 いと聞まして何事も定業とやらかどわらうめて思はせうち何様した因果か貴君のお顔が不  
目先にちらちらとして思ひ切られません愚な懸路これやと思ふ念力が届かきひこともわ  
るまひとぞんじ詰た其最中此身を爰に是非したひと繼父に金をわたしまして奉公先は無理  
にいとまを取つれて参られた其家の主人と申す人並てきひ否きお方それでよくとも  
命の中に貴君と夫婦の係業でも願ひ申す一念でござりますからたとへ金もあればと申  
て他人の肌をふれましての最貴君には添れまひかと思ふも知らず其人の非道によつて悲し  
ひ身と半「それでは其方は身をなげでもしたのかヤウら「ハイそれからやうく其場をの  
がれて一旦身をも捨てたが心がすこくおそめし難義も罪もいとぬ執念何様か否で  
ござるませうが願ひをかかへて下さいまし涙の露のさらくく他見なければ半七に抱  
き付たる浦次の貞情見るよ近まさり男心のいたづらといふは懸路のわけ知らず凡女にし  
たはれてといかある悪女なりといふとも憎くはあらぬものあるべしをまして況や並々にす  
ぐれし美女が其までにこれが寄たる海士小舟港にあらで半七もつさき留たき心とあれば袖  
に手を入れ浦次の脊中をさそりながら半「それはと深く思つて居てくれるといふも知らず  
今まで鹿唇にしたのは己がわやまりだ堪忍してくんさヨ引寄て貞と顔うら「ソレ其様に  
やさしい言を被仰のを最些早く聞ましてらば死んでも迷ひの半「ハナ斯あるからは愚智を  
言るさうら「アアアアはんどふでござるませうか」

第十三章

浦次「若旦那さまへ半「エ何だうら「アノウ實正に私はお嫌ひ被遊たのでござるません  
かへ半「ナセ其様に疑ぐるのだ嫌ふくららならば今の様に病氣をわすれて其方の否なこと  
を無理にかひひがるものか餘りかはひがつたから竟氣が遠くなつて其方に介抱されたのだ  
うら「ゆんにモウ私何様いたさふかどぞんじましたヨ萬一われ限快氣おありあそばさす  
は彌罪の重くなるわけでござりまする誠に悲しくなりましたヨ半「いよく罪が重く  
あるとは何の事だうら「エ、それの半「亦にもゑ罪が重なるのだと云事サうら「アノそれ  
の貴君に無理を懸幕をいたしますさへも今宵の様に願ひが叶つて見ますと嬉しひとぞんじ  
ます心から善と悪とがわさまへられましていとし貴君のお身に凶事をいたしますと私が  
罪だと思ますこととござるませ半「なんのく其様な野暮をいふことがあるものか惚たと  
いふ深誠にはたがひに命も捨るではなひか左様して見れば甲斐あひおれをしたひこがれて  
来てくれた其方に添寐をいた中にそれゆゑ死ば本望だと思ふはな左様おゐらと思つた日に  
の其方の罪になるものかうら「イ、エそれの貴君餘りな氣やすめをおつしやいます半「ナ  
ゼく何も氣やすめなことのなひ正直をいつたのだうら「イ、エそれでも何様して貴君が  
私風情にお命も惜しくはあひと思し召ますものでござるませものか半「ふれさははせ恍  
惚なつて居るのにまだ疑ぐるのなら何様も詮方がなひ其方も同じ様に此方を一途に思つて  
くれなひければ面白くあひと言ものだうれを彼是すねて氣をもませるの何の事はなひ此  
方を物思ひをさせに来るのだうら「アノ左様でござるませんが貴君は御本心は三勝さ

五十七



んを信實かはひと思し召ますからお屋敷に居ました時分私に常におしたひやても不便と思し召すひで三勝さん斗りおいとしがり遊ばしたでござるませんか半「あるやど其方の言通り其節おれが左様したの、則其方を憎ひとはおもはずか、いひ心ざしたと思つたからの事だ、うら」お願ひすた戀を振捨てお置おそばしてそれが私を思召て下さいましたどの何様いふお心でござるますか半「あるはど女の心には深ひ此方の了簡が解なひのも尤だから今くわしく言て聞せ様が夫をも則疑ふ様では何にもあらねへうら「イ、エ、くそれをば急度實正の事に聞ますから何様ぞおいなし被遊ませ半「それぢやア言て聞せ様がア其貞のうつくしいのを見て置て氣をもませては恨みだはナうら「アア三勝さんが半「歸りて來てもらまおねへ其方が深くしたおわけを言て聞せて二人とも和合させるか三勝が不承知あらば珍らしひ其方を側に引付てうら「ア左様遊ばすと息が詰りますからア半「エ、性のこわい其様にいやがるくらゐならばモウ、く側へも寄すひヨうら「勿体ない何様致して否がりますものかまた貴君がおんばるがわるくおあり遊ばすと苦勞にありますものナ半「それ程に此方を大事に思つてくれるのかうら「ハイ實の女の淺間しさに深くお恨みやまして御薄命の御氣鬱に付込ました此度の御病氣今さら罪のおそろしく艶しい貴君のお心にやだされまして恨みも晴た、後悔は此儘にお側に居られませぬ身の悲しさを實々お見捨おそばすと亡身の魂を他身に寄ても何様がお側ですへ永く半「なんだか折節わからねへことといふが何でも最此様に打解て深く此方に迷はせたらうへで何のかの口論をつけて

すこしでも他心らしむことをするときはかねへせくといふ事もなひが屋敷に居る時ふん其方の彼是艶しいことをいつてくれるのを嬉しひと思ひおがらとり上おひのはふかひ所存がわつたからの事だ何ゆゑと疑がふあらばくわしく言が此半七が了簡は斯いふ心で其方の情を他所くしくしたのだ其節其方が此方が側へ來なひ時分から竟いひかひして居たとも知らず朝夕其方が艶しひ風俗殊に心もある様子かはいら、いと思ひながら以前に三勝とわりのあるのを知らさひで思つてくれる心ざし嬉しひとおもつても部屋住の身でいたづらな未覺束なひ浮氣な情で其方を疵ものよしての濟すまた氣に際るか知らなひが急に三勝を其節離別て仕まつて後で出来る其方乃方へといふも不實なわけで野暮な様だが情人にあつたら一生涯捨られるも否捨るといふ不人情と猶々出來ない生得だから其方の實意を當坐の花とすする様を鹿略をしては其方の爲にならなひと思ふ義理づくを第一おしゑ此方が信切一生のあれなひ様になられるならば情人にもならなひが兎ても左様は出來なひこと左様して見れば十人並にすぐれた其方を疵も付すに相應お身片付の出來る様にも思つたのは思はれたその嬉しひ心れ返禮左様とは知らず恨も仕たらふが今になつて三勝の在の承知で則したつて呉るはどだからまさか野暮をいふ氣もあるまひから薄命になつた半七を何でも其方と三勝が見繼様な氣になつて當分力になつてくれるがい、左様すれば始終其恩がへしの出來ねへ此方でもねへな元の身分にあつた日は其方も三勝もまさかおどろ乃ねへ様にといふ中にも花美な化粧乃美しひ其方の方へ何様してもうるさうらふがそりやアふせうを



して呉るがい、〇エ〇コレサそれぢやア否か否だと言やア斯するがい、かうら「アレモウ其様にやさしく道理をわけておつしやると猶々戀さがまざりますすけれど、半七にひしくとすがり付き身をふるとして涙をいらく」と落しさも悲しそふなる愁ひ貞のうつくし半七は何ゆゑか是までにあく浦次の色香に前後をわすれて恍惚と手をのさす貞と顔を合せて半「エ、悔しひなせ此様にかはいものを義理の人情のといふことにはばかり氣をとられて居る間に一人や二人の情人が出来て居たらふと思ふと何だかじれつたいようだうら」アレマアかひひそふは其様赤氣がござりますすくらゐあらばはかなひ身にありましても執念深くおしたひやすといふとかござりませうか貴君が今日のお情に恨をいらして仇な業をひるがへします魂をかりひそふだと思し召て此後少斗の間お側に居らなひでもかからずおわすれ遊ばして下さるますさへ半「また其様おわからねへことを言ひ手出しを仕ねへ間は格別モウ」斯いふ中にあつては半日でも顔を見ずには居られねへおせ今日歸るとまた久しく来られねへといふのだうら「サアそれの只今やてもわかりませんら後日よく分解様にいたしますヨ半「それぢやア最今日は歸るといふのかうら」ハイ心で改めて見ますと無理にお側に居るの貴君のお爲になりませすよ私願ひも叶ひませぬ様にありませすゆゑ思ひ切りまして些の中お別れやて居りませうヨ半「おもひ切るとは氣が、りなぬとへといふ身にもしろ来たのを幸ひ三勝の歸りをまつて兎もものことで何もかも談合にうら」サ

アそれが出来すくらゐなら何様に嬉しうござりませうそれをぞんじますと過去りました日が恨めしうござりますす半「これとしたり過たをいふものでいふ何もの約束ごとでかからず愚智に思ふの野暮だモウ」此身が一途赤氣で浦次の貞をさすりながら莞爾と笑ひ此様にかいもくあつたからの金輪ならく變る心はなひ程にうら「サアそのからくの底までもとお恨をすた心かはれて貴君のお身を大切にぞんじますからくれぐもかならずお見すて遊ばしますさ半「おせマア其様なことを幾度も言のだらふそれよりか其方が今歸つてまた久しく来られねへといふのが氣にあるヨ今日此方に居てくれ、ばいひのにうら」貴君よりか私がお側をはなれますのは何様も悲しうござりませう半「それぢやアどふしても歸るのかから」ハイ半「うんなら何様も些も早く来てくんさヨうら」エ、モウなせ其様におやさしうござりますすねへト涙を落す

第十四章

九十七  
 諸も浦次は涙にくれておそれがあく見へけるがおもひきつたる自立にてうら「それぢやア私の思ひきつてモウ参じますから來日お目にかゝるまで實正にお忘れ被遊して被下ますなヨト半七が側を立上げるをさすがとあしどもおければ半「コレサ浦次マア待てくんさト抱寄れば三「アレまた何かお夢を御覽なさるのかへモシ」貴君へ浦次の此所に居ませんヨ目をよくお覺しなさるましとト呼覺されて半七の目をひらきつ、胸りして半「チャ三勝う何時の間に歸つた三「たつた今歸りましたヨモウ」時刻を算違へましたそふで先の宅



十八 日がくれましたからか薬取も遅くなりまして途中か前さんのことは案じられますし何様に氣をもとましたらう半「左様かそしてモウ何時だ三「札の辻とかで亥刻乃鐘を聞ましぬヨ頼んで置た子供之何時歸りましたエ半「エ左様サノ此方ア氣が付なんだそれに今日は終日うとりくと寐てばかり居た様だト言ふがら心の中に正しく浦次が来りし前後をかながへて見るに今も猶四隅に居るかと思ふやとあれば忙然として疑ひ迷ひいと戀情のまさりつ、抱か、へたる三勝の看病のこる方かけれぬれまでに赤き半七の心の底のあやしくも浦次が色香わすれがたくしはし言葉のなかりけり三勝も心れ中に半七の風情のふかしく殊に寐惚れし借語に浦次と呼聲出せし何もあるか夢ありとも心に思ひぬことをば見まじもしやの噂に聞傳へし浦次が身のうへ違ひなく半七へ執着の念を殘せしものか左もあらば易者の占奇ひ判談までもたがぬにやと考へながら蒲團の上を見れば落たる銀の簪重結梗の平打りたしかに覺へのある品と手に取上て半七に向ひ三「貴君へ此かんざしを御存でござぬますか何様して此所にござぬましたらふチト半七に見せる半「ハテナ紋の母人の御紋だか簪しのこと誰のだから知らぬ三「左様でござぬますか寢に不思議なことござぬます半「なせだノ三「イエ此簪はまだ貴君も私も御屋敷に居た時分御後室さまが浦次へ被下さした簪でござぬます以前御母公がお差あそばしたのを遣ひさいましたから其餘浦次が何様にありがたがりましたらふこれと貴君のお持あそばしたお喜世留をいたひた節のモウく嬉しがりましたして私さんぞに見せびつかして羨しがらせましたのでござぬますヨ



孝御



ト聞て半七はやうやくに夢の前後を考がへて大略悟りこらえず涙をばらりと落しければ  
 三「チャ貴君と何をか歎き遊はします」半「されば其方へはなすは面目なひが何を隠そふ  
 浦次がことを此間中から夢に見たが實は其方の留守に成てゐら今しがあまで長く」と見た  
 夢の中に餘義なひこと、思つてから竟つたされぬ浦次が深切深く恨を請たらば其方の爲  
 にもなるまひと思つてまた再會を堅く承知をしてやつたが夢にても何様か氣味のわるひ  
 ことをしたとみればより隠さず浦次の言ひし言葉乃前後をくはしく三勝に物語つて懣氣三「  
 そのお夢といひ此實に浦次さんの心の底が思ひやられてかひひそふでござぬますまだ  
 貴君にお咄申すすと哀れなことがござぬますヨ實は今日私の歸りが遅くありましたのも  
 浦次さんの事や何かござぬましたからそれでひまがかりましたのでござぬますヨト醫  
 師の許へ薬を取りに往しつゝの爲に爲井戸村なる巫女の方へ病氣の事を口寄に頼とこの歸り路  
 にて易者にたづねしことまでくわしく語るがさにてかのづからわかるべし半「フウム左様  
 さらば巫女で女の死靈が祟ると言たのか三「ハイそれのらまた易者で看てもらひましたら  
 ば死靈が祟るに違ひなひが何でも男を目上の女が大造に信心をして病人の難義を救ふ様を  
 風情が見へるのに仇敵が極實の味方に變じて災ひが福になるといふ卦だから必苦勞にす  
 るにとおよばなひが全体をくわしく言と貴ひ名玉が泥の中に埋まつて居る様を易で何れ時  
 節を待ば其光が世の中へあらわれずには在まひけれども兎角邪摩がわつて急には光りを入  
 り知られる様にゆくまひ殊に此人に付てゐる女の助と妨がわつてまだ種々に身分がうつり

變るだらふと申ました半「ハテナとして病氣の事と何と言た三「アノ病氣は今申す通  
 り今夜時分から段々快氣かありなると申すしぬヨ半「氣の所爲か胸の苦しみの餘はど  
 よくなつた様だしのしマアおれが所業でかはひさうよ大變な苦勞をさせるノウカはひさす  
 は安幸の働で命を救はれて後に此方に逢て少斗の間人並にして置いて月水が不順といふか  
 ら懐任でも仕たりと思ふ内半次郎といふ小兒が出来た夢を見たのお園に出合たのといふ様  
 な覺めても氣にゐる様な事ばかりで行末も覺束をひことだと案じ何様か何事も時節のわる  
 ひのだとのさらめて呉るがい、病氣さへ全快なればまた何様でも手段が出来たらふから  
 三「イ、エそれの少しもお案じ被成ますな貴君が少しもお心よくなれば私が身を何様にで  
 もみだして御連の閉く様にもなりませうチャあの鐘の子ノ刻でござぬますマア今夜とお休  
 みなさぬまし私も草臥ましたから御免をかふじつてお側へ直に眠ますヨト半七の床の上に  
 横になりたる三勝があれぬ世帯の貧さに紅粉化粧もあさくれと自然に白き素良の雪肌れし  
 髪も愛敬となるは美人の徳れみか貞操節義備りたる女徳めでたき生質も前世の宿業による  
 もえか浮世の秋に物悲し月日を過すぞ哀れありされども三勝の丹誠と浦次の執念の善道  
 にありたるもえに半七の病氣の全快して三勝の悦びいはん方かけれ座して豊に暮すべき  
 金銀の出所もあらざるを安閑として過すも心細し何卒金子の才勞をなし養家への再縁なら  
 ずともせめて實家へ歸らる、兄半兵衛の返済金をこしらへたしと談合して半七も得心しけ  
 れば徒手を求めて自活業の様に揚阿阿へ月勘定の如く頼みて名にしあふたる懸が窪の仲の



町見番の藝者となり三の字を隠しくお勝とよばれて勤めけるが古今の藝者にためしもある  
 評判を請客の座しきへ招かる、は只此外の藝人のあらざる様もてはやされ全盛ならぶ  
 のもさき藝の噂と美人乃沙汰お勝を知らざれば廓の通とはいはれずまた地廻り素見の連  
 中まで何となくこれを賞め名高き家の太夫職仲の町にて指折乃おらんもお勝に遠慮を  
 するやど乃勢ひなりさればとてお勝は高ぶらず廓中のおらんひのきをせざるものなけれ  
 ば日々に繁榮して根岸乃半七を立派に見繼本意といふにはほらねどもまづ志ばらくの安堵  
 して此上乃願ひの半七を元乃武家に立歸らせんと神佛にぞ祈りけるされば半七も大家の二  
 男養家は馬駕に乗る家柄あるに本妻ならずとも三勝を藝者として身を養ふの男の恥と思ひ  
 なから浪々の助け外に全く止事を得ず月と日とをまづ其儘に過せしが半七の隣れ家は旅の藝  
 者乃母親よて寡婦ぐらしれことなれば別て互に心易く殊に三勝の頼みにて彼寡婦おそよと  
 いふが半七の食事の世話をなし朝夕に往來し親族のごとくまじはりて半七は不自由なく  
 けしけるに或日おそよの娘なりし藝者お浦と呼ぶ、が歳はやうく十七才まだ座敷へも此  
 春から弘めをしたる娘風茶屋の抱へにありけるが藝も容義も人並に勝れて殊に利發者主人  
 も大事になすもゑに此三四日風邪の様に少し不快様子をも案じて見番に用事を付させ大病  
 さらざる様に御加持をしてもらへとて根岸の村なる祈禱者へつかはしたるを能きつゝめで  
 母の許へ寄りければまづ半七とは一度も對面なせしことなれども兼て三勝の事も知りた  
 るもへ知己になさんどて母と娘が相談し半七の方へいたりけるそよ「仲さんお宅よりへ

半「チャ、姑女さんお出なせへ調度い、所だ今私が一人で美味物をこしらへたから呼ぶとお  
 もつたのだサア、お上んなせへト障子をわけてお浦を見やり半「キ、お客があるのだぞ  
 トいふ節お浦は半七に會釋をするそよ「ハイ今日と兼ておのさしやました里の娘がまわり  
 やしたから鳥渡御知己に連れてわがりました半「ハ、左様かへそれの有がたふサア、  
 此方へお上んなせへ不躰ながら美麗姉上さんだ母御の御秘藏思ひやられるノウ、こりやアモ  
 ウ仲の町の大立者にあるだらふ此方が所のお勝なんざア、今に年増女さんになるからいねね  
 へト、ふ間にお浦は母に進められて縁がはへわがつて平座半「これのしたり其所の板の間  
 だマア、此方へト無理に座敷へいれる母は娘の持て来りし甘露梅の折を半七の前へ出し  
 そよ「これは餘りお恥かしふござりますがお浦がお前さんへお上げやてくれとやまそから  
 半「イヤ、これの、私が大好物な品だト手に取て片脇に置此時隣家の女の兒木戸の外から  
 大なる聲にて女の子「おそよさん、隣家の姑女さん、そよ「此家だ、お住さん何だへ女  
 の子「ア、子姑女さん地主さんの姉上さんが赤子さんを産そよだから早く来ておくれとア  
 レまた權介どんが呼に來ましたヨ、そよ「アイ、只今直に参りますとすておくれア、お浦お  
 前それちやア今夜は止宿てもい、の、うら「ア、内義さんが一晩休足して來ても能とお言ひ  
 ちさつたから居ても宜ヨ、そよ「左様かるれちやア留守を氣を付けてくん、奥の地主さまへ  
 直に往からうら「チャ、大變だ子、そよ「それだつても去頃ちうから母御さんがおたれみなす  
 つたものチ否と、言ひれなひはナト欠出して行



○娘をはじめて半七も引合せに来て隣家といひながら其儘に捨かき半七へあいつも  
せずに行行のいかに産婦の事を聞たればとてあまり兎忽のふるまひなれども唄女の母  
親にと此様なのがあるものなり

第十六章

跡にお浦はもじくと間がわるれば長居もならずうら左様からちよつと宅へ往てまた  
上ります大さになりがたふぞんじます半「ナセエまア」遊んでお在なせへ何様で宅へ  
御出も何も何用も有まひ羨花でもこしらへるからか遊びヨト引止らるゝと何やら氣のつま  
るのは女の情唄妓といへまだ歳は娘さかりの素人氣惚ぬといふにのあらざれど女好する  
半七れ美男に自然と愛情をぬくみいぬるにのにかみて跡へさがるといふに等しくうら「ア  
ノちよつと雨戸や何か乃べりそ一て参りませう半「ナニ」お前の家でも今ぢやア私の方  
がよく勝手を知つて居るからしめて来て上様といふのも出来過たようだけれども両方が留  
守を頼んだり頼まれたりする中だから私がしあひぢやア義理がすまねへト笑ひながら半七  
のいとももの輕に出て行ばお浦の其意お任するも其座の愛敬なるゆゑにうら「左様ならばは  
いかりながらト笑つて縁にイめばはや半七はおそよの家の裏口表庭の方へりをなして居た  
りしが黄昏時のことなりしにお浦が立し様の許へ煙りのことと女の姿忽然と近付ばお浦は  
ハツと一聲叫びその儘ふんと倒るゝ物音垣根の向越に聞ゆる半七何事やらんと周章てしま  
りもそゝゝに我家へ欠戻り看ればこのいかにお浦の縁側に倒れて在いかりせしと聲

をかけ近寄り見れを正体な一ますく驚き抱起し半「お浦さん」コレサチ、イお浦さん  
ト呼ぶと答へもあらざるも詮方なければ勝手にぬき水汲来りて顔にふさかり口にふくみ  
て口うつしまた抱起せばやうくに吹込む水が咽へ通り心付てや眼をひらき莞爾と笑ひ半  
七も抱れしまゝにひしと身をすりよせて御全快おなりささいましてお嬉しうござぬま  
す半「エ、何だ」と此方で言ことをお前がいふのは陸お氣をうしなつた偽をしたのかうら  
「アレサ貴君の御病氣が全快してお嬉しうぞんじますとヤのでござぬます半「ナヤ左様  
いふ聲は浦次のものごしにト驚てお浦の貞を情と看うら「ナホ……私は浦次でござぬま  
す半「ナニ浦次が何様したといふのたト半七は氣味わるそふにいふお浦はかたちを改  
めて側に正然と居直りしが涙をばらりと落しうら「怪しいことをやすやうで折角かはいひ  
と思召てくださいました愛想がお厭わそはすかもそんじませんが唯今くはしくやまこと  
をお聞解下さなまして何卒此間お夢の中に艶しく被仰たお心をかあらすお替りおそばいま  
すなへトいはれて半七の何とやら氣味悪しければ燈火を照らし四隅をよくく看まはせせど  
も他入のあんのかりもなし先刻お浦の顔を見るより浦次によく似たる娘とおもひし其姿  
今はいよゝ彼浦次の貞に少しもかへらぬ眼元の愛敬露置そへてあか色深しうら「何を  
隠しませせう私のお屋敷で貴君を別れやましてから宿へ下りまして段々のふしおはせ苦勞  
七十八をいたしますに付てなほ「貴君をおしたひやます心がつのりまして何様ぞお側へ最一度  
出られる様になりましたらば其節こそは命を捨て無理お懇願をもお願ひやてよの中の女に





に生なまました思おもひでにと苦く勞らうをいたすその中なかに悔くやしい事ことで命いのちをすてしかも亡な身をみづの中なか耻はぢを晒さらして吊たひもつけられませぬ後ご生のつみまだしも死し骸がいを念ねんごろに葬はなられませぬ仕し合あは三さん勝かつさんの身み代しろりに自然しぜんとなりませぬ事ことそれでも愚ぐ智ちな迷まよひから勿な体たいぢひお主ぬしの貴き君きみへ崇たりでもいたすような私わたくしの執し着やくそれを憎にくひとも思おもひめさす嬉うれしひとを睡かましくおつしやつて被く下くだましたお情なさけに千せん部ぶ万まん部ぶの経きやうよりありがたぬと存ぞんじましたが胸むねのはむらの我わが身みを責せむ後ご世せいの罪つみへ消くえしたか猶なほおひとしさに忘わすれかねてお浦うら之の實じつの妹いもうとどうがつうとかで知しりませぬ故この此こ嬢ぢやうに戀こひしひ私わたくしの念ねんをうつして此この後ごの最さいこれ限かぎ浦うら次じでは貴あなた君きみお側そばへ参まゐりませぬ何なに様さまぞ此この子こを私わたくしだと思おもひ召よめて被く下くだましたいふより早く半はん七しちへひらりと寄よ添そひ膝ひざのうへ恍惚くわくわくとせし顔かほ色いろにて男おとこの貞ちかを情なさけと祝いわぶがら莞わづら爾に笑わらひしがそれよりめを閉と眠ねるがごとくまた正ただ体たいもあささまに半はん七しちはいと訝いぶかると問とよしもあかりし中なかに身みを動うごかしうら「ア、い」と返へん事ことをなしめを聞きて半はん七しちに抱かれし其その身みをかへり祝いわつ、うら「チャ私わたくしの何なに様さましてまアお前まへさんにてはかしらしい此この様さまにどうかいたしたかへト貞ちか赤あからめて膝ひざより脇わきへ退ひくとするを半はん七しちは猶なほしつかりと抱かき寄せ半はん「モウ實じつ正ただに氣きか付つたのか應うら「チャ私わたくしの目めをまひしでもいたしましたかねへ半はん「左ひだり様さま何なに様さましたことかお前まへの宅うちの戸かどをりをして居ゐる中なかお前まへがアツといふ聲こゑにびつくりして欠お尻しつると最さい正ただ体たいもなひ様さま子こそれから私わたくしも周しゅう章ちやうて呼よびますやうら水みづを吹ふかけるやら誠まことにモウ「大たい變へんに氣きをもんてやうら「息いきをふさかへしたと思おもふとそれからまたふしぎなことが有あつたけれどもお前まへこそそれを覺おぼへなひかへトいひれてお浦うらの



十九 何にの考る風情すら左様おつしやると夢の様に私の實の姉さんたどやて覺へはるま

ひか私の母に後で聞ば理解るから左様思ひな姉にかはつて半七さま今のお名の仲さんのお  
ちからになつて上やて其身の便りにもお願ひやて一生貴君をおろそかにするさとしみぐ  
やましたヨ思ひかけなひことを夢の様に見ましたか半「そんなからか前の姉さんとかいふの  
うら「イ、エ少しも覺へがござぬませんヨそれに今よく思ひ出して視ますと貴君が隣  
へお出なすつて下さいました跡へ知らなひ女中の姿が煙りの様に側へ参りましたからハッ  
と思ひますと姉だとヤス只今の夢を半「ハテそれの他おも言れなひ過たふとがほるがなか  
く「ちよひとはなしてのわからなひ一條だからマア段々にくわしくのちして見よう最何所  
もわるくとなひかへうら「イ、エモウわんばおがわるくはござぬませんト言ながら最前と  
はことかたり半七の氣兼をする心もあくいつしか惚て情人にでもありし様なるその品容半  
七もまぬ去りし頃夢の中にて契りたる浦次は様に思之れて自然と隔ぬ中とありわやしき縁  
にしを結びける

○作者曰そもく此書上の巻より此所まで寔に異しき條下のとと思ひたまひんがよが筆  
に記せしごとくにもゆらずこれよりは今すこしおぼろけある事にて唯初編に出せし従  
女浦次が非業又死したる死骸を三勝の亡骸と思ひ葬りしとは察し給へその念が浦に  
執着さて半七と情人になるの趣きあり

第十八回

十九

再説過去事ながら侍女浦次が哀れなる非業の死去をせし旨趣を後に聞傳へて是をしるすも  
いと不便ある一條どかしその故を何にと問ふかの浦次は半七の屋しさを下り親元へいたり  
し節両親ともに時疫を病て俄に大病とありて死果母の兄ある蛇鏡の伏九郎といふもれ万事  
の世話をし強欲非道の惡黨にてありけるもへ浦次の美貞を視込金まうたをなさんと兼て  
奸計をして居たる所に同じ友人の悪人馬市傳八といふ者或と尋ね來りしが浦次は泉湯へ  
往てかの伏九郎のミ様端に居るを見て傳「イヤア兄貴此間久しく合ねへが噂にさけば大  
分此頃は樂だそうだの舍弟の家財を丸取で譲り金も餘程あつたといぬのなしが殊にまた跡  
に残したうつくし娘が近所の評判にあるとの事だ何にして其方の運の向ひて來たのだ些  
今日の御ちそうおあらうしやアねへか随分奢つてもい、せ此家も相應の直に賣るせナア伏  
「コレ〜何程心易だてをする中だといつてもいじめて來た家の賣直をいふ奴があるも乃  
か不躰千萬な傳「アハ……それも左様だか頼て友達が開傳ぬて段〜這入込日に何様で  
長もちのあるめへと思ふからまさかの節の事をいふのヨ伏「ハ……べらばらめへ長持のちく  
つても重簞筒も小簞筒も揃てあると餘まり下直に見倒すかへ傳「ナニサ見倒さねへから餘  
程の直にふめるといふのだアトキニ噂のお娘は今日の留守かナ伏「ナアニ今風呂へ這入に  
往たア一女の湯といふもればか〜しく長へもんだせ傳「左様ヨおアそれに美女の別  
して風呂は長いものだ。ア、コレ此方の娘が其許の親身でねへと能金まうけの口が在けれ  
と實の姪女だからはなしも出來ねへか伏「ナせ〜姪でも娘でも金になる相談なら遠慮の



ない事九言て聞せて呉れア嫁に行のか妾に出すのか何だ、傳「さればサ嫁ではねへ妾だ  
 が只一通りの妾ではねへ少し先方にいにくがあるから其故でどうも往人がねへのサ伏「ハ  
 テナそれはまた何様いふ理だの傳「エその道理かひなして看とばかくしい事で當世の落  
 断の序言にも出来ねへ古風赤一件何でもマア妾にも仕たり薬にもするといふとだ其處で  
 終に命にかゝる様だから誰人も承知して往者も遣る者もねへと云のヨ其代りよ女が美貞  
 て親元が承知さへすれば二百兩までの呉れるがまづ宛初に五十兩渡して當人を側へ置いてい  
 よく主人方の役に立れば跡の百五十兩もわぬすといふのだ伏「イヤそれはマア面白へはあ  
 したが何と此身が姪を其所へ出して金を貰ふとバ出来めへかナ傳「それの向ふの氣に入て  
 此方も始終娘か何様なつてもかまさないといふこゝろ持で出せば金と出すに違へはねへが  
 伯父と姪との中ではそれも出来めへまゝ娘ッ子も不承知だらうせ伏「ナニくそれのかま  
 はねへ何様で地みちでと相談の出来ねへから何とかな睦をこしらへて欺して先方へ遣せへす  
 れを死でも生てもかまひねへ何卒首尾よく納て呉めへか傳「お前がその氣なら先と直に出  
 来る事だ賢之女が無つてたづねゆぐんで居るのだから今にも相談が出来るハナ伏「そりや  
 ア有難へ夫ならば何分お頼みだ娘の何様で最一二年侍女奉公か好た旦那あらばその妾にで  
 もならうかといふ了簡だから甘く欺せば直に目見へに出るに違へねへさかし再度来る節の  
 老實な風俗で来て被下ねへと談じにくいせそしてナト耳に口をよせてしばら伏「ナわかつ  
 たる傳「ム、よし、よし、よし、夫ならば直に屋敷へ往て来やうト立上れば伏「ナヤ先は屋敷か

傳「左様サ町家に其様を野暮なはあしがあつたものか伏「左様サノそれぢやア何分お頼みだせ  
 傳「承知く大丈夫に先と出来るから娘の不承知でないやうにこしらへなせへとして此身  
 の骨折の二割取が合点か伏「エ、二百兩で四十兩かそれ之餘まり傳「少ないとあもふなら  
 最十兩も増てくれるがい、伏「エ、むしのい、事をいふかア欲の深へ男だ傳「アハハハ強  
 欲の本案の癖お他人の事が言れるものかト笑ひながらに出行しが此後伏九郎と浦次を何と  
 か欺死て竟に傳入とはかり彼屋敷へ出して目見への日より直に奥へといめられ再度表へ出  
 ざりけるされば浦次の世の常の侍女奉公とおもひの外屋敷といふも田舎にて四方の圍に長  
 屋もかく田畑まじりの耕地の庭荒れてたりし古御殿に男女彼是十人ばかり他にの家もあ  
 らずして主人と見へしは四十才を二ツ三ツ四ツ越たる年頃惣髪を撫付て顔色いど悪さげ  
 あるが上座にありて盃を手に取土小女又酒の酌をどらせながら側近く浦次を呼出し▲「遠  
 慮せずともこゝへくサア膝元へ近く倚たれトいひのれて浦次のおづくと膝をすゝめて手  
 をつかへ首を疊へすり付れば▲「コン、顔を上げて見せやれ何もいづかしの事いふハ、  
 先刻透見をした節よりは十倍の容員で在ドレ、まづ脈を伺がをふ手を出して看るが能  
 トいそれと浦次の氣味わるく合点かかねば跡はさうの座を立んとさしなるを主人の怒つ  
 て聲を烈しく▲「イヤ近く参れとサのにおせ次へ立せとするのだ逃ても逃さぬ其方の身の  
 上伯父伏九郎から二百兩の金子に買切てある予命を被召として後日に一言の半分ない  
 といふ證文が入てゐるハ浦「エ、何様いたしまして左様な事が▲「あるまいと思ふならば證



文を出して見せるまづそれは兎も角も直に薬を拵らへれば今直に其方の苦痛それを暫くも  
 るして置はうつくし顔の艶寵愛いたしぬらへで十分心に叶つたら薬を取のは止にして不  
 便を加え遣のすが心にそむけは忽ちなぶり殺しにもなる事だぞサア直に膝元へ來からぬか  
 ト白眼付たるおそろしき浦次の悔しさを悲しさに身をふるはしてうづくまるを主人はづか  
 く進を倚 ▲「サア手荒い目に合が否あらば自由にちつて居やれといひつ、浦次を引起し  
 ▲「おんにも怖いとをするのでない脈症を看て用ひ方が違ふのだハト無理に手を探脈を  
 考へ顔を情うちながめて莞爾笑ひ ▲「イヤこれの奇妙だ人相を見にまだ是迄男に合た事も  
 あり脈は左右六脈どもに平かにて氣血のめぐりも極順道近來稀無病の體ヤレ、是の堀  
 出しものだト撫つさすりつ浦次を抱へ身動きさせず奥の間の寐所とおぼしき小座敷へ伴な  
 ひてこそ入にける

○そも、此大家の主人といふの何者なるかいまだ其素生をしらすまたこの古御殿とい  
 ふはいかなる武家子とたづぬるに或大家の抱へ屋敷ありしが當時お拂ひ物とありしか  
 ども買人なければ今の主人が假住居をねがひ賣るまでの留主居とあり其他家來の重役  
 は風躰をして居たれども買は難病奇病を療治する浪人醫師にて蟻松曲全といふ曲もの  
 ありけりされども醫師の業は種々の丹練をちして長生不老の妙藥またの勞症の助り難  
 きを治しあるひに隠虚して火動やまひすべて命にかゝる病を大金さへ與へらるれば  
 速に治すと云へりさて其藥を製法するに 姪婦の腹を揉崩して流産させ其赤子の血

をとりて藥としすべて魚鳥毛もの何によりらす生物を殺し直に藥をちして功効ある物に  
 のと心得たる不仁れ曲者ありしがなほ非道の中に於ても歳若き女のいまだ小兒を産す  
 乳も出ざるを求め肌細りに顔うつくしく無病なれば千金の價にあるとて妾のおもひさ  
 にてこれを抱へ古今奇代の術をもつて其女の情を動かし物身の人油を乳房より絞り出  
 し器にと、のへて藥とす此法に用ひらるゝ女の半年の命をたもちがたくのしめは喜悅  
 の情發り後の苦痛の甚しき事なれば二三月にて死するるといへり案するに浦次も此藥  
 法にもちひられて死したるかそれを嫌ひて自ら死を遂ぐ死骸を川へ流されしか入水せ  
 しあるべしそれを三勝の亡骸とおもひ吊ひたりしも因縁ある事あらんかさてまた蟻松  
 曲全れ惡事伏九郎傳八等か不届の後々あらわれて重き刑罪に行なれしとぞ此一條は  
 たい浦次が薄命に終ぬる過しことをわづかお記すの事實は園の花の本文にはなくもが  
 などの評あらん事を恐きて如斯されば此後と三勝お浦の唄女の身のうへか園が事のみ  
 をしるし野暮ある典全等か事此下になしとぞるべし

貞烈美談園の花三編  
 貞烈美談園の花四編

爰にお園が父養之進は本家の殿の不所存鎌倉の爲に極不忠を奸謀しを諫め既に廢し



どがめもあらんとせしを身に引請て切腹なし其身の家を斷絶せられて危き本家の悪名を除  
 れさせ先祖への孝を盡しけるが兼て其心あるもへに聳半七を連累するとをいひて所爲  
 と縁離に及びしなりさて其由縁をくわしく説きると人情本の本意ならねば只百分一のおも  
 むれをのぶるのみ看官よろしく察し給へされば昔根の家に仕えしものまでもは咎めを蒙む  
 り養之進が自害によりて女子あれば格別の慈悲にておそのをば追放と仰せ付られしこ  
 りよくの悪事を養之進の身に被りしものなるべし夫盛衰はむかしより珍らしからぬ事あ  
 がらぬ園が身こそいとおしけれ昨日に變る愛難義戀こがれたる半七の離縁の後に實家にも  
 歸り住ことわらずして今の行衛も知れずと聞其身も手便かたとして上へ遠慮の家のとまれ  
 ばあかしく立倚とかなはず乳母が忠義の心より彼が在所へ伴ひ行て時節を待の外もあしど  
 涙に噎て正体な死處女心をいたり慰め屋敷を追ふのついでに三四月の間のひ隠れて  
 在所へ引移る支度を調のへけるが其支度をあす家といふも以前屋敷へ通ひ稽古に上りし琴  
 の師匠のとあれば同じ女の博明す只おいたのしさいのさぞお心細からうのといふばかりにて  
 力にさる程の事もあし折うら来る下部の菊平  
 作者曰この菊平の其はじめ半七が實家よめてめし仕ひそれより昔根の家よめてもこれを用  
 ひしがいかなるもへよか半七の離縁の節より猶お園の方にてそれがために實をつくし  
 て仕え此節宿へ下りても相かばらず用事を足て乳母の相談相手にありしとぞ  
 菊平へ「今日のお乳母さんぞ昨夜のお待ささいましたらうまた此節の事だから菊平まで

が大膽とでも仕のせぬうとほ心配でございましてらうが私の昨日終日何様に氣をもみまし  
 たかモウく悔しうございましてらうば「チャク」何が其様に悔しい事が 菊向くと被仰り  
 れど例の不用の品のお拂に付ましてサ誠に呆れるほど直段が下直ございましてから腹が立  
 てありませんけれども些も知らぬ所では後難を案して買ませず知つた所でも足元を見て  
 捨る様な直の付やうをいたしますからサ うば「左様かへナニ何様も詮方があぬのチお前の  
 了簡で少したでも能から拂て仕まつておくれナ 菊「エイ私もそのころで拂つて参じまし  
 た」 嗣巻の財布よりして小 菊「やきく骨を折てこれやどにいたしましたらうば「チャク」  
 此位になれば随分能は子何様してくお前だから此お金にあつぬのだヨ何様ぞ私の十兩に  
 もなればよいがどおもつて居たのチトホロリと涙を落す 菊「おせお泣きさいますの菊平の  
 仕やうがお氣に障りましたか うば「イ、エ何様して其様お心は少しもないはね私が涙をこ  
 ぼしたのには常住殿さまの思にあつては家來が一人でもお嬢さまのお行方をお案しやてせ  
 めて貞でも出しそらお思ふのに怪我にも其様な人がないから憎い衆だと恨む中でおまゐ  
 の忠義な志を祝に付て有がたい人だと思つたら竟涙がこぼれたのだヨかならず悪く思つ  
 ておくれでよいといふを聞居るお園もまた歎きの中に菊平の忠義を嬉しくおもひてやそ  
 の「平んに今でい便りにあるものは男で菊平ばかりだ子乳母やそのお金をわけて多分菊  
 平にお遣りさうば「ハイ左様いたしましたせうヨ貴嬢にの些ども分解すまいが乳母の存じま  
 したより倍にありましたお拂ひもの、金子でございましてから十兩と此度の菊平が忠義の御





九十九

賞金に遣はしませう子 菊、イ、エ、それの大變な丁簡違ひでございます是までの様に  
 思し召ては此末が續きませぬ先第一にお嬢さまの住居も定まりませぬのわづかの金子  
 でもお手放しおされて濟ますものか殊に大金を菊平がいたいて何にいたすものでござり  
 ます私の是からのち何様も活業でもいたして不及ながら御浪人中を御見繼やます心で居  
 ますものヲ決して私へ御給金にもおよびませぬうばはんにお前れ氣質でと左様いふも  
 つともだから亦後しての事に仕様ねへとして御太儀でも私と同伴に今までの御出入の呉服  
 所まで往てお呉奇 菊、ハイ長谷川町の丁子屋でございますか うば、ア、左様サ今さら往も  
 面目ない様だけれども御やーさのお拂い少しも滞つた事なし大切に御用を達た丁子屋の  
 とではあるし直段も下直にとたら家だから 菊、ハイそれは宜しうございます只今此中  
 で呉服物の御用どのうば、ナホ、成ほど貴者と、お思ひだらうがね前の男で氣の付奇  
 にも道理だが他の呉服を買のでないと手たどへ少しの間でも田舎や町家にお嬢さんを置  
 ちそのに今までのやうに美麗なものばかりでは他見がわるひから下へで着用にとる様な  
 召ものど二日か三日の御道中でも旅の支度が入ますからサ 菊、ハ、アなにさま左様でござ  
 います子私は其處までは氣が付ましなんだ左様なら直にれ供をいたしませずト立か、れば  
 乳母のお園ふそのよしを云聞せ呉服屋さして出ておくお園のわづかに昨日今日なれに家  
 をはなれたれば手狭な家の鬱々ど氣もふさがりて退屈し二階へあがりて休息しな行す  
 へを心細く案じ入たるその所へ下より登る此家の主琴の指南のお富貴 ふだアノウお園さ



百まへお願ひがございますすが宜しうございませうか。その「イヤ何でございますか」ふふ「イヤ  
他のお願ひでございませんが只今私の例も上るお武家から急お被召まえたから只今直  
にお使と同伴にまゐりますすが折悪敷お三を買物に遣としましてまだ歸りませんから少しの  
間貴嬢お一人になりませうから些お淋しうございませうが何卒留守を遊ばして被下ましナト  
いはれて否ともいはれねば。園ハイナニ淋しくございません其うち乳母がモウ歸つて参  
りませうから。ふふ「ハイお三も今に歸りますすヨトひつ、下へ下るよりはやく支度も破  
と屋敷の下部に伴なれ出入武家へ出てゆく跡はお園の住着ぬ町の長屋の表店只何となく  
氣味わるく表の窓の障子も閉裏口を用心なし前後視まはし居所へ表の格子戸ぐわらぐわら  
押開きどか／＼押入る五六人お園はハットこれを視ればさも勇悍なる壯年が奮脱お突立て  
五六人「ハイお師匠さん今日の。▲×●「どうぞまた御苦勞ながら些お頼みますすトいはさ  
でお園は是まてに屋敷に居ては夢にも出合ぬ人品れものいひさへも承知ねばまご／＼して  
その「アノ乳母が居らぬいから何やら私よはわからぬいから後に何卒参るやうに。▲「エお  
乳母さん何様したとへ何も乳母さんの事じやアございやせん此度子町内に居た田夫松が  
瘡で體がわりいから温泉場へ往に付て近所の稽古所を些づ、もらつて道るつもりだからお  
心もち次第に何卒お頼ナやす何も大壯事ぢやアあし乳母さんまで相談仕なさるにやア  
およばねへ。▲「ヤイ次郎ヤイト表のかたへむかひて。▲「エ次郎其方此家のお師匠さんの心  
易いぢやアねへか毎度お乳母でなけりやアものがわからねへか／＼何は琴の師匠だつて

町内の若者に挨拶を直に仕ねへとはチツト高く留り過るナア。●「ヤイ／＼其様に悪く言な  
へかはひそらにお姫さまを視る様なお師匠さんだから慰に稽古所をして居て乳母まかせ  
かも知れねへ。×「ヘン違へねへ左様だらう何でも貴ふものをもらつて往うぢやアねへか。▲  
「イヤ次郎ヤイヤあの野郎アまた烟になりやアかつたせ。此ころのいやりとばにてなにご  
ち消するを。●「あいつが癖だアトおそのに向ひ。●「エモシ今いふ通り後生だと思つて手些  
ばかり難義を救つて遣つておくんなせへお出来ねへのかへト勇悍いはれてお園の氣味わる  
くふる／＼ふるへてそれ「ハイそれでお金を上げるのでございませうか。●「エおに金でなく  
つてもトめませをして。▲「着類でも米でも施しなさりやア何でも能ごせへ升へ、ハ、  
ト戯言紛れに言とを竟にあらざる事なれば只おそろしく怖／＼ながら一間へ入て乳母が  
仕まひおさし金子の中二三兩とり出し首を傾て幾たび紙に載たり包たりさま／＼に考がへ  
しがやう／＼と思案を定め減少して小判を一枚紙に載て大勢の前へさし出しその「左様な  
らば何卒マアこれをお持被遊まし只今の乳母が居ませんから何様も私には知れませんか  
らトおはれて來りし人々の互に貞を見あひせておもひがけあき過分の合力町内中でも一兩  
の金と調のひ難からんと胸勘定も有もれを餘りの事に氣味わるく。●「それぢやアそれを  
何様仕ますのぢやその「ハイ何卒それをお持被遊して被下ましト。何やらさ、やだ。●「×「  
左様あらばマアお費ひやませうこりやア大きに御苦勞をかたや／＼たトいひッ、門口たち出  
てがや／＼／＼ト行過る跡見送りてお園の溜息涙ホロりと獨言その「ア、一町といふもの



百は怖いものだ乳母は何様しやツたか早く歸つて来れば能にまたあの様なものが来たら何とせう否事ぢやと身を締め案じ入こそ道理なれ

第十八章

さてもお園は忙然と乳母の歸りを待ツ、も四隅を視廻し氣味わるく日のあるうちに歸らず何となさんと胸塞り衿に顔をかきつけて涙をうかめし美麗さは露をそへたる海棠の花もかよばぬその姿給にうつすとも筆になは及びがぬくどおもはれける斯る處へ表の格子戸さもいかめしく押明て入來る人の兼てよりお園が嫌ふ墨太郎「チ、お園さんか放心く爰に居るとは何様したものだサア」早く立退支度をして被成ぬへかといはれて驚く其折しも嚴重に出立たる侍兩個づかくと上座に通リ侍「この家之主のいいたしたサア目通りへはやく呼出せその「エ、ハイ今日はお屋敷から呼に被参まして只今の留守でございます御用あらば歸りました時分に侍「イヤ、ヤ左様に便々といたして居られぬ先第一は相濟ぬは其方の事にかに女あればとて苗根養之進の實子でないか格別のお慈悲をもつて御追放とあるから早速土地を立退はつて此處等へ同居いたすとの憚りをかへりとの重々の不届これに依て再度文注所へ召連参れとの被仰渡サア只今より同道いたすしかし此度は御用捨なく不便から命とあるまいト云を聞よりお園とあるく何と返事も泣ばかり其場にひれ伏正体なく取乱したる哀れさとも思はぬ邪見の言葉侍「ヤア泣たればとて用捨はさらぬ直に往すの纏うつて連参るぞサア」早く立させいその「ハイ私は何事もぞん

じませぬ乳母がさしづをいたしまして赦の支度が出来ます間一日二日此處に居ます今に乳母が此宅へ歸ましたらば直に遠里へ参りませうから何卒左様に思召して侍「イヤ」左様の相あらぬ既に其方がこの家に隠れ居ると顯はれてあるうへは片時もゆるして置事は存じもよらず去ながら女のとへ他目の恥を了簡ちして途中の駕籠を御免被成といひツ、外面へむの侍その駕籠を家内へ入れ「ハイかしこまりました既に駕籠をつりいれて侍とお園にたちか、り引立んとするを先程より扣へ居る墨太郎侍を押隔て中へわたり入すみ「アイヤ暫時お待被下まし只今の仰せ御尤のやうにござれども致あらぬ女の事當所を他國へ参るに付て旅の用意に兩三日知已の方に居ればとて左様に願しくお咎なるとサす事はこれまで聞も不及ござれたとへ右体の御下知にもいたせ各々の御勘辨にて御見返しを願ます侍「フムウ視れば其許も武家の風俗それに似合の輕くしい御挨拶武士の身分で有ながら役義を廳略にいたせと合点もかねず分急度仰せを承とつてまかり向つた我く兩人さまたげいたす仁があらば彌もつて用捨はならぬ是非にとならば其許も召連さん覺悟のれすみ「其處を何とぞほもうめんを侍「イヤ」猶豫の決してならぬ。ありやなぬといひ放ち泣入るお園を乗物へ無理無体に押入て墨太郎をば白眼つけ侍「些どもはやく急ぎ参れかご「ハットこたへて諸肩れ飛がごとくに走去れば兩個の武士も駕籠に引そひ跡にかまはず欠りもく墨太郎は四隅に氣をつき思案をしてありけるが納戸の方へ往んとする折しも表に人音足音立歸り來る乳母と菊平墨太郎は仰天なし裏口の戸を蹴破るごとく踊り出路次



うら通りへ逃て去そのもの音に裏口を見れば欠出す後影誰か知らねど怪しき奴と直さや  
 跡を追ひけを紛れて行方を見夫あひすくくと立歸る乳母は跡にてお園をたづね呼べども  
 答へぬ家内のやうす胸さわささへ常ならずとらうくせしが菊平の歸るを見るより立か、  
 りうば「菊平どのかお園さまがお見へ不被成が何處へお出被成たらううことに此處のお師  
 匠さんも留守のやうす今逃出した奴は何者でか合点のめかぬこの始末は菊「エ、イナニお  
 そのさまがお出なさらさいエうば「サア何程おたづねやても一向にお返事もあし何かあや  
 しい事ではあいうへ菊「ハチナそれじやアいよく今のと儘にうば「今のはばへ菊「され  
 ばサ後姿で覺束ないが何様やら墨太郎さんのうしろかげに似た人のやうに視へましたう  
 ば「うれにしても師匠さま迄家内に視へぬ之何様した事か菊「當りなけれど心を的に跡追  
 かけてお行衛をドレ此儘にと欠出す菊平乳母の胸の痛めても其故由が解らねば唯案じつ  
 待甲斐もなく暮行入相の鐘も哀れに告渡りいとど心を悩ましてやうく照す燈火も影  
 うすくらさ片明り春戸を見かへり表を覗き思にしづみ居たりける斯てお園は駕籠の内に悲  
 しさ怖さ娘氣に何様あると知られぬと直さま田舎へ立退ざる罪によつて再度のお咎め言  
 解あらぬ落度ぞとおそれて昇がれも果は前後も辨まへなく夢のやうにぞ思ひる、既  
 に夜道にか、りたる往來もまれある田圃中駕籠を下して休息すれば左右に付添侍も汗を拭  
 ひてホット息侍「ヤレ〜大さに御苦勞〜とて乃事お是から夜通しモウ十里も鎌倉を  
 となれて仕まい度ものだが左様出来やうかノかど「ある程そりやア酒代次第長崎の果まで

も通し駕籠を昇も仕やせうがマア爰まですましく昇出した褒美をしツかり貰つてからまた後  
 の相談にか、りやせすヨナア棒組侍「ハチ是迄の骨折は最前渡した二歩の金子かど「エお  
 りやアお定りの駕賃だアチ酒代はまだお貰ひやせん侍「コレサ〜おんは駕昇でも  
 其様に足元を見る奴があるのか爰まで道路が何程あるものか十五六丁に足ねへ所を貳歩  
 の金で不足といふのか左様欲ばれを定め乃賃銭此方へ釣をとらにやアあらねへかど「アハ  
 ……欲づくならば私等よりかお前方の方が餘程欲が深からうじやアねへかかの墨太郎さん  
 に頼まれて陸いつわりをあらべる役目その所得の前金に請取すツた悪巧ハチ大略は推量  
 に違へぬへその墨さんの陰、懸所爲を視込で當人をば前立につかひこの娘御を金にする途  
 中からの出来心サアそれだから駕賃も急お直上ケの御相談なんど無理を欲でもございやす  
 めへナア棒組かど「いんすどしれた酒代の無心の今まで芝居でも能爲とだアあた欲はねへ  
 私等だからチット見越の直段付だがさツと此娘の身の代を百兩とつもつてその一割十兩呉  
 ちさればマアこゝまで息なしに欠出した骨折がうまらうといふものた侍「ヤレ〜この腰方  
 どもが悪大壯などを吹出しやアがる十何様で此様をとする此方さまが其方たちに利徳を  
 とられてなるものか左様ぬかしやアモウ我等にやア頼まねへ侍「イヤ左様はいふもの、  
 仕かけた業を途中で止るも氣の毒だナア駕籠や何にしてもモウ少し昇て下せへ酒代も増て  
 やらうかト兩個の侍二人の駕昇勝手なりける欲徳をいなすを聞て駕のうちお園のとじめ  
 て文注所の役人あらで墨太郎が悪巧よりいでし事と知れども東西わらぬ野中逃出さんと



うら通りへ送て去そのもの音に裏口を見れば欠出す後影誰か知らねど怪しき奴と直さま跡を追ひけを紛れて行方を見夫をひすくと立歸る乳母は跡にてお園をたづね呼ぶも答へぬ家内のやうす胸さわぎさへ常ならずとらうくせしが菊平の歸るを見るより立かりうは「菊平どのかお園さまがお見へ不被成が何處へお出被成たらううことに此處のお師匠さんも留守のやうす今送出した奴は何者でか合点のめかぬこの始末は菊「エ、イナニおそのさまがお出なさらさいエうは「サア何程おたづねやても一向にお返事もあし何かあやしい事ではあいらうへ菊「ハテナそれじやアいよ〜今のと備にうは「今のはへ菊「さればサ後姿で覺束ないが何様やら墨太郎さんのうしろかげに似た人のやうに視へましたうかけてお行衛をドレ此儘にと欠出す菊平乳母の胸の痛めても其故由が解らねば唯案じつ待甲斐もなく暮行入相の鐘も哀れに告渡りいと心と心を悩ましてやう〜照す燈火も影うすくらさ片明り脊戸を見かへり表を覗き患にしづみ居たりける斯てお園は駕籠の内に悲しと備と娘氣に何様あるとか知られぬと直さま田舎へ立退ざる罪によつて再度のお咎め言解さらぬ落度ぞとおそれ〜て昇がれぬ果は前後も辨まへなく夢のやうにぞ思ひぬ、既に夜道にかゝりたる往來もされある田圃中駕籠を下して休息すれば左右に付添侍も汗を拭ひてホット息侍「ヤレ〜大きに御苦勞〜とても乃事お是から夜通しモウ十里も鎌倉をとなれて仕まい度ものだが左様出来やうかノか〜ある程そりやア酒代次第長崎の果まで

も通し駕籠を昇も仕やせうがマア爰まで大きく昇出した褒美をしつかり貰つてからまた後の相談にかゝりやせすヨナア棒組侍「ハナ是迄の骨折は最前渡した二歩の金子か〜エおりやアお定りの駕賃だア酒代はまたお貰ひやせんせ侍「コレサ〜さんば駕身でも其様に足元を見る奴があるものか爰まで道路が何程あるものか十五六丁に足ねへ所を貳歩の金で不足といふのか左様欲ばれぬ定め乃賃銀此方へ釣をとらにやアあらね〜か〜「アハ〜欲づくならば私等よりかお前方の方が餘程欲が深からうじやアね〜かかの墨太郎さんに頼まれて陞いつわりをあらべる役目その所得の前金に請取あすつた悪巧ハナ大略は推量に違へぬその墨さんの陰「悪所爲を視込で當人をば前立につかひこの娘御を金にする途中からの出来心サアそれだから駕賃も急お直上ケの御相談など無理な欲でもございやすめハナア棒組か〜「いのすどしれた酒代の無心の今まで芝居でも能爲とだアあた欲はね〜私等だからチット見越の直段付だがさつと此娘の身の代を百兩とつもつてその一割十兩呉ささればマアこゝまで息なしに欠出した骨折がうまらうといふものな侍「ヤ〜この陸方どもが悪大壯などを吹出しやアがる十何様で此様をとをする此方さまが其方たちに利徳をとられてなるものか左様ぬかしやアモウ我等にやア頼まね〜侍「イヤ左様はいふもの、仕かけた業を途中で止るも氣の毒だナア駕籠や何にしてもモウ少し昇て下せ〜酒代も増てやらうからト兩個の侍二人の駕身勝手なりける欲徳をいなすを聞て駕のうちお園のとじめて文注所の役人あらで墨太郎が悪巧よりいでし事と知れども東西わらぬ野中送さんと



百思ひつ、ひまを覗ひ身づ、ろひしてもさすがに足弱な其身をしれば逃かふせることなるや  
六〇 じと案じつ、猶豫てこそ居たりける

第二十章

涙こそ行備もしらぬそわの崎さの、わたりの雨の夕ぐれそれと名所に寄る歌これに憂身に  
憂事の重ねかさなる雲のわし俄に車軸をかし流す雨に轟く震動雷電目さすも知らぬ眞の暗  
グワラ〜〜ドウ〜〜グワラ〜〜ビカ〜〜かこや「チ、おそ  
ろしい稲光りだヤレ〜〜種々に狂言が入組だがまづ自己が座頭役となりおふせたト獨  
言をいひながら辻堂の椽に雨やどり四邊をすかし詠めてもいと小暗さ森の中や〜〜少  
し遠ざかる雷の音に安堵して狐捨子の中を覗きかこや「チイ姉さんモウ雷さまも遠くへ  
行てしまつたのら怖くいないせチヤ返事を仕ねへのか今のビシヤ〜〜で氣絶をしり仕  
まいかドレ抱おこしてもの和らかに介抱してやらすはなるめへン清水を含で口移しやう  
〜〜に氣が付て男の鼻を見て恥かしそうに微笑として信切な介抱ありがたうぞんじま  
すト目と目を見合す初戀のといふ場を見せる鶴やの録さんへ、啞方どもをば能操梅に出し  
抜てくれた侍、兩個が發明そうに出し抜たといふ墨太郎とやらが追付て仲間割が三口とな  
つて棒組五郎太が喧嘩の例杖うち倒された薄命墨太とお侍が切ひすふ三人の立廻り下座  
あつらへの鳴物と仕組だやうな俄兩騒ぎに紛れて駕の内逃出すお娘を氣も付す夢中で切あ  
ふ白刀の稲妻轟らわたる雷神に逃足す、む此娘は天の賜ものさぞとやら脊中にしよつて彼

是半道丁十八小兒におおじ花車娘を此録さんに結ぶの縁はたじかに神さまのお引合せだイヤ  
ありがてへ丁度良を見てたのしまふといふ所で雨が止む雲が晴る月が出るユリヤア十分に  
僥倖がよくあつて来たドレ〜〜お娘ぢやアねへお園さんとやらチイお嬢さん是のししたりぢ  
せ格子戸を内から閉た最初にお前ばかりをこへ入て自己が居たの万一追欠て来るする  
あとの用心また一ツよはお前が雷を怖がるから此所に眼張て居てやつたのだサア〜〜明  
なト格子戸を外より開んと悶もれどもなか〜〜明す堂の中は息の音も聲へぬゆへに腹た、  
しく物身の力を両手に入れ足を踏しめ格子戸を曳聲にて引わくれば内より突出す腕拳駕籠  
鼻の陸と左なくともさらりと明たる戸のつみによるめく足元鳩尾を突きて襟より仰向に  
轉びおちて足腰をした、か痛め良を蹴えろく「アイタ……チ、一痛へなにが胸へ當つたか  
何でも握り拳でつきたはされた様だ但し娘が手を出して自己を引入れるといふ心で出した  
手に突つたつて此方が方に餘されたのかト言ッ、椽を見上ればお園に菊平が苦笑ひして突  
立ちたり陸はおされて口を明し暫時ともものいごとざりしが頼て力足を踏ならしるく「ヤイこ  
の奴めが己等ア何時の間に其處に居やアがつて自己が情合の邪ア仕やがるのだ菊「アハ  
、其方も余程の道化だナコレ能聞ヨ此奴さまは其方が此所へお供をして来たお嬢さまの  
は家來だの。アハ、何と膽がつふれるか己等が候黒の一件の今吐したので不殘知れたは  
其咎を糺したうへ墨太郎の、身のうへまで只いおかれぬ事だけどもお嬢さまにお怪我  
七〇 百のねへ悦びに其方を其儘ゆるしてくる予るく「いまま〜〜しい素奴めが邪アをひるけば是



非がない誰かと思ふへばかな面をこれ程までにしてハイ左様ならといふものかサア腕づく  
 だ子覺悟しろト踊りかゝるを菊平がさすが武家のこゝろ掛身をしづんで引ばづし角力の  
 手練か早業お曳と一聲もろどもに前なる小川へ水煙りさんふと打込おとをも見ず菊「サア  
 お嬢さま菊平は脊中へおぶさつてお在被成ましその「ナ、怖かつた怖ろしいとわたしの死  
 ちうと思つて居たヨ何様して其方の私よりささへ此お堂にかくれて居たか誠に不思議仕  
 合で眞正の菊平でとさいかとまだ少し氣味がわるいやうだ子へト菊平をさへ疑がふは處女  
 心に無理ならず菊平も是を聞實に尤とこゝろ付さく「なる程私がこの堂の中に居るは  
 づがないとお疑がひも無理でございませぬ狐狸の所爲ではさいかと思し召ませうが  
 私乳母殿と同伴に歸つて参ると脊戸口から外面へ逃出す人がございませぬからあやしく  
 存て跡から續て欠出して看ますとぬしかに墨太郎さんの後姿追かけて見ましぬけれど  
 も何のもへだか知れませぬまた貴嬢のとが案じられますからとつてかへて家内へ這入ま  
 すと乳母殿が泣聲で貴嬢がお在なさらないとすすもへ南無三寶と再度外面へ欠出して最  
 早わからぬその方角途方にくれた此耳へ風ツとといつた辻占の何のとか知れませぬ何で  
 も西の方に違ひはさいと二人づれの咄一聲その往來の言葉をも方にいたす貴嬢のお行衛當  
 所も何もございませぬが神佛の方便を心に願つて無法に此路へ欠出して此所までまいる  
 と夕立に降こめられました此辻堂暫時雨を凌がうとぞんした所へ貴嬢の泣聲とび立ち、ろ  
 をおし鎮めて隅の所に身をひそめ様子を伺がひ居ましたればかの駕昇めも追手を氣にして

貴嬢ばかりをこゝへ置いて小戻りをした其間に私がかた此始末今まで貴嬢も聞わけて登る  
 出さずにお在被成たから彼駕昇めを出し抜に投出しました私の功名マアあらまはわか  
 りましたらうまだ御合点が参らなは後途中おはなしませませぬはやく私の在所まで  
 お出被成ましモ此處からは横に入九丁でございませぬいぬれてやうく心もおちつさ  
 その「それでは私が連出されると乳母や其方が摺違ひに歸つて来てくれたのかへ菊「ハイ  
 マア左様でございませしたらうサア丈夫とこの脊中へ負れて被下まし又も悪漢どもに出合と  
 面倒でございませその「イ、エそれでは其方の足が草臥てまさかの節に難義であらふから  
 私しは歩行て菊「イエ、菊平が力で貴嬢のやうお身の軽いお方を負つたどやて何の勞れ  
 が出ませうぞサア「くいやくとお園をば腰帯とめて脊後に負かの細帯にて結び留三才兒を  
 脊負し如くの出立辻堂を伏拜を危難を遁る、願ひををし勢ひよくもかけ出す折から最前小  
 川の中へうち込れたる駕籠の陸水ふるひして這上りろく「左様のさせぬト菊平の踏出す足  
 へしがみ付此方は覺へ乃角力の業心得たりと蹴飛して再度溝へ眞さかさま實に心地よそ  
 の働さ幸ひなるかな雨後の月一ト隙はれて案内も兼く知つたる在所路田甫傳ひを走りゆ

扱も墨太郎はお園に家の大變に付込て同しやうある悪漢をかたらひはかりごとよて己  
 が懸幕の情欲を遂んとせしところ中間割にてことごとく手違ひとなり骨折損れみなら  
 す同士打にて一人へ即死一人は人手疵駕籠昇二人も命に別條のあさばかり放くの体



にて逃去りたり墨太郎のみ怪家もせねど何とやら後難もふろしく虚病をのまへて  
家に閉籠りひそとけるぞや

第二十一章

心でこれを愛しても口にはさか言けな一他見ばかりの而憎さ賤しき身にも情の實あれば  
こそあれ綾綿のさどをば後に見捨つ、氣疎き野邊の草露を踏わけ通ふ戀の宿小岩の原と聞  
へし旅宿絶す賑ひひて繁花の町のうかれ人もこの飯盛妓女のもとへ往來の遠さを苦に  
もせずかひひけりやこそ閑田からかよひなれたる鳥邊山沙入土手の夕照を暮る間遅しと蠟  
をよとひ歩よりもく惚れた中は雨にもぬとはぬ笑輪の町天神山を中宿へぬけて夜みせの  
先がけは場所にくわしき客人あるべしこの下宿の旅泊屋の多かる中にとりわけて例日賑は  
ふ梅本と呼れし二階の小座したに逗留したる判次郎いつしかこの女子の中にお仲といへ  
る婀娜ものど通ひあれたるむつまじさ他の座敷の給仕の間をいつして惚れたる判次の倒息  
さへせはしく轉び寄仲判さんさぞ淋しかつたらう判「ナアニ大そうに早かつたヨシの  
し他の座敷も大事に仕ないどわるいヨ自己のやうに何もかも前にはかり世話になつて氣  
の毒だけれども何をいふも當時は身のうへだから堪忍して呉な定めて都合のない男だとか  
もふだらうが頼て恩がへしをするから何卒左様思つて呉あト毎度やさしき男の言葉元より  
實意を仕尽してかゝる所の紋日にも過たるやうに行届き六月三日よりの祭禮にはお仲一人  
で若充中と井籠を積せたる花麿を遊びに引かへてせかぬお部屋を窮屈に思ふほどある惚た

同志互に異見して見たりされたりしても一日も逢ねばつらい戀の癖誠と誠が合縁の苦勞も  
うへつて樂しきとあるは流れの中よりありて素人の及ばぬ意氣地ぞか志只一言のやさしさも  
常のお客の百言にまさりてうれしきお仲の微笑仲「チャまた判さんが他人がましいなせ其  
様おことをお言のたへ是まで私が當所の若衆にも賞られた行届は不殘お前のしてお呉のだ  
と子今斯なつて見ると私が何様にしてもお前の力にあらなくつてと冥利がわるいの子また  
左様いふと自分勝手をいふやうだが子苦勞をしたりして貰つたりしても恩にも被す被せも  
仕ないのが信切の中じやア有ませんかそれだからモウかあらず他人の様に氣をもんだり遠  
慮したりしてお呉でないヨト膝にもたれて涙ぐめば十二奴でも三步でも及ばぬ戀の誠にて  
業種の花も咲そろひあんど亦に書て來ると惡口吐す行過にはわからぬ情の道あらずや昔  
よりいふ金言にも晝三に辻君の心あり辻君にも太夫職にまさる心だてあきものにもあらず  
濁りに染ぬ蓮の功は知る人ぞしる情合あるべし判次郎いといと鬱氣で居る仲「判さん判「エ  
何だト云ながらお仲の脊見をさすつて見て判「チャ氣のせへか疲たやうだノウ仲「おに左  
様でもないヨそりやア左様とチアノ今夜來て居るお客の子墨さんといふお侍だが初めて給  
仕に出た節から誠に否か人だから毎度不挨拶をして満足にお酌もしさいで他の座しさへば  
かり往て依付ないのに性も困もあくモウ彼是十度ばかり來るの子判「ハテ墨さんといふ名  
の侍だぞそれぢやア自己が知つた人だハトしばらく考がへて居る仲「チャ左様かへ何で  
も立派な風俗をして來ると子判「アムウなせ此所へ通ふだらうか知らんア、一解つたく



それじやアふり付ても路が遠くつても通つてこへ来るはづだ仲「チャあせ私の所へ来るのだね」判「左様ならば言て聞せやうがノ實は此方も當所は路願がわるいからお前の所へ最初に来る縁がなかつたのに去々年の正月の廿一日に石洗井の大師さまへ参つた歸りに一晩止宿たのが病付で斯して來るといふ發端はノ腹を立きさんな此方が前方御ひるさになつて茶の湯道具を賣に往くした屋敷のお嬢さまがモウくくく人品がよくつて好風でかはいらしくつて中分のねへ御容儀ニ誰でも惚ねへものはさいがお庭の櫻で手をだす事もあらさいお歴々だから及びもねへ事とあきらめて居るとも今いふ通り大師さまの歸りに爰へ立依て見たても好みも仕さいの酒の相手に出たお前がそのお嬢さまに眞寫で姿ころかはれ貞から袴元まで少しも違はねへから實は其節自己ア迷つて居るよ、ろを狐に見こまれて化されるのではねへかと思つたくらるだ所でお前も自己のやうな者でもまんざらておくおもつて呉れたと見へて最初から嬉しい事はかり言て聞せたから終こんちに迷つてお前にも苦勞をさせるのぞ仲「チャ何を言かと思つたらば何やらさいとを言て私を馬鹿に被成だニ此様なお嬢さまがわつて御覽な其おやしさいのかつきもんだい子此家へ目見へに來た節もお部屋でと容儀が悪いから置さいと言て居る所へ親類の若竹のお内義さんが來て貞のわるくつても氣が直はらしからよからうといふとどりあしでやうく居るやうに成たのだね直といふと能様だが氣の能の馬鹿だと言ひ子憎らしいト笑つていふ顔色なかく發明のとりまはし通れの女ならずや判「アサ陸じやアねへい何れも女房と思つて居ると言

ちやア自惚だが遠慮も他見もかまはねへ中で世事をいふものかお實にお前が其お嬢さまに似て居るから自己は兎も角も今お前のいふ墨さんが立派な身分で悪しくされるもかまはず來るのだね」仲「チャあせへ判「なせといふが誰しもはれた女を戀ふ日にやア似た女でも戀しくならうじやアねへか仲「チャ左様だらうが子お前の町人だから不賤者から其お嬢さまと夫婦にもあられないら私にやうな者でもマア見そくなつて似あどか似ないとかで來てもお呉だらうが墨さんのおの通り立派なお侍さまだから私のやうな者にふり付られて來るよりか直にそのお嬢さまを口説方が近路ぢやアさいかねへト十分私がお嬢さまに似た氣でいふも自惚の行留りだね」判「ナニサ實正の事だアしかーそのおやしさいも何か間違があつて聳さまの離縁にあつた跡で大殿さまが御死去あさつてそれからお屋敷も斷絶して今ぢやア落くくになつて其お嬢さまの行方も何處だか知れやア仕ねへハナ仲「左様のへそしてそのお嬢さまは何歳くらゐだへ判「エ歳はお前より二歳も下だらうが似て居るといふお前と姉どいつても能やうだ少しも貞のちがひねへせ仲「左様かへ何様して私に似た人が其様に幾人も在たらうか判「ナニ幾人もありしねへ其お嬢さまばかりだハナ仲「イ、エ左様ぢやアさいニ此横丁の天神山といふ所のうら長屋に私の貞と同じ様な嶋田の娘が居ると衆人が左様のひますは誠にモウくく薄命だぢやア姿衣類のさるいけれども私等と違つて人品が能くつて言葉づかひおんぞい何でもモウ大そうにやさしいとサとして兩親はないそつて子四三十ばかりの女を伯母さんと呼で居るさうだが子それがどうも伯母さんでないそつて其娘



百へ對していふものごとがひどく呻嘆だといふ評判でありますは判「ハチナそれぢやア其娘が屋しきのお嬢さんの令路だのかも知れねへかひひそうな事だ仲「チャわりいことをはさしたッけ子判「なせ」仲「それだつてもお前がまたその娘の所へお出だといけなから判「ナアニ此様かはいひものを置と何處へ往ものかモウ」お嬢さまでも奥さまでも用とねへ此娘さへ心戀りが仕さいければ他に之些ども望みなした仲「アレサ其様な氣やすめば有りお言でも由斷はあらさい」實におまへ其娘をかはいひそうだと思ひでたづねてお出ぢやア否だ判「なにしに行ものかそして向ふにも情人の亭主か在たらうじやアねへか其處へ放心」行奴があるものか自己之此娘で澤山だア仲「チホ……嗟をお吐な娘の名代に心でその嬢さんの氣の勿体なきが私さやア否だねへ憎らしい判「自己」どうしてもかわいらしいそれは能が餘まりこ、にばかり居たらわるからぞ仲「ナニ能」何様で今夜も機嫌わるくかへすのだからそれよりかお前は實に其娘に途中で逢てもかひひそうだと力にまつてお遣りじやア否だ判「なせ其様にくどく言のだ仲「イエそれでも其娘が子伯母さんが病氣で活業に困るそう毎晩」三味線を弾て子貴夜て歩行といふ評判」からお前のやさしい心で元から知己たお方ではあるし急度信切をして情人におありだらうと思ふと悲しいから判「ナニ」その氣つかひは仕なさんさそりやアあるはと以前から御恩になつたお家のお嬢さまに違ひなく之恩がしに合力をして上るぐらわのどの人情で爲すひなるまいけれども實」く」やらしい事のお前へ對して神さまかけて他心は些どもないからかわい

そうだと思ひねへといひ入れてお仲は身をふるはして嬉しい思入仲「なせ其様に迷はせるのが上手だらうねへト」判「二の頁を見つめて居たりしが仲「エ判さん今の墨さんに付ておまへに一ツ頼みがあるが聞てお呉か判「なんだ仲「ナニ外の事ではないが子此間中からお前も金入事があるとお言だが子其墨さんを例て見るのに金は何様か出来そうだから吹かけて見やうとおもつたけれどもおまへに悪く推量されるといけさいから相談をするのだはずそれだから何様ぞあしたの晩の來ておくれでない判「をらしなことを言のう來るのが悪かア今でも歸つて來ずに辛防仕様々れどもマア譯をいひねへナトすこし癖癢のやすすもへお仲は涙ぐんで仲「チャお前の腹をお立かへエ」判「お前はモウやさしい癖にさらぬちほくツていけさい」おまへよく聞わけておくれな實お否な人だけれどもふり付ても」意地にか、つて氣根を庇よく來るからあしたの晩來たらバ今までにうつて變つて機嫌をとつて談じ付やうと思ふが子何はお前のためだと言てもお前の來てお在の節にやア氣が引されてなに事も出來さいあら戀しいのをば私が我慢してするのでからかひひそうだと思つてお呉かねへ判「さん左様じやアあるひかへトいふをりしも眞行寺の子刻鐘ボチン」池に下りて居る水鳥の羽音してガン」ガヤ」ガヤ」仲「チャモウひけだねへ判「お前の所へ來る晩に限つて夜が短けへやうだ仲「チャ私もおまへのお在の節にやア夜が短かいはいふとさ障子の外にてたち聞せし人と思ひれ」いまく」しい恍惚めらがトいひつ、廊下をたたく」表さしきの方へもく必竟この、ちいかなるものがたりかある



そは次の巻を見て知るべし

第二十二章

小岩原なる上宿乃東南に續く長堤は淺茅が原の汐入より大橋までの水除にて三在の橋渡瀬の落口東に瀕田の夕照をながめ南に玉姫の森はるかにして春秋の氣色おもしろけれを衆人知らざる田舎道なれば其地の者のみこれをしるしれども風雅の心をければ只淋しき土手とのみよて往來もまれなる耕地ありしが寔に小さき社わり何の尊をまつるかそれ傳來も臨幸れど山王清兵衛の宮と稱て口熱齋を病者は必ずこれに平愈を祈利益をかうむる事すみやかにりとどこればさて置此堤を眞崎の方より北へさしてしづかに歩行二人連の十七八の娘にて髪は島田のくさ束ね黄木の櫛さへさ、ねども袴白粉は雪のごとく貞のか、りもうるはしく木綿の着衣木綿の帯もつくり上手れ品形容の縮緬を着たるにもまいてやさしき愛敬も菅の小笠と三味線を脇に抱へて咄しおがら何か嬉しき思入ありてか一人の娘の微笑としこのふたりれすがたを案するに今 ▲「チャかはひさうあをを言でさいヨ何様してか前ての世の女太夫といふものなるべし」

●「イヤ、エ左様でもさいヨ戀に貴賤の隔なしとか云はす去頃も衆人が噂をした事事だはず」

●「イヤ、エ左様でもさいヨ戀に貴賤の隔なしとか云はす去頃も衆人が噂をした事が有つたッけがむかしッから立派な息子や旦那衆が此方の仲間にて惚て地面も家も捨てはかない私等の丈夫もあつたのが幾人も在たといふから其様に捨てたもんでねへとナ「イヤ、エ餘まり拾つたもんでさいヨお國から來て鎌倉の案内をしらない中は惚るお侍も在が此

地に馴て來ると女郎買にでも出かけて私等にやア手出しを仕ないのね「お待じやア手出しをされない方が能ハナ何卒アソソ根岸の村に居る色男ノ「ナニ根岸の村の好男と誰の事だ「アレサソソ獨身者で居る仲さんとかいふ人ヨ「ウムアノ木戸の入口に摺鉢の冠せてある植木のある家の旦那「ア、左様ヨ何様もモウ「誠は好男子じやアねへか「ア、左様ヨ諸方歩行て看るがあのくらゐ好男の亦と一人ね「ソウしかしお前は何時の間にか名までお覺へだね油斷のあらね「ナニ毎度アノ隣家の宅の伯母さんが仲さん「と名を呼ぶから聞付た「ソは手「チャ私さやア些も氣が付さんだ之名は覺へないが男は美男に違ねへがあんさのも否だ「ソウ「チャ「なせ「おせとおいひだがたど「此方のやうな身分でなくツても常体の娘や内室さんちやアあの男と並んで居られさいは子としてあんな好男といふものは増長してゐるから女をば下直にしていけさいよそれだから男も女も能かげんが宜ハ子餘まり能過るとかへつて愛敬がない「ナニそれでもアノ仲さんとかは左様でないヨ此間ソレ風の吹た日子「ア、私が休んで出あかつた日か「ア、あの日サ私が獨で諸方歩行てモウ仕まひ隙にゐるこの宅へ往て予此間聞覺へにした清元の小菊半兵衛のチャ「ソレ「およぬ戀に上羽の蝶そめて染らぬひよくぞと「トかたると子笑ひおがらあの仲さんどやらが立て來てお錢を呉ながら私の手をしつかりと握つたのそれから直に握りかへさうと思つたけれども餘まり嬉しくつてハット思ふと胸がドキ「トて貞が赤くなつたから私さやア逃出したは「トいひながら路中の石に蹴つまづく「アレマア何だナ餘まりだヨ出し扱





に恍惚を他に請させるもんだから罪がわたつて轉ぶのだアナお前また其時に他人が側に居  
 ずい何と云へば能のに氣の弱い嬢だノッそれだッても此方の身が恥しいから左様に出  
 来ないはチ「チャ」くちよつとアレ見な下宿の梅本のお仲さんとやらがむかふから來ぢや  
 アあいか「ドレ」ナアニ梅本の妓どもが今時分一人で此土手へ來るハづがないとチトイ  
 ふ中に其女は山王清兵衛の小祠へ参詣して鯛の願をかたる様子「エコウ余程人品の能嬢だ  
 ノウ何様も町の娘のやうぢやアないヨア、ねへそれだけれども衣類之其様に能ないチ「ア  
 、何様も大橋の前後には見かけねへ嬢だは「見れば見るやを肌目細かあつつくしい容貞だ  
 「エあのソレ夜る門イよ出る娘も品の能うつくしい女だといふがお前見た事があるか「イ、  
 エ一度も出合たとはいないヨ「それぢやア松屋で小切を買たり河原で慈姑を買たりするうち  
 には日が暮れるたらうから氣を付て見様ぢやアないか何でも素人で歩行のがかといさうだ  
 と云て諸方でお錢を澤山遣らうだハ「左様かれる何も持て居ざア些いじめて遣ふぢやアね  
 へか「チホ……否く何様して其様な意地のわりい事が出来るものか「じやうだんだアチ  
 に實正に左様するものか此方も歩行て身に覺へがわらアチ最今ぢやア馴たけれども他に物  
 を貰ふは迄氣障なことないヨ「ア、ねへ素人ぢやアさア否たらうノウトさすがに賤しき  
 身ながらも何所かやさしき女の情ことに貞さへ憎からぬ娘盛と夕日のげ沙入土手を大橋の  
 たもとへさして行過る跡に此方の山王の小祠の前にて身づくろひ隠して持し三ッ糺の三味  
 線どり出し糺のはせ糸をかけた、調子をもやうく合す野邊の風またれて音も定かに聞



それがたくぞおもはるれ寒からぬ身も自隠すために用意をしたりけん斯る活業に似もやら  
でおこそ頭巾はお納戸の色もゆかしき縮緬に江戸紫のかくしうら出す目にはさへ涙をうかめ  
袖を濡してイーが力なくくかけ三味線を抱へてこれも荒川の岸を右りに見おしつゝ小岩  
原ある大橋の方をさしてずたせりゆく

○ねぐらをもとむる夕鳥は宗尊寺の森へ群れて飛西へ入太陽と光々として朝日皇大神宮  
の宮居を照らし眞崎稻荷の玉垣の赤をうばふるかに見やれば累を成佛し百万遍の珠  
数の小長持を搔いていそぐと狐の嫁入かど疑ふ田浦路ふれ誓願寺の講中が何所へか行信  
心の同行なるべし銀をかたげて家に歸る作男の鼻唄はだみ聲にてうゑふ田舎節ならで  
夜見せを素見地廻りのそり節あり鳥邊野に火かげの無常をうつせば晚鐘とげしく聲  
へて宿の草履札かげ見せにびくく心を付て見聞すればり、る地にも猶感情の氣色あり  
て喜愁期に依ならんかそもくこの小祠に身づくろひして哀れげに涙を催したる娘は  
何者ぞと尋るふられそのいじめ深窓又錦をも袴となしたる榮花の娘茜根養之進が秘蔵  
せし一人子のお園が暫時災にかかりて零落困窮の身のうへぞかし今は何所に住居して  
斯る所爲をあすぞとくわしくいへ心既に家やしさを失なはれてより乳母のはうらひに  
以前目をかけて置し琴の師匠の許にありて墨太郎の爲に奸計せられて危ふかりしを菊  
平が忠臣にてとからずも救ひれて其後乳母と菊平の相談にて田舎へ往しが半七の行方  
をたづねたために菊平の心ありを聞たりとていかなる間違にや上方へおもひきて久

しく歸らず其跡にて邊鄙の住居もへに悪漢のみつけねらひ所持れ金銀衣類を盗みどら  
れ且乳母の親族もたのもしからねば再度故郷を去て繁花に近き小岩原町に少しの知己  
を便として其裏のかたなる新町といふ地の天神山とよ女所に假住居し乳母の才覚にて  
やうくお園を養ひ介抱あして月日を送る中に近むる乳母が大病をわづらひわづかに  
貯へ残せし金子も遣ひなくし殊に病もへか乳母が少し氣のぬけたるごとくなれば次第  
に難澁しだんくお園も貧苦になれて他人のすゝめに心付てこのはせひそかに長唄を  
うたひ門下に出し所元來上達の藝にて聲もうるはしく斯る仕義になりては猫身を放  
さうりし秘蔵の三味線古近江が細工せし三ツ樞の掉といひ鯛といひ名高き名木を撰み  
あしらへたる名簪にてありければ馬の耳に風とそしらるゝ野暮の人にも自然感心せら  
れ多く手の中をもらひ身のたすけともなるもへに口惜くも千金の價を物の數ともせざ  
りしお園が袖乞同様の業を志してその日を送りしを悔しくも哀れあらずや

第二十三章

上るり「長生の家こそ」老せぬ門の若くと若水波の朝若死おもとのとじめにわかまどけふ  
りぞけふのこの霞ト男湯の方で唄ふを聞いて女湯に這入て居る娘唄女女房など孰れもこゝろ  
易くまじはる人達とおもひれて互に遠慮さ言葉づかひおもひくのはなしに放れて同じ  
所を長くあすりて機袋をしほりなから ●「チャヤ」湯屋であたる浄るりにしては餘まり美  
音過るぬへ ▲「ホ」ニ能聲だヨとしてあの文句は浴室の中で聞て居るとおんだか○斯○春め



いて気が寛閑とするやうだねへ。×「左様なつても美音だ子さも美男だらうと思へれるねへ  
 ●「イ、エおまひの外にふけへさき男もんだヨ左様かと思ふと貞形容から衣類まで十分  
 によく揃つてさる氣のさいた人だらうと思ふと何にも懸あし猿で些も行届かねへのが幾人  
 も在ヨたまへ浄るりの一口もかたると親不孝な聲で愛想の盡るもんだは。▲「チャヤ夫だが  
 子男がよくツて×「命持でかへチホ、▲「アレサマアお聞ヨ男がよくツて形がよくツて  
 氣がさいて居てはらんな只通り違ひに見るにとよあうが亭主か情人にして居ると夫こそ  
 モウく世話がやけて氣がもめていりさいのチ ●「それだツても最初ツから悪い男を撰て  
 丈夫や情人にするものがあるものかねへマア誰人も男の能のを見立るのチ ▲「チャヤ男の好  
 といへばお浦さんの情人子誠にモウく何ともたどへ様のさい好男だの×「チャヤ仲之助の  
 かへ▲「ア、×左様かへまだあの唄女主と誠に娘子ども同前だのにねへ最早其様な好男な  
 んがゐるかねへ何所の人だへ廊の中に居る人かへ▲「イエく何様してく兎ても廊の  
 中にゐるんな好男でゐるひらしい艶しい人はさいヨチ、寒くなつたマア温まつて来て洗の  
 ふや×「左様かゐらも中へ這入てあらいふ誰人もおはいりでないかみなく×「サア一風  
 呂温たまらうトまだ己刻時分の泉湯もへ五七人の外に入湯もあく元より所は上阿阿あどけ  
 さいのと婀娜ある女が氣らくばかりの奇合もへ少しもとりしまりたることなき難談なり先  
 人妙作の浮世風呂とあらべて批評するとをるし玉へさてまた風呂の中にて×「アノそ  
 れから何様したる ▲「チャヤ何がぞさしたとお言のだ×「アレサそのお浦さんの情人男の事

サ▲「チホ、何ぞ引か、りでも有のかへ大そうに根をおしてお聞だ子×「チホ、ナニ左  
 様ぢやアさいが私やア聞かけた咄しをば終まで不聞と氣にかゝるものチ ▲「アノ子私も知  
 らなかつたが子此間根岸へお浦さんと一同にお加持を仕てもらひに往た節その好男の宅へ  
 倚て遊んで來ぬの×「左様のへ何商賣の宅だへ▲「ナニ何屋でもさいヨたり寫物か何かを  
 して本を讀たり近所の子どもに手ならひれ手本を書いて遣たりするのだの。アノウとして病  
 上りだそうで月代をはやして居て子色が白くツていやみでなくツてモウく何所に一ツ言  
 ふんのさい男だはそれだから子お浦さんが誠にやれてく夢中になつて居るは歸り路にも  
 私を相手に何様に恍惚たか知れやアしないは×「チャヤくよく似た事もあるもんだねへ▲  
 「なにがへ似たとは誰が似たのだへ×「アノ子此間私さヤアお勝さんと連られて丁度根岸  
 の其様な宅へ往たところがゐるは其男の大柏の紋の付た着物を着て居はしなかつたかへ▲「ア  
 、三ツ柏の中へ大の字の付た着物が側にあつたヨ×「チャヤそれじやア同じ人で同じ家に違  
 ひさいヨ木戸の入口に何の木だか寸ど切とりにしゑ木の切口へ摺鉢が冠せてあつたらうチ  
 ア、左様くそれに違ひないのチヤウかく口を利て居る間に衆人がモウ上つて仕まつた  
 そうだトはなしながら風呂を出て板の間の留桶と小桶に陸湯熱のを汲足ながら×「モウ  
 百直にお上りか ▲「ア、モウ私の上るヨトいふ折からに風呂の中よりしづかに出る一人の唄  
 女二人の娘にむかひ「お早うございます子今のお咄しの後を最ちつとお咄しをト笑ひなが  
 三十二 らいへば二個のピツクリして貞見合せ 兩人「チャヤくお勝さんんつのおまにお出だの些も知



百らちかつたは堪忍被成ヨのつ「チホ、何もあやまりでなくッても罷じやアあいか」  
 ホ、それだけれどもお前のお在のをしらすに贈をしたからサ ▲「わつちもお前様のことを  
 悪く言としませんヨ かつ「イ、エ大そうに悪くお言でございます私聞て居したのチホ、  
 ト平氣で笑はするもの、ちらりと聞たるお浦の噂合点もかねば何とやら、ろにか、り  
 て案じられ猶もくわしくたづねんと思へど風呂のこと、いひ嫉妬らしく聞れもせず此方の  
 兩個も遠慮して咄しを脇へちらす折から浴衣をか、へて入来るお浦三勝と兩人の娘を見て  
 浦「チャ、誰人もおいやや衆人がまだお上りぢやアあるまいサ ▲「イ、エモウお前が  
 お出だから直に上るヨ うら「アレサマア最些お這入なトいひおがら着物を脱で棚へ入肩の  
 所をぶるくどふるのせ少し前こいみになり風呂の口にて三勝にひかひうら今私さやアお  
 前の所へさそひお倚たは かつ「チャ左様かへ私の方が一足早かつぬねへ宅には誰か居かへ  
 うら「アソ姉さんい急に一文字屋へ出てお出だといつて本屋の源蔵さんが些のうち遊ん  
 で留守をして居るとお言だ、本屋源蔵といふのわくくるわよてしらぬものぞ、かつ「チャ左様  
 かへそれじやア手まはしをして早く上がらうお前も今日はと洗つて私の所へお倚な  
 うら「ア、左様しやうねへトいひつ、風呂の中へ這入これより衆美人の出入繋き風情のく  
 たぐしければしるさずさてお浦お勝と和合二人にて湯屋をたち出て今假の住家に歸れば  
 留守居たる本源は二人を見て微笑とし源「イヨウあざやか、お浦さんもお勝さんも案  
 負れ方が能せ紅白粉を付るのは費たア誠にかみらん達が迷惑する婀娜ものだから多評せか

かつ「チャ久しい嬉しがらせだヨ子へお浦さんうら「ア、ねへ世事の能もにくらしい節が  
 あるものだのそれよりか此間の本の後をはやく貸てふくれなねへ源「チ、はんに左様だッ  
 け子おささぐさの後編だ子 うら「エ何へ源「ナニサお菊幸助の後だらすといふ事サすら  
 ア、左様サあれと假名佐話文庫とやらの大圓を持て来てお貸な源「アイ、承知く、トい  
 ひおがらお勝に向ひ源「夫ぢやア留守居をお渡しサやすせ かつ「ハイ、大きにありがた  
 うマアお遊ひ被成なねへ源「イ、エ左様しても居やすめへお前方がまた好男の噂をして樂  
 しむのや恍惚を受けるのが太儀だからハ、ト表へ出る場所がらとて老人も嫉妬は氣性は老  
 こまぬはこれ仙境の一徳なるべし かつ「今に養花が出来ますヨトいふを聞さし歸りゆく跡  
 にお勝の鏡臺を出してお浦にひかひか かつ「サア髪をお撫付ナうら「マアお前へ貞を化粧  
 お仕まいかねへ かつ「ナニマアお前へ化粧を被成な宅で小叱をいぬかへ かつ「ナニ私の  
 宅の内室さんは其様事些どもかまひないの不斷左様言て居るは奉公人だからと言て他  
 の奉公どちがふお客へ出て座しさのとりまのしをするものチ輕忍に仕ひあらして置と目  
 然に婢女はしたの様に身分が安く見へるから常に娘らしく仕な此方もその氣でかはひがる  
 から何も遠慮をしねへがい、お客の前をよく勤めて座敷を他並引ケを取さへ仕ないけれ  
 ば常住の遊んで歩行ても悪く評判をうけるやうな事がなければい、と言てお呉だは かつ「  
 左様かへ嬉しい氣性の内室さんぐねへトいひながら黄銅の師隨火鉢へ土瓶をかけて茶を  
 こしらへる支度をする也へお浦は鏡にひかひて浦「それぢやアお勝さん些お貸ヨト髪をな



でつける かつ「その中の引出しに仙女香があるヨネり白粉も猪口にあるの浦「アイありが  
たうお前も仙女香のふしろい斗りお遣ひか うつ「ア、何様しても仙女香が一番能ヨトいい  
つ、立て床の間茶の箱をとりにか、りしが何心なく鏡臺のうたを見ればお浦は下をひい  
て白粉を手のひらにて解て居たる鏡を見るにあやしいかな此世を去りし浦次の良が有り  
くどうつりしかば三勝はヒツクリして かつ「チャトおもつす聲を立ればお浦も聲におど  
ろきつ、背後を振向 うら「ア何様か被成かトいへばお勝も心を鏡め再度鏡に目をつけれ  
ど最早浦次の顔もうつらねば かつ「イ、エナニ今引窓から鳥かげがさしたのを何か落か、  
つたとおもつてびつくりしたんだはチトいい紛らせを氣味わるく思へば浦次どおなじ名に  
等しきお浦が 俯の浦次に似たるその風情子細どおらんと心付ていよく睦ましくお浦に  
うち解かたらひ寄かねて少しは思ひあたりし半七どの一條今また風呂にて晒にさ、し根岸  
の事もたづねんと言葉やさしく會釋ける

貞烈美談園の花第四編終

貞烈美談園の花第五編

江 戸 狂 訓 亭 主 人 補 綴

第廿五章

花嶽山梅林寺と開へし繩敷天神を崇まつる靈地にて戀が窪の境なる西の果にて人の往來  
もいと稀なりこの門前の南を請て日影のさす事暖かにて寒さを知らぬ所ありしが此所に休

らふ二個の娘互いに三味線を携へしは女子太夫といふものあるか歳も似よりの二九からぬ  
姿ながら一人の娘と常にあるべき人品あらず殊に袖を門の類ひになかく真似らる、  
風情にあらぬ自然の艶色されど一個も相應なる良かたちよて賤しからず ▲「アノウ夫でい  
マアお前さんの力になりさうお人もないのでございませそのかへ ●「ア、夫もへ此様に悲し  
い身にありましたヨ今家内に居る乳母が病氣でなければまた詮方もありませうが私しを大  
事にして呉る乳母が夢中の様で有ますから行ませんヨ ▲「チャ左様でございませるか私さな  
んずも元々此様身になるのであかつたので在ませければ私さか七才ばかりの時に母人が  
誠に難義して諸方を轉宅步行中に段々こまつて今住所へ零落様になつたんでありますヨそ  
れだから當時でも私さの兄さん何所のかお屋敷に奉公をして居ますさうでございませヨ  
私さとその兄さんの良も覺へて居ませんけれども名は菊平といふと母人が言て聞せまし  
たは ●「エ、菊平と言へチャく左様いへば何様かお前の良が菊平に良に能うく似て居る  
やうに思ひれますヨ ▲「エイそれでは菊平といふもの ●「サアおまへの兄さんか左様で  
ないか知らなげが私しの爲に大事の家來で今も戀しいその者れ名を菊平といふばかりか  
よく似た良のお前がマア妹ならば何卒して ▲「チャくそれで兄さんはお前さんの所へ  
奉公をして居ましたのでございませるか ●「若も人ちがひか知らないがたしか菊平が仔細  
あつて幼年とに別れた妹があるお乳母にはなしたのを聞た事がありました ▲「何様して  
マアお前さんが其様お身にお成被成たのでございませうねへ今でと私の母人も死去て仕



舞ましたから義絶をさせた爺さんの腹立も又兄さん乃義理づくも最早消た様ももので有ま  
 すし殊に菊平さんと私とは仇も恨もあゝ兄妹で爺さんも死亡も聞きましたから始終の何卒  
 兄さんに再會て人並の身になり度ものだと不關心懸て居ましたか當時の賤しい此身でいど  
 てり及のい願ひでございませうね ●イ、エそれは私しがどり持て兄妹の名乗合が出来  
 る様にして上るけれども今言た通り其菊平の彌お前の兄さんか左様でないかも知マア  
 第一當時は上方へ私の尋る半七さんといふか方を尋て都方へ登ったツ限久しく音沙汰が  
 いから聞合せるにも何様するにも詮方がないヨアノウお前を案じて宅にお在の人がなくは  
 私さの家へ同道に往て乳母に逢て能万事をお聞な左様したらば委敷發見るだらうから ●  
 イ、エ夫でも私しが此様おかない身の上では何様も町のお家へは ●ナアニ私も今は日  
 産の身になつてお前方より悲しいさもし活業をして居のだから遠慮のいらぬの手そし  
 てモウ頓て日が暮るからお出なねト時代に連て過し日の貴き身分をみ、ろに留すもしや  
 由縁のある事かと思へば便りの一ツぞと隔ぬまでに客路たる甚根の娘お園どの池見に知ら  
 れぬ世の盛衰いかある過去の宿因にや哀といふもあるかあるべし斯て其日も西の方山の木  
 蔭へ入つて、鷗鳥のかしましく飛かふ空をうち詠めお園の梅林寺の地内の方を伏拜み ●  
 「サアお出な ●ハイは同伴に参つても宜ございませうか ●ナニ誰も氣がつきはしまは  
 ず ●左様でございませうかチ「ホンニアノ今此寺の中をお拜み被成ましたのは何さまがど  
 ぞですか ●アノ此所にはチ天満宮のお師匠さまの自作被成た繩しき天神が在ますと

サるれながら私の此間中からは願をかけて毎日参詣を仕ますヨ ●「チヤ、左様でござい  
 ますか私さの忘れさつて居ましたチアノワ私の兄が貴殿に居た菊平さんとかに相違なけ  
 れば母がもつて置ました繩敷天神様の御守を以て居ますといふ事を母が遺言おいたしま  
 したヨ ●「チヤ夫でいたしかに菊平の兄さんに相違ないヨ私が天神さまを信心して  
 此お寺へ参るのも菊平が乳母に話してをしえたからそれで此所に天神さまのある事を知た  
 のでありますヨトいわれて此方の女太夫はいよく願もしく心によろこび遠慮しながら跡  
 にありさまに立つ、打連てお園の隱家天神山の草の家として歸りゆくさてまゝ大神山にて  
 にお園の乳母の病氣にて健忘の症あるかまた何ぞの祟あるか以前にござと氣象にゆらず  
 いど／＼愚かになりけるが今日はいかある故にありけん夢の覺たる思ひにて尋來りしひと  
 に向ひ物語をする言葉の少しもよどみあらずして前後正しに挨拶を門口まで歸りか、  
 りて風と聞つけるお園はわや／＼戸口に皆漆うか／＼を連も同じく傍の物影にこそ忍び居  
 うば「ヤレ／＼マア以前の事を忘れないで能こそお尋被成たチへお園さまがお歸り被遊た  
 らさぞお悦び被成だらうまづゆるりとしてお異なるさいを判「ハイ私も折角参りましたから  
 ならずならばお嬢さまの御機げんを伺ひまし度ございませうがまだ滅多ににお歸りでない  
 いますまいかチ「うば「ハイ、エナニ最今にお歸りでありませうヨこの頃では何所へ遊びにお  
 出だか毎日夜晩家内にお出でないやうだけれども私しは病人なり家内にお相手になつて遊  
 ぶるのはおしは無理もないと思つて居ます判「ハイ、エモシそれにお前さんの被遊事たが



他所くしいお言葉でチトおうらみやまずせ正直私に此表町の梅本といふぢぢのお仲といふ女に馴染でひさしくまいる中二三日以せんお園さまのお噂をくわしく聞て呆れる程のおどろ死をいたしましたのが万一似奇の人違ひかど念れ爲に昨日一時日此近所をよく聞していよく噂の通りお園さまが袖乞同前の事を被成に違ひない様子他所ながら見雇ましたから直にとつて返して才覚をして憚りながら自分のお賄きいにもある様にと實意で参ッぬ私へ隠してお在被成事もないたどへ今何様に困窮におくらしでも其以前はお屋敷のお影で家内をやしさいましたお恩を返す心でございすから何卒包みかくさず當時の由丁箇をうち明てお聞せ被成て被下ましたトいはれて乳母の昨日今日我身の病氣家内の事朝もゆふきのくらしまで放心として夢の様に覺なければ判二郎の言ばを聞て情と考がへうばハチチへお前に左様言れて見ると合点の行ない私の病氣此間中は何様して居たの少しも覺へのお事ばツかりホンニ活業の用心も半年や一年では尽きいやうにと他人に元來お園さまもお歳が行きいから逆々お知らせやも仕なぬがたとへば私が寐て居てもお園さまに金銭の才角をさせや様お不覺悟をば爲ない筈又手當がよい程ならば菊平どのを都方まで旅立しては遣りませぬといひつゝ、立て納戸の様なる小蔭に入何やら物を尋る風情やがて此方へ出来りて溜息を吐涙ぐむ判二郎は懐中から小判五兩をとり出し昔しの苦根さまならば一日か二日のお臺所にも不足でございませうか不幹ながら當時の所での少しの間のお氣休めにかなりませう何卒これをトさし出せばうば「チャ左様ならばお金を見繼でお上被成

のうへ判「輕少ではございませうけれど志しと思召て下さるやうにお様さまへおとりあしをさば「誠」にマアは信切なお前のおこゝろをなごお園さまがお悦びでございませうしかし只今お前に万事の氣を付られて俄に正氣の様に私の病氣何様考がへて見てもお園さま聞ないければ分解さいが貯へて置たお金が二月三月過る間に少しも手が付ないで私の仕まつて置たま、でありますからお園さまのそれをばごんじないゆへにお前が噂にお聞の通りの事に私しへ隠して物乞に出てお歩行かも知れませぬ何様して私に此様に放心として居ましたかそれがまた今急に前後の事を考がへるやうに氣の付といふも不思議な事なすへト忙然として涙をうかめ今更お園の昨日今日わが病氣もへ何程か悔しき悲しみをせられしならんと思へば不忠の罪の咎を戴いてこそはさし俯く

第廿六章

爰にお園の乳母が俄に病ひの直りて夢の覺たるごとくに、ろ清くとなりしのかある事などいふに判二郎の見廻に來りし時とからずも持参したる懸物日蓮大上人の眞筆三十三番神の名號の威神力に依てありとぞさて此懸物の事の後々くわしくするすべしされば判二郎の物語にのじめてお園が此程の哀れに悲しき活業にて乳母の看病朝夕は所爲を開より驚き呆れ暫時言葉もなかりしが涙を袖に落しつゝ、うば「まことにマアお前のお咄しを聞て今さらお園さまの報難を被成たのをはじめく知つたとやてはなかく言分にある事でのございませんが實にお前が爰へ來てお呉の時からして寐て居た夢の覺た様な私の病氣させ此様



に正体があかつたのであります。少しの間でも門才の袖乞のといふ様な事を半時ありどもお願ひにさせずて勿体ないとも悲しいとも此様な不慮な乳母といふが廣い世界に最一人と他も有ませうか。死に遊ばした旦那様へ對して私しが死で參つても申譯がたい。申譯もないと云ふた因果では後をよめては零落被成やうな事になりました。それについても半七さま乃お行衛をかたづけね。ヤスと心當りがあつて都方へ登つ。菊平どのノ便りもなし。途中でさうぞ間違ひでも出来た事やら知れぬ。旅何卒お前が深切にお尋ね被成たお心にあまへて私がお頼み申すますがさうにいとしいお願ひのうへお力になつてあげて下さいませんか。半二イエそれのモウお頼みでなくつても斯して尋ねて參るほどでございます。ますから私の身に應じたい無理な事でもつとめて以前は思報にいたし度でございますが。何を申すもお願ひはあ女義の事何れお聲さすでもたてにしてお家を立不被成はなりません。いまは「サアその肝心の半七さまのお行衛が知れぬのみか一旦は離縁となりませぬ。今何様いふお心で在る事やら半七さまのお心の中もしれずだん／＼考がへて視ますと未々の所が何様なる事かとあんじられてなりませぬ。實は先達て中その事を氣にかけて苦勞の餘りお逆上たのが此病氣のハヒとなりませぬ。此半七さまの程それの尤も事でございます。ナニ左様便りのないやうに心細くお願ひが思召わけもございませぬ。何れ又近日に參つて万事の相談をいたしませう。必ず私しの様なものでもお役にたつ者と

サの嗚呼がましい事ながら是非骨を折てお相談のい手にある氣で居ます。と言つ、風呂敷包みより取出したる三十番神の二軸を傍の柱にかけて「下キモモヤ此三十番神の二軸の元黄根のお家に傳つて有た品だ。日蓮様の眞筆。うば」左様でございますか。私も以前お屋敷に居た節旦那さまのお咄しで承つたが。お願ひの代か宗言でいお家にお不用たを被仰とお拂ひになりました。とや事其後兎角お家に悪い事が出来る様だ。と後悔を被成事がございませぬ。年ひさしくなる事といひ時代も違ふ事を何様してお前が存じでまた今頃になつて是がお前の手にあるとは何様したわけでございます。判「さればサ此一軸については種／＼の由縁があります。がマアさし／＼つて私しが心に浮んだこの眞筆此宅へお置つたら急度お嬢さんのお身の守護にもありは運の開く手續にもならふかと存知ます。から預け申す。うば「チャ左様でございますか。夫で何れも定めお願ひも聞傳へてお在の眞筆さぞお悦びでございます。せうがモウ日も暮たよお歸りでない何様した事か。マア最少しお咄被成て被下まします。其中にはお歸りでございます。うば「判「ハイ左様でございます。私しもチト用事がございませぬ。今日お歸りまして何れまた明日にも参りませう。うば「夫では何卒是非ともにお前の力をお頼み申す。判「不及ながらは手助の相談を致す。と言つ、立て判「判「は天神やまより東の方の路をたどりて遠のらぬ小岩原町に止宿。梅本として急ぎ行跡には様子を半途より再開しある彼お蘭判「判「の心の善悪はかられねば所爲と隠れて貞を合せ申す。歸りし後に宅へ入りその「チャ／＼お前は起てお在だか今日は



例よりか盤梅の能のかへうば「チ、お歸りでございませすかト言も小聲の世間へ遠慮涙ながら此程の敢果ない所爲をせし由りはじめて先刻聞たりとて悔を歎きて詫言すればお園の氣の毒さずにまだ判二さへ知ざれば告ぬ其身の要事を委しく語りその「アノ子乳母や左様は言もの、私が隠れて出歩行たは實の半七さまの在在所を聞出す事もあらふかと思ひ付ての身勝手から發た事だからお前の病氣もへに私しが其様を所爲に歩行たと思ひでないヨそしてマア過た日の身の上を言出して彼是どお言だがト言つ、涙にむせかへりその「ナニ私の身の難義ぐらゐはあるか事だと子勿体ない爺はさんは本家の悪い事を身に引受ては自害を遊ばしたでないかへ其中でも私を慈愛さうだと思し召て半七さまに罪の懸らない様にして置たらぬ私しの爲に宜らふとは自分の切腹遊すの苦もなさらぬで子の身の事を深く思し召て被下た事や何かを今思つて推量と私あんの身の上の何様を愛難儀をしても爺はさんが罪もなくしては自害被成お心の底にはくらべられぬトしばらく歎きありけるが風と思ひ出して表の方に向ひ、それ「チヤアノお前此方へお還入ヨツイ自分の事よどり紛れて堪忍をしヨト戸口に出れば乳母も聲懸らば「チヤア誰人か同伴にお出のかへサアは遠慮なくお還入なさいましヨトいひれてやうく立入娘お園は無理に手をどつてその「サア遠慮をせずと此方へお出ナ娘「イ、エナニ此所で宜敷ございませすと以前とともあれ今の身を恥て坐したる上り端手を疊に置拍ゆる風情乳母は合点が行ねども來りし娘の容姿を視れば歳もお園と甲乙なく衣類は木綿を着たれどもいとかわゆるし其風俗殊に何所

やら見たやうな憐れりと考がへてうば「チヤ此お娘は看知様なお方だ子。お園さまへお前さん何様して此お娘をその「アノ子今委しくお前にはあすが子誠は不思議な事て今日こへ同伴につれだつて歸て來たんだヨト

これより梅林寺の門前にてかたり合し始まつをはじめ兼て乳母も聞知居たる菊平の妹に相違あるまじとこまやかにあしければ乳母は驚死悦びて

うば「チヤくマア左様でございませたりそれ之宜ございませねへ菊平殿が居ましたらさぞ嬉しが事でございませうのに折わるくその「イエアノ子菊平が居あいで此娘の此家に置いて私の便りに仕度から左様思つてお呉あ子さば「うれと隨ふん宜ございませすが今まで居た所の世話人乃方へよく懸合を仕ないければ其所からむづかしく言て参りませうから娘「イエアノ私の身の上を引請て呉ます人があれば直に渡して呉る様にあつて居ますヨそれでございますからお面倒でも兄さんに逢れませうで何卒馴々敷やうでございませすが私を引請たどもふ證文を出して被下ましお左様して下さいますと私さの何様か事をしてもお前さん方のお力になつて些も遊んでは居ませんヨ實正に後日で他所から何ともむづかしく言て來る心配のございませんから後生だと思し召て左様まで下さいますしお氣の毒さうに涙をこぼして特々ければうば「ナニ左様いふ事ならばお前がお頼みでなくつても其先へ人をたのんでからお前を引請て何様でも世話をして上げる子其中に菊平さんも歸つて來るにはちがひないヨマア今夜と此所へ寮てまた昨日能相談をして上げるからトその夜はこ、



にどいめしが寐物語に小夜ふけて田浦を下り居る諸鳥の聲かしましく羽音の聞えて風さふくど梢をさらしはや真行寺の丑の刻耳をつらぬさおさるうせを馴ては目も覺さずや四邊のしんくどなりし頃敷の垣根を押破りてお園の家に忍び入る曲者こそい來りけれ

第廿七章

爰に戀が雀の廓物普請の節わりて諸所へ散在する事のありしが彼三勝を抱の様にせし茶やは和哥町に移りて再度廓に立歸らず又お浦を抱し茶やの家業を止て田舎へ引込みお浦をば給金を負て證文と俱に母親の元へかへしければ當時是ぞといふ心當もなく只母の許に日數を過しけるが母の寡婦の活業あれば諸方へ針仕業其外の手傳に雇われ行て家内に在日の稀ある故兼て怪しき契りより今の誠の縁とあり戀の倚への垣一重世を忍びたる半七は情に引れ廓より家に歸りしを幸と朝夕出入て夫婦の如く四邊に遠慮もあき住居根岸の村の事なれば人目をばはかる氣がねもなく思はず馴て親しみの日々深くぞなりける又三勝は婦多川に移りし後も評判よく美人揃ひの中裏に別れて程よく子をもまて角のとれたる丸平の抱への敷に名を入れて坐敷へ出して貰ふのも其根と早く都合して半七の爲に開運の手段をさなどのみ心懸底意の滋陰に女房氣も自然の婀娜と愛敬の他人の目よつく美麗の生徳殊にの武家に育ちたる行儀が今も何所やらに残りて品よき山立は近頃まれある噂も高く全盛第一の唄女ともてはやされ口の懸る事絶間なしされども半七は遠ざかりある事を朝夕おもひ懸みつ、心を苦しめ居たりしが半七は是を忘れるにあらねどもお浦が算意にはだされ覺音信

信の日も延て三勝よりの赤玉章に返事はすれども此方より便りをする程にはあさざりけりされば男女の中の語らひも長き月日の朝ゆふに惚過る程惚れて居ても出来と不出來が兩方に折節變る物おして倦るといふにあらねども口舌の上で何となく五日か十日と憎らしと思ふ様なる事もありさりとて浮薄で他ご、ろが出来るといふに決してなし又折節の日の中に二度も三度も戀しくありしれ度ほど貞ばかり見て居度あるのみならず何がさ干話を仕て見たり言葉咎めやすねとは何からかにまで嬉しさのやるせない氣も矢箱もたまらぬ様他目さへいとの惚惚をしてもまた足納せぬ節もあれば四五日逢ずに居て視たら又例よりも戀しくありて樂しむらしき事も有かど所爲と隔たる時もありといふもの、惚合し因果同志は中々に縁の切れるといふ事なし其趣を早く悟して俗に聲を言時の永く捨らぬド一の端明よ曰

「二の足を踏で居るのに異見をされりや  
またも未練で離別られぬ

如斯に愚智あるが懸路の常の事あればお主へ不忠と両親に不孝とあらぬ用心してさて實情を尽すがよし猶其上で偏屈に野暮な叱言をいふ人あらば慈愛がるのが法度かへとぬしなませて置がよからんされば半七三勝の中も暫時右いふ心のごとく忘れた様な月日の數四五十日の往來の絶たる様に過しけりこれはさて置彼お浦の母の手都合の能事つゝ殊に諸方にて最負にされて暮しけるが此節又田舎の親元より家督もづりの義理合にてかたみ分の金子



を送り届られしかばお浦と相談して根岸の柴乃戸を出て折江町の邊に家を補理波崎浦治と名札を懸三味線の指南をたてにし活業の助けに料理やの酌する役に頼まれて招かる、日乃少なからす思ひ乃外に母子は安堵先穩やりに在けるが半七は此節全く病氣も治りしゆへひさしふりにて三勝の許へ尋ね行んと通り路あれば兼て開置たる折江町へか、りお浦の家をたづぬる折しも出格子の内よりはやく見付て呼應るは目早き娘子どもの常あるの浦「チャア仲さんくアレサ此所でありませすヨト言れて半七は莞爾笑ひ半「チャアく此所かへホンニ名札が出てあるチト言ツ、浦といふ名札浪崎とせしはありふれたれども浦次と申しすを見るよりも胸にギツクリこたへしが思ひ直して障子をわけ遣入を内より中敷居の中障子の隔紙を押開き浦「よくマア早く来て被下ましたねへ此方から上る使の人と同伴までございませしたかへ半「イ、エ私しやア使の來た乃の知らずサそれじやア途中で行違ひにあらつたのかチ浦「チャア左様でございませすか道理で舟を上た時刻に合しては早くお出被成たぞ存じませしたはサア此方へは通ンなさいヨ誰アれる居の仕ませせんヨ半「チャア左様かへ母御さんんは浦「アレサ夫だから急に手紙を上たんでございませすは子母人もお前さんの方急はやく左様アて上て成ふから節折止宿てお貫ひかせ左様仕ないど不用心だからと言ませしたヨ半「チャア夫だつても私しやアまだ手紙も何も不見使の人にも逢ないから些も理合が輪らないハナ浦「ア、子左様でございませしたッけチホ……私ひまたお前様來て呉さしたのが嬉しインで前後も何も忘れたんでありませすヨ堪忍してお呉被成ましヨト言ツ、火鉢へ炭をつぎ

たし火を起しにかゝる半「ナニサ何も堪忍するのしなないのといふ程の事でもまいか何様して急に私の方へ手紙を出したのだへ浦「ナニサ何も苦勞な事では有ませせんが子母人の田舎から急に飛脚が來て其人と直に田舎へ立て行ませしたア子としてアノウ十五六日も歸られませんのだから何様も私一人で居るのが淋しくッて怖くッて行ないと言ませしたらば母人が言ませすのに之此身之急いで立て行んだから跡で仲さんの所へ使を頼んで上たがハ、左様したらば仲さんが宜様に留守の世話をして呉だらうからと云て立て往ましぬア子半「左様かそりやアマア餘程急な事だと思ひれるノ何ぞ田舎に大變が出來たのかへ浦「イ、エナアニ左様じやア有りませんヨ何でも悪い事ちやアない様云ませしたはるればマア何様でも宜からお前さん當時此方に居て下さいませしナとして私さがお座しきへ出なれどもさしあつて不自由じやアありませす富家の子供衆が五六人稽古にお出の種々お物をもさひますから朝晩の事には些も困りの仕ませせんヨそれだからお前さんが來て居てお呉被成ばお座敷があつても斷はつて出ずに仕ませませと半「なせだナ留守居に置ても心配だからか浦「アレサおアアしい左様じやアありませんぞ子半「それだつても留守居がなければ他へ出るのを斷はるといふ事もあるが此身がこの宅へ來て居ればお座敷を斷はつて出ないといふからの事サ浦「ホ……それでもお前さんが宅にお在だど外へ出るのが否になりませすものウ半「アハ、何を言かと思へばつちらさい事をいふせそれじやア母の留守居に此身が來ない方がまじだのナ浦「チホ、それでも折角母人が氣をさかして其身の留守にお前さんを頼め



と言置て行たのに澤山さうにお前さんを留守に置いては座敷へ出ては濟あぬから少しの間も外へ出さいで側に押付て居るんでございますヨ半「そりやアア盗人の用心に番をしても居様がお前の情人が来てやかましく言は仕ないかノ浦「イ、エ私さは大丈夫でございますガ只氣にかゝるのはお勝さんの事てございますは何卒はやく此事を言出して萬事もうち明て咄しをする様に仕度もので有ますねへ半「左様サ狂訓亭の作つた中本の様に女は嫉妬をせず本妻と妾と情女と不殘姉妹分になつて和合目出度くも餘り古ひじやアねへか浦「チャ／＼それでもむかしの本の様に嫉妬で幽霊が出たり角を生しぬりするのハ猶否じやアありませんか何様で私さか能と思ふ人の他女も惚て氣を揉から此身一個で慈愛がるよりも姉妹分の何かに成て和合二個で慈愛がる方が氣樂いと思ひますの私さやア今にもお勝さんに逢と其理を言て堪忍してもらひますはチャ／＼モウ湯が煮立ましたテドレお茶を入れてお飯を上げませうテ茶をほうじる半「ナせお飯に早いじやアあいか浦「イ、エ早かアありません半「半「それだつても今ツからお夜食を給るとまた晩にひもじくあるハナ浦「アレサお夜食じやアありませんハナお晝でございますヨ半「エまだお晝まへか此身アお晝を給てから余程家内を片付たりなにか用を足て夫からぶら／＼出て來たからモウ今に申刻だらうハナ浦「ナホ、左様でございますかねハトハ折から商人の聲

油屋「おあぶら宜しう油やでござんぬ

○うれし尻の人まつ雷のわぶら賣

わけてたのしき今日の夕暮

第廿八章

雪さらばはく度袖をはらひまし花の吹雪の志賀の山越と「黒主の詠れけん實に花を愛する情のみか何事もその身乃好む事に依て主人の異嫌ふを愛喜ふ類ひ少からず

「他人は難非をいふかもしらす私しにや好たぬしのくせ

浦「子へ仲さん此文句の意氣じやアないけれども惚た心の勝手をいへば違ひさいじやアありませんか半「左様サマア其様なものサノ併此身の癖は何が第一に否だノウ言て聞せて異な他人がましくド、一の文句で當ッとする事もねへノ浦「チャ左様じやアありませんは子一昨日お坐敷で延くまさんが唄ツたが子余程うまかつたらサ半「そりやア能はづさ浦元の女の師匠じやア一番たア浦「チャ由断のならねへ大壯ひあさだねへ憎らしい半「ナンノつまらねへ嫉妬をいふせ此身ア延くまといふ名の高いのは知つて居るがまだ知己になりやア仕ないハナ浦「イ、エ何様だか知れさいヨ先達中から私が段々氣を付て居るのに何所の稽古所の娘でも唄女でも大概お前様が知つてお在だものウ其中でも延くまさんぞの誠程に程が能からお前様の急度惚てお在のだヨ此後お勝さんがお出の節に思入言告てあげるから左様思つておいで被成ヨト笑ひながら言貝の如幼兒して慈愛らし半七も笑ひ貝にて半「ム、此身も言告てやらア浦「チャ何と云てエ半「エ何と云ものか何様もお浦が欲が深くツて行かんと左様いふはナ浦「チャ／＼否あねへ何を私さが欲の深い様を事をいたした



かサア夫をお言事はハハハ實正に小兒の時分からしはい事を仕たり欲の深い事を仕た覺へて  
 ありませんヨ半「ナニ左様もいれめへ今でも兒女の様で可愛らしい事は十分だけれども  
 欲は深いのサ油「チャあせへ半「あせでもサ此身が是が夢ぢうになれて慈愛がるのに毎  
 度愚痴をいふじやアあいか。ヤレお勝さんならば斯では有めへ何様だの期だの言て此  
 身に困らせるじやアねへか是より外に慈愛がり様はあといへばお勝さんをおわひがるの  
 はまだ餘計だらうのなんのとめる推を廻して欲の深い事をいふじやアないかナ浦「チホ、  
 嘘ばかり何私さが其様を言ますものか何様したといつてお勝さんお私さが勝れる  
 氣遣ひのございませんヨ又私だッてもお勝さんより餘計にかわぬがられ様といふ無理な  
 願いのいたしませんはチャそれの左様とお前様を斯して私さの方の宅へ呼んでおく事を  
 聲ならばさぞ腹をお立たらうと氣にか、つてなりませんヨ半「ナアニそりやア何どの言粉  
 らかしもするし第一此身が此宅に居るのを知る事てのあいヨ浦「イ、エ夫でも何様か知れ  
 た節にはいけなから左様ない中になんとか言て奔でも上げて置たいものと思ひますは  
 半「あせお勝に知れて居る様かノ浦「チャお前さんもむしが能事たねへたどへ何様に隠し  
 たからと言てもアノ才發なお勝さんが知らずにお在るものかチハ半「ハナナ道理で去頃中  
 まだ戀が久保に居た時ふん根岸へ来て少し異なる事を言出した事があつたッけ些とは氣づ  
 て居るのか知らン浦「ア、其様も事もありたらう。アノウ上阿町の湯で私さの友達がお  
 前様と私さの噂を仕たのをチお勝さんが湯の中で聞て居たといふ事を聞きましたはそれだ々

れども其節お勝さん私さに少しも悪ひ貞を看もせず否な挨拶を被成の時もありましきん  
 だが只おかしき事と思つたは手私鏡臺へ向つた時ト言ヒッ、身をふるくどふるはして  
 浦「いつか根岸で夕方に見た幽霊の様お女の貞がちらりッど寫つたのを私さもお勝さん  
 も思はず見ると其時お勝さんが何か少し考へてお在だッけがそれから分別て私と和合して  
 慈愛がつてお呉でございませすヨ過た事てありませす。アノウわれのマア何様した事であり  
 ませうチハ半「エあの時の事かあれ何様も此身にも分解かねるが何でもマア氣の利た化  
 物が出てお前様様な美女を情人にして呉たんだアナ浦「アレサお前様の何でも私さのいふ  
 事を馬鹿よばかりしてお在だから悔しくありますヨ半「此身も悔しくある程慈愛ヨ浦「ッ  
 ノは覽お其通り私さの言事を茶にしてお在だから憎らしいねへ半「憎らしかア呼びによこ  
 さすども打捨て置ば能浦「チャ一昨日使の行ない中にお前様が出てお出のだから私さの爲  
 所じやアありませんはチ半「それでも呼びによこしたに違ひないからお前の方が負だか  
 ら左様思ふが能浦「チャ「それでも女は戀しいからお上るといふ事もありませんけれ  
 ども男の癖に手紙も届かない中から戀しがつてたづねてお出乃だからお前さんが負でござい  
 ますヨ半「左様サそりやア何様も此身の方が餘計に惚て居るのに違ひないから何と言われ  
 ても詮方がねへお前は此身の思ふ半分も思つて呉やア爲ねへ浦「アレサ左様言と直に上の  
 しをどつて左様お言だから行やア仕ないヨモッ「何でも私さ乃力じやアお前さんと立並  
 ぶ事は出来ませんから少しもとやくお勝さんをお前さんの側へ置てそして私死が些ッ、加





百四十五

勢に出るくらゐでなくツちやア叶ひませんヨトひながら三味線をとつて浦「サア何ぞお  
 唄ひ被成な半」何様して何が出来るもの浦「お勝さん乃三味線であければ合ないと被仰  
 るのかへ半」チャ何か降て来たさうだト言ツ、たつて出格子の障子を明表を覗て半「イヤ  
 こりやア大そうだ何時の間にか大雪が降て来たヨみれじやアモウ兒女之稽古に來られまい  
 ノウ浦「チャ」左様でございますの道理で先刻から寒くありま一たヨドノ庭の方の間へ  
 巨燵をこしらへて上ませうチ私が奥の方を片付ますからお前さん何卒其所の雨戸をみてお  
 奥なさいましな半「チャニ雪だから障子で置ても能じやアないか浦「イヤ、エそれでも子降  
 込と後刻でじみくして行ませんヨとしてモウ誰も來る事ちやアなからめて仕まつても  
 能でございますのチト笑ひながら奥の間へ巨燵をみしらへて居る所へ中臺所の障子をわけて  
 入來るは戀が久保よりの馴染と思ひれる二十才斗りの娘お咲少し色と淺黒さ様なれども自  
 然とわか脱たる婀娜もの咲「お浦さん家内にお在らうれしいものが降てまいッタチ、  
 ……寒い」初雪やこれが盪さら何様だらうか浦「チャお咲さんか淋しくツてならないのに  
 よくお出だねへそして今の發句とやらはお前がお言のかへホ、咲「ア、名人だらうチホ  
 、トわらひながら半七の方をちよいと看て咲「チャ淋しかアあいのだチお客さまかへト  
 小聲にて言浦「イヤ、エあれの私さの兄さんだはチ咲「ヘイ、それは鹿相をすました眞平  
 免なさいましとあやまるかはりに久アしく遊んで居て困らせて上るうらい、浦「ホ、  
 左様しては覽私さもまたお前の邪戸として上るから咲「チャいふに落いで語るに落ると



やらだが夫にしては手づよく恍惚遊はずチへ浦「チホ、左様じやアさいヨマア此方へ来てお暖たまりヨサア能火にしたから咲「それじやア少し遊ばふチ浦「ア、官正にお遊びナそして此間の三下りをお弾でかい新文句を側でこしらへて貰ふからサアト三味線を二挺持て奥の三疊へ行にかゝるもへお咲も續いて行ながら咲「鳥渡誠に好男だねへト窓の方に居る半七に聞へないやうにお浦の耳の際にて貰ふお浦は心の中に嬉しくおもへどもわざとけちして浦「ナアニ好男じやアないヨ咲「わるかア止て私の方へお異ちチへ浦「チホ、それだつても咲「惜くつて夫は出来まいチドレ心いさかのド、一でも唄つていぢめて上様チトムひさがらまた表の方に向ひ咲「アノお前さんも此方へいらつしやいましナ今に私かは直に歸りますヨホ、半「イ、エナニ遠慮おしに澤山おあそびなさいまし何ぞは馳走をいぬませう咲「イ、エモウおかまいなさいますナ浦「うまいものならば随分給ますかへ咲「チホ、ナニ其様にいぢたなじやアさいヨトムヒツ、お咲と三味線を探てお浦と合奏なぞして終日此所に遊びけり

第廿九章

四季の詠の花園や其外物見遊参所の多かる中よ人々の目に面白く心に跡まで樂しき哥舞妓の繁昌とよめさわたる土間棧敷爪も立ざる大人に役者も勇む本舞臺道具も揃ふ錆付大磯の廓仲の町の春げしと索見すめきの仕出老の人物行ちがひたる捨せりふ櫻の中の道中は芝居ながらもなまめく風情折から女形の加役にや美麗若衆姿の侍出立花柳女之助男達の

ふしらへなる中役者大勢にて喧嘩を仕かける立廻り女之助の迷惑して種々詫ても聞入す大せい「イ、ヤ否だく其空あやまりが氣にくとねへ廓の勝手が不案内ならなせ白柄組の此方人らへ前日に頼込でそれから此土地へは這入ねへのだ●×「エ、面倒だア後日の見せしめにた、さびて懲させろ左様だく女「これはまた無法お人々斯まで詫るを聞入す弱輩者どあぢつてか▲×「こりやアおもしろい力を抜すべを知つて居る乃かサアぬけく×「アハ、なせ抜かけて止るのだ相手になるのがおそろしかア土下座をちしてあやまりやアがれト既に危き其所へ茶やの奥より立女形いらん勝山新造秋篠から出て大勢を押し隔て若衆を後に圍ひし立姿見物一同に大和屋に滾むらやア「ワァーく男達「ヤイく女の癖にいやらしいおせ此様お所へ出やアがつた▲×「おぬらんどいひ新造まで強ひ自慢かいさばかり留だて仕たふつばなすぞト大勢一同に拔身にて立かゝるかつ山「こわい刃物のしらす、ささがれ野邊の野さらしと身の覺悟した此勝山止たがわるく切しやんせ白つか組の男達と名前は立派なとあさんよと不足でわらふが新造子まで命への一の進上ものお若衆さんを何所までもひおさに仕ぬくも廓の意地ならば直に此喧嘩を私しにあづけたが能はいなア×▲「アハ、噂に違ひぬ名譽の勝山男まさりの大丈夫だしかしすがに女の了簡荒くれ男や侍も立派お方へ目が付ねへで艶治郎若衆の肩を持って白つか組へたてをつくらおいらんでも用捨のあらねへト仲の町の奥中で取つらか、せて泣せて呉へト握こぶしの雨あられ打てかゝるを右左り突退くとねかへす女に似合ぬ早わの手練いとも烈



しき立廻り折から夢の市郎兵衛花道の程まで欠出て本舞臺の方を倍度看る思入土間棧敷  
 の見物一同に大せい「成田屋ア」ト賞る最中市郎兵衛は舞臺へいたり白柄組を投除打  
 のはらひ退て真中へ仁王立市「チ、おいらんいつもながら壯年者のいたづらを見かねて  
 這入た仲人か子分の知らせに花川戸から欠附て來た市郎兵衛モウ宜ごんすこ、構はずと揚  
 屋入二階は高見で見物仕合せへかつ山「ナニ衆人さんが迷子を取巻ておいちめだのら鳥渡  
 とりさへお這入たのが氣にさはつてこの勝山を巻ごへに新造市郎兵衛さん聞て下さんせ  
 おいらんはじめ私等まで間夫も色氣もさいのが自慢廓で知られた一ツこく者を見立違へて  
 お若衆さんの美態乃に惚たとは他の心も白柄組のチト行過じやアござんせぬかムナア  
 ●「ナニ行過たと云やアがるのかト新造秋篠に立かゝるを振やごひて左右へ投る市「さす  
 がおいらんの仕込やどゆるアハ、イヤお篠ばう色氣のねへ新造衆だせしんどう「市郎兵  
 衛さん。アノウつくしいお若衆さんでさくツても市「いろが出来るといふ事かしんどう」  
 アイナア

つよいにも惚ればやれる廓の癖

市「なる程こりやアおもしろいト折から抱への驚者のこしらへの役者花道より鎮棒  
 を引て。チャラン」驚「中刻でございませすぞウイ」お客の不殘斷のりませう市「秋  
 篠やどても事の事に下の句をアソお客を斷てる機の大鼓モシお若衆さん。ナイをひ組の若  
 衆達大門とともに手をうつて此場いどを市郎兵衛にお呉ませへ女之助「存がけさいかい

らんのお挨拶市「ハテ何にもか私か跡と請合た心に合た理もわらふがマアひらかぬも花  
 川戸私と同伴にハテ御遠慮さくござりませしト白つか組を横目で白眼る女之助「しからばお  
 いらんまた秋篠ぬしとやらお禮と再會かつ山市さんと連立てあさしのさん所までお出さ  
 せーヨーンふう」モシエ市さん市「チ、いまの下の句は何様ださく」驚「門のしまります  
 ぞウお客の不殘出ませう」市「サアお若衆さん時刻を定めた廓のおきて女之助「しから  
 ば何卒御同道市「つよいにも惚ればやれる廓の癖トいふ時出しぬけに白柄組二人市郎兵衛  
 に組付を見事にあげる

しんどう「中刻さがりの今日のさぬ」

市「チ、のみこんだ其名殘大せい「其名殘より此仕かへしをト立かゝる市「チ、いくらで  
 も後へはひかぬ」●「そんなさふ是から堤の上で市「先へまいつて命のかけがへ首を洗つ  
 て待て居ヤレサ」●「おにチこしやくさテ詰齋るまたも申刻に客を追出す太鼓の音ド  
 ン」市郎兵衛正然と身がまへして市「これより安蘇地が原敵討の場左様に御  
 覽被下ませう。ひやうし木のおとカチ」見物のさよみワア」中「うり」  
 おこし松風饅頭よし「繪本繪草紙番附よし」茶アよし「茶アよし」繪双紙番附わらう石  
 「ころ柿の乳柑子よし」東の高土間の三のあたりを二問續きの見物の何所の誰といふ人  
 なるか和歌町の太夫明女を五六人いづれも當時の流行ツ子櫻川由次郎名見崎榮次丁子や和  
 十喜久亭壽樂同壽路八明女は此頃とりわけて新子ながら評判の勝次「これはすなわち



三勝の事を名をかへたりとさつしてよむべし。由、旦那モシ今の幕の賑やかな威勢の能狂言  
 でございませす。旦那「左様サ、随分派手な狂言だが、おれまで囃にも聞た事とあるめへの由」  
 エ、些も存じませんが、新狂言じやアございませんか。榮「なんでも今まで見た事がないから  
 新狂言だらう。旦那「インニヤ、こりやアお前達の知るまいが、故人鶴屋南北の息子の鶴十郎の  
 作た狂言だ。和「エ……私どもの方の直江屋でございませすか。旦那「左様サ、あの人の何  
 様も奇妙に、目前の新らしい狂言を作た人サ、親の南北よりか、益した事がありやしたるか  
 し、是も故人と成たから、今じやアモウ作者が誠にすげなくありやした今に、マア十分事を作  
 せて役者が直にそれを勤たらば、急度面白事をしてしらへるだらうと思ふのは、資田治助サチ  
 草双紙を作つて、徹堂閑人と号た時分から腹のゆる作者サ、此狂言も室田がよく覺へて居て、今  
 度するといふ事だ。この前はじめて興行の時、四五日すると座に故障が有りて、不爲に仕舞ひ  
 やしたイヤ、狂言で思ひ出したが、此度鎌倉の御所で御評議が、あつて先達で取潰しに成ぬ  
 茜根さまと、ム御屋敷の殿様の忠義が明白に分解て、本家の方の知行も都合にして去頃腹を  
 切た茜根養之進といふ人の子孫に家督を下さると言に付て、其血筋を内々尋ねるが、何所へ隠  
 れて居るか知れぬへ、そうヨまたその本家の方では、鬼ても家は立ないが、養の進さまの子孫が  
 彌々出た時、同じ血縁に墨太郎といふ者のあるのを取立て、貰はれるといふ望で、正統の  
 證古に、日蓮さまのお出被成た三十番神の一軸をさへ持て出れば、能といふ咄したが、其一軸  
 を此身が、宅の支配人が百兩の質にとつて置たといふやつ、其所で急に置主が墨太郎といふ

奴でもあるりして、請戻したいと騒ぐけれども、金が出来ないから、さうして居るうヨは、や  
 く實正の血縁の者が、出れば、い、が、囃を聞ば、斷せつする時分、お嬢さまが、ひどくおどかされて  
 遠國へ逃て行たど、やらで、行衛が、しれない、そうヨ、表面でおあづねがあつたらば、知れもせうが  
 世間へ、パットして、い、わ、る、い、の、に、被、仰、出、た、日、限、が、今、日、か、明、日、と、い、ふ、事、だ、が、あ、ん、と、マ、ア、惜、し、い  
 事、ち、や、ア、ね、へ、か、ノ、ウ、ト、い、は、れ、て、び、っ、く、り、三、勝、が、手、に、持、煙、管、を、取、外、し、思、ひ、す、も、お、客、に、向、か、ひ  
 か、つ、じ、「チヤ、實正乃事、で、ご、さ、い、ま、す、か、へ、旦那「ア、ハ、ハ、顔、色、か、へ、て、お、ど、ろ、く、は、さ、て、茜、根  
 に、由、縁、の、女、由、「イ、ヨ、成、駒、や、ア、コ、レ、サ、勝、次、さ、ん、何、と、か、せ、り、ふ、を、付、お、せ、へ、ナ、か、つ、次、「チ、ホ、  
 、夫、だ、つ、て、も、私、さ、に、や、ア、文、句、が、出、來、お、い、も、の、チ、ト、平、氣、な、や、う、に、換、換、を、す、れ、お、心、の、中、に、ハ、半  
 七、の、再、び、逆、を、ひ、ら、く、べ、さ、さ、の、手、つ、い、さ、の、ね、園、の、行、衛、ま、た、さ、し、か、一、軸、の、囃、も、山、斷、の、な、ら  
 ざる、日、限、少、し、も、早、く、半、七、へ、知、ら、せ、て、お、し、し、胸、の、中、飛、立、様、に、思、へ、お、も、儘、に、な、ら、ぬ、と、唄、女、れ、勤  
 いかい、と、せ、ん、と、氣、を、も、折、し、も、早、幕、の、内、に、は、知、ら、せ、の、柏、子、木、チ、ヨ、ン、く、く、く、く、  
 因、に、言、前、の、文、に、し、る、せ、し、狂、言、の、場、日、中、の、申、刻、に、客、を、歸、し、て、夜、中、廊、に、人、を、止、宿、事、を、も、る、さ  
 ず、日、毎、に、定、め、て、申、刻、に、と、太、鼓、を、打、て、後、朝、の、お、も、ひ、さ、さ、り、し、昔、の、里、の、風、情、と、い、へ、り

若一王子権現と稻荷の宮居繁昌して二軒の料理家の賑ひハお客の最負に入つて、お折しも  
 彌生の下旬花が化したの飛ぶ蝶の風にちらく、一ツ着の裾にもつれし野がけ道おそび人多  
 ら、其中に目立唄女の他所行の彼婦多川の風俗が何所にも増る、婀娜姿お客はいつも全盛なる



富限なるか立派にて彰簡末社に五六人例の勝次は三勝を一途のひるさか目當の様子耕作路をたどりくゞてぞろくゞと海老屋の家に立入れば家内不殘聲をかけて女「今日の能お天氣でございます衆人さん最些此方へ被爲入ますとまだ櫻が少しの咲ておりますヨたいて持ナニ」日那の年中美麗花に見倦てお在被成るから花には少しも用はねマア「早くは酒を持って來な」アハ、日那よりか其身が呑度ものだから即座に酒の催促をするやつサ

●「お樂いにかノ」ナニ「此身まで引摺込で意地きたなの仲間へ入様どの押が強へ」左様サノ此連中ではお前が酒客の大將だから仲間とづれの筈だ ●「ヤレ」有が度まづ一言たりとも此身が恥を雪めた日「コレサ」マア仲間喧嘩をするよりか居所を極ねへ此所は餘まりごたつくじやアねへか勝次「チャ此座の方が往來の人が見へて氣が晴るではございせんか」日「ナンノつよらねへ狐踊繪を首へさした酒狂入や謠を唄ふお侍を見たといつて面白くもねへハナ」あびやのうちにけふ一ばんのお客と思ひ女のさうだんして下さしきをかたづけ女「左様から他方れお座敷が明ましたから彼所へ被爲入まし」 ●「夫じやア旦那左様なさいませんか」日「左様か彼所とたしか薄ッくらい様だけれど他のお客と差合がなクツて宜らう」 ●「薄ッくらい所では情婦に逢に之奇妙だ」 ×「夫と知ッたらば情婦を連れて來よふものチ」 ●「どうで明照へ出しての看られねへ女だらう」 ●「サア」お給仕が吸物膳を持ってまゝくして居らア早やく座敷へ往ねハナ ●「チャ」最早料理が出来たの

●「なんのつよらねへ五十人前や百人前の料理は何時でも出來て居らアナ勝」サア衆人さん

を早くお出さすといひながらかつ次は客人の羽折たばいれをもちてささへゆくこれより別間に至りて大勢が酒宴に時をうつしければ富限者は酔の強く廻りて其儘其所へ倒れ伏窮簡末社は酔に紛れて衆人の富有を獲し置よるめさながら海老やを立出衆人「サア」此間にお稻荷さまへ参つて來やうかつ「それじやア旦那のお休み被成てお在の中にはやくお歸りヨ」 ●「承知」勝次さんもマア旦那とお休ませせへ勝「チャ」氣障なねへ夫あらば私もお前達と同伴に参るからマアお待ち出にかゝるを押といめ ●「チャットそれと臆言だ堪忍してお呉ませへお前が此所に殘つてお呉なさらねへど旦那れ懐中ものヤ衆人の置たものが紛失も仕めへけれと廉略にする様でわりい後生だから留守をお願ひサますトいふより早く逃出行ばさすがにあとも其儘に捨て行れぬ唄女の勤め取ちらしたる品々を一ツに寄せて酒肴も片脇へ撰み除け猪口も拾ふて盃洗の器に入また香直しにある時の用意の酒が嫌らひある下戸故却てこまやかに氣の付事と察せらるさて意屈に思ひければ水の流を詠めんと立上りツ、眠りたる新兵衛に風引せじとる是も勤の心懸羽折を棄たりし肩の所へかけるその手を客人はしつかりとどらへて起上り日「コレ勝次お前マア其様に萬事日向の差別なく信切に氣を付けて呉ながらさせ此身が言出す事を茶にして聞流しにばかりするのだへ自惚らしい言分だが少一此身に貞の立ねへ事があるから終の所の兎も角も一旦の貞を立て貫ひ度と安目を賣て此間だから假にも男が手をさげて頼むのだから死ぬまで情人にあつて呉るの女房に仕様のといふわけじやアさし義理に應とて呉るが能じやアねへか勝」



ア、また久しい戯言だねへお前様のやうな事をいふ言では誰人が情人になりませぬのかチホ、ト手を放して脇へより烟草を吸付て旦那に香せながら笑を合みて男の貞を見る愛敬賢に千金の價も惜からざる憐なり此時客は感心の休旦那せ其様な愛相尽しを言のた誰人も情人にあり人のねへとは餘まりひよい挨拶だノ勝「アレサるれだッても長く情人にありのるも否だ女房に持のるも否だ當座に鳥渡情人になれと被仰て誰でもうれーがつて返事をするものはございませんは子旦那ニサ左様でいねへい悪い開様だお前が何様も此身が言事を内心から開濟で呉るやうにはとても行まいと思ふうら何卒他見ばかりでも貞を立て貫へば長くお前の邪摩にならねへ様に此方が慎むといぬのだはナとやくいへば他見情人だとか情合がある中だとか他に言れせへすれば友達に脊後指をさ、れた恥を雪と云心だら可愛そぞだと思つて今日とうれしい返事をして呉ても能じやアねへり勝「チヤ勿体ない何様して私さが其役まのりに名代が勤まりますものか夫にの外に幾人も名の弘た唄女衆がござんますのり他人に名を知られたお前さんが私のやうな詮事なしの唄女と理があるの情人だのといひれて恥になりませぬ私もまた新面の老婦で居ながらいやらしい嘲でもされる様だとお客に憎まれる基だから何卒潔白此活業を仕て居る中は他人に彼これいひれまいと覺悟して唄女に成たのでございませぬから万一浮名のたつ様な思ひ懸き事が出ましたあらばそれを此身の納まりに他のわらひとあらさう様に私元の勝手を好ぬいて生得のわが儘を何卒も堪忍すると氣の能お方がありましたらと心の底に願つて居てもしも夫が叶ッたら

よし不叶のが定ちらる何所ぞの武家へ一生奉公にでも出様と思案を極めて居ます且一なる程これはむづかしい望だへ我儘といふのも勝手を好みをするのも堪忍すると惚た男の當前だから此身の随分承知だが此方での男風俗が氣にいらす世話の仕やうも行届くまいと思つて逃るも無理のねへが云事を承知して呉さへすれば不男の生跡こそ直しやうも無ければ及ばずながらお前の衣裳をはじめ朝夕の事も十分にしておく氣だが何様も此身で承知かト苦笑ひをして言かけるの常の邪見な生得に似合ぬやうなる其風情戀の欲より柔弱あしてこれまで随分相應に實意は勝次の身に付程遣ひし上の口説で義理に迫ッてすげなくと會釋やらぬ色氣の苦界其義理づくの度ごとに談じを聞ば限りもなしこれを程よく切抜て座しきも多くひひの客を請て身れ爲親の爲にあすはあかしく容易ある勤めにあらす無理言のす花美に遊びて氣を永く窮屈させずになじとを重ね自然と情を尽するも唄女賞の上手といふべし但し何程實意を尽すとも情人か夫の在女では其仕送をするのみにて誠に無益の散財あり決して由斷をすべからずと疑ひだてをして着れば氣情し保養の遊ひにわらで餘計の苦勞を求むるならんか傾城傾國の色婦人の咎あらず(善からぬ佳に見て行幸の害二人間万事中庸に深くはまらぬを通と心得握ッていあさぬ其人は富ても金の番人にて一生終る有さいの我鬼面白事い夢にも見られず嗚呼佳よくする事のかたいかあるても勝次の猪口を消して客人に進め勝「アお一ッお上ノ被成ましきモウ醒てお仕舞被成ましたらうといふ時旦那座を正しくして旦那此向中から種々ど氣を引て見ぬか適な心かけだそれこそ



笠松家の奥さまにしては苗根さまのお部屋と云てもとづかしくない貞女の立かた感心いたしたお前の發明不躰ながらそのお心を汲で半七さまへ功を立させる大事の一軸サアこれをさしわけて苗根の家を再興してお園さんとも和合しませへ勝「エ、こりや此間芝居の節はじめて貴君がお噂の一日蓮さまの御眞筆三十番神のお一軸サ百兩といふ大金と今浪人の半七さまの御才角に出来まいがお家が立たらその時のまた御返禮も出来ませうマア夫までは貞女のお前に感じ入ての進上もの少しもはやく半七さまへおわけ被成勝「かもひがけな此一軸有がたいともうれしいとも詞に尽さい御信切何様して貴君が私の素生をくはしく御存で「ハテ其分解も私が身の上も後日あるりとおはなしを致やせうそれよりか明日一日と日限になつた苗根さまのお家の御沙汰實の私しも氣が、りだ些もとやくさし上て目出たい御左右をお聞せなせへ私にかまえず此所から直にト駕籠を雇ふて勝次を乗せ一人先へぞ歸しなる

貞烈美談園の花五編終  
貞烈美談園の花六編

江戸 狂劇亭主人補綴

第三十一回

さて天神山の芽家にはお園の乳母の病氣夢のさめたる如く治りて判次郎にお園の噂を聞呆れはて、ありけるが其夜又お園の同道して歸りし娘お八百といふものと菊平の姉ありと

聞て大きに驚き其翌日安蘇路が原の方へ他人を待みて懸合費ひし所わづかに酒代を遣とし彼方の手を放れ元の素人と立歸る事此後子細なきよしの證文を取合して手輕くも濟しければお八百の悦びいはん方なく是より後にお園を大切に敬ひ乳母の力になりて何事もお八百が働き勤めしが彼三十番神の利益益みや何となく家内陽氣にありて心細のらず殊に判次郎も親の家督を請續て内外とも都合よくありしゆゑ梅本のお仲を請出して女房とし折節お園の方へ音信て少々づ、も合力の金子を出して實意を盡しければお園お八百の悦び乳母の安堵此上何卒半七の行衛を尋ねてお園と再び和合させたく朝夕只それの心を心にかかけ居たりしがお園のさすが今の身にて半七に再會なさんも恥かしくまた乳母へ對して戀しひとも言兼て一日くを過しつ、お八百の元氣能相手になつて心をなぐさめ呉るも多愛をわする、日もすくぢからず今日しも乳母の所用ありて他へ行お園とお八百が留守に居て娘同志の事をれば互ひに打解睦ましく種々の咄しの中にも於園は鬼に角と半七の事を言出し今日も半七の男風俗をお八百にくわしくはなしければお八百は其模様を傳聞て八百「チャヤ」左様でござりまするか夫じやアアアお待被成「私か考へ出しましたお方がありますか子萬一其お人が半七さままではさひかどぞんじます」今お前さんの被仰通りの風情でお貞もお断に能似てお在被成ます」よとしてモウ「何だか意氣でやさしうで寔に些も言分のさひ好男でござりました」急度其お方が貴娘の戀しがつていらつしやる半七さまでないかどぞんじます」その「チャヤ」を吐きお前其様を事言つて欺かして「否だ」何でも京大坂



にお在なるといふ噂を聞いて菊平が上へお尋ねすに往たのぶらなかく此地にお在のは  
 づのあいヨ八百「チャ夫でもモウ貴嬢のお咄しに得似たお方でござりまするのチャアアそ  
 だと思し召すならば私と同伴に後日往ては覽さると知れますヨ その「眞正かへ八百「ナ  
 ニ私がお前さんをお欺しやるのでござりまするのかしかも此所からは七八町やどしかな  
 所で大塚とかいふ村でござりまするはその「チャ「田舎かへ八百「イ、エナアニ田舎では  
 ござりませんが町ついでない所でござりまするヨ その「左様かへそれが眞正ならば何卒マア  
 往て見たいものだ子へ夫たけれども其家にお内室さんや何かいざ在だらふ子 八百「イ、エ何  
 様して獨身でお在なざるますさうで毎度他のお人のお在の事もござりませぬものチ その「  
 左様か子へ夫じやア何卒一て見られるだらふ子 八百「ごらんささられますとも明日にも私  
 しとは同伴に参つて其家をおしへて上ませうその「ア、左様なてお呉奇萬一それが半七さ  
 まあら何様しやう子へ 八百「いよ「夫が半七さまだと私しやア思ふ儘は賞美を貰ひます  
 ヨト笑ひながら言ばお園も完爾と笑ひ その「ア、それとモウお前のお好もものを上るヨ八  
 百「急度でござりまするかへその「ア、何でも望次第のものを上るは八百「左様ならば其  
 半七さまを私に三日ばかりの間下さいましナホ、夫は出来ませぬ子チホ、その「ホ  
 、イ、エ子私は夫を否「といつても半七さまがお前の様な婀娜な風がお好だから急度お  
 前が無言で居ても半七さまの方からお前に手をお出したらうと思ふから由願はあらあ  
 そしてお前が今お言のに毎度獨身でお在だからお内室さんはないとお言のを考へて看る

と最早以前に情人にあつてお在のぢやアないかへ憎らしは八百「チホ、お娘さんがマア  
 とんだ事を仰しやいまし何様して私なんぞの齒が立まするのか勿体ないお側へ倚ても罰が  
 あたりますはその「イ、エ戀に之上下れ隔あしとやらだから其様に下から出る人々猶れ事  
 愛敬になつて他人に慈愛がられるものだヨト何を言やら理屈もなき娘心の其中に慈路はか  
 りぞ大人も及ばぬ意味は深かるべし斯てお八百はお園を進めて幾度となく繪岸の村の大塚  
 といふ所を尋ねて半七の家に行たりしかども毎度留守さへあらずして門口に錠前をかたく  
 なしてありたるも是非なく月日を過す中に彼判次郎がとからひにて繪岸の村にある大  
 家の別荘の留守居に置様に相談しければ乳母も大きに悦びお園も裏家の窮屈あるよりは遙  
 に増るあるべしとて竟に其別荘を預り住居をする事とはなりたる此時半七は繪岸の家に住  
 す婦多川へいたりし所の三勝の方への折節音信で常には三勝に隠して織江町の浦次の許を  
 住居のごとくなせしかばお園の繪岸に移り住居たるを少しも知るよしひなかりける嗚呼世  
 中の縁不縁合と放る、どの時節怪しいかなはからず半七にお園の住居が近付ばまた半七  
 は其住居を捨たるごとくに見かへらずして浦次の許にあり愛におゐて未だお園の願ひも届  
 かず父養之進の聳半七へ實意を残し自害におよび娘を待ひといふ遺言状も空しく時にわ  
 ざりしはいと本意なき事なりかしそれのさておさ半次郎と町人なれども義氣ある心から  
 茜根氏の恩を請し迎先達てよりお園を見繼しがあるとき繪岸へ音信で例時より元氣よ  
 く判「ハイ今日は機嫌能うござりまするかイヤ少し位は機嫌が悪くつても直によくお成な



さる事を聞出して参りましたといひながら奥へ通ればお園も其他も立出て「さば」チャ判次郎さんか能お出さすつた子今朝も噂をすて居ましたヨサア〜此方へお出なさいましたと言間に八百は茶をさし出し八百「ハイお茶をお上りささいましたして直にお園さんの機嫌の能あるといふお出産は何でござるますか早くお呉ささいました笑ひながらいへばお園も笑ひ貞にてその「アレサお八百其様な不賤な事を言ひであいヨ判「イヤお土産持て来は仕ませんが寔に有がたい事を聞たから直に欠出して参られたが先マア早くお咄しやうト中の間へ居りて茶を呑ながら判「トキニ今日子急いで参つたのの外れ事ではあるが今度内々でお園さまの家を立被成て下さるに極つてお血筋のは調最中で尤其は縁者でもなんでも三十番神の一軸を持って出たものに養之進様の家督被仰付るといふ噂を聞きましたからはいやくは悦ばせやうと思つて願付ましたよサしかし強といふ事を能聞知した上お名乗つてお在被成ても氣配ないといふ實正が明らかに分解あいな中の滅多に隠れてお在さるお身を顯はし事出来ませんがマア十が九ツ吉事に相違ないと聞きましたから其心得でお在被成ましたいづれ私が傳手をもとめて開出してお知らせすます其時に先達て上置した日蓮さまの眞筆が第一でござるます能仕舞てございますか手うせ「ハイ大事にし置く置ましたと言つ、立て文庫を取出し蓋をとつて内を見るに入れておらざるゆるるビツクリしてらば「チャたしかに此中へ入れて置たに違ひないつたその「チャその中に入らないか〜ト俱々にさがし尋ねれども一向にあらざるゆるる乳母は忍ち貞色替り眼に涙をうかえてさ

ば「チャ何様しましたらうチ〜小分ものでいさし何所へ置ても直に知れるはづのハ一軸殊に私が病氣迄お救ひ下さつた御利益はあり中〜とまつにする様な事では有ましかんだ急度心に覺をして此文庫に入れて置ましたのにいよく〜さいと私には生ては居られません折角お家が御再興にもあらふといふ時にあつて大事の品うなくなるには何様した事てございませう天神山うら此宅へ引移る時にも何一品とり落した事もないのにト氣ちがひのごとくありてさがしものとむれども更ふかげさへ見へざればお園お八百も途方にくれ言葉も出さず種々の箱の中いふに及ばず風呂敷包の中までも引くりかへしてたづねわびお園も少し眼に涙溜息をつくばかりあり

第三拾二回

再説れ園の乳母を始め判二郎も手傳ふて一軸とせし所の眞筆を手を尽してさがしけれども今いたづね殘せし思ふ隅もなかりければもしや盗まれたるものあるかと乳母はね園へ對し判二郎へ對し何れにも捨おかれず殊に茜根の家再興に成とあらざるの一大事なれば心せさて逆上あがり周章さうぐも〜判次郎も氣の毒よはよく心休めをいふて其日は捨岸を臨り行けり

〇そも〜三拾番神の一軸は彼墨太郎といへる者が梅本の二階にて判二郎とお仲の物語を不聞してお園の零落居る様子を伺ひ知り色情の念を遂んと天神山の隠家を尋ねいたりしが其夜判二郎の持行てお園の乳母に祖師の眞筆を興へ歸るを見とけて色欲の心



を利欲に變じ其夜より付ねらひ由断を見濟して密かに是を盜取さて質物に入て金子を  
借受酒食の放蕩に遣ひ捨たる事なればいかに尋ぬるともか園の假住居する繪岸れ里に  
あるべきやぎきければさらに知るべし道理のなししかれどもまた墨太郎も盜取て質物  
に入たれば當時自由にこれを鎌倉迄のへさ一上苗根氏を再興するといふ事にもならず  
金さいかくして請戻さんと思へども大金なれば火急に調へる手段もなく且と賣渡しれ  
證文質屋へ渡して無理に金子を借たれば僅に三月を限り質屋の方にては流し拂ふべし  
事になせしめへ五編目に著したるごとく苗根家に縁ある質屋の主人が三勝に渡せしち  
りよろしく察してよみわけ賜へと願ふのみ

されどもか園か主従の盜されしとも思ひ定めねば夜に入ても猶咳是どわさりさがせと竟に  
知れざりしめへ互に溜息を吐負を見合せ有けるが園の乳母の心配を察しければその「  
ウ乳母や何事も約束の定まつたのたらうから最苦勞に被成てないヨそして咬症殿しく御答  
になつた家が其様に手輕くまあお取立になるといふ咄しは何様も陸らしい陸だと思ふヨ  
うば「イ、エ左様でございません實正は御本家のお爲に爺御さんがお腹を召されたので  
ございませすのら神様や佛さまの御方便でも早く貴嬢の御運が開かないければ成ませんそ  
の「イ、エたどへ左様でも私ハ女の身だから御眞筆の一軸があつても世に出て家を立る事  
は出来まいヨうば「サア夫には半七さまのお行衛が是非とも知れませすハチ八百「アノ私  
さんどが氣をもみましても行ませんけれども若も少しのお金位で何様かか園さまのお家を

お立被成手つゝさが出来ませすあらば私の身を女郎になつてもお金をあしらへて上たさご  
ぞいませすヨトとばにかざりがあらぬめへ自惚らしく聞ゆれども勤をなして主筋の人に誠を  
尽さんどの歳まだ行かぬ女兒にの精一ばいの忠義といふべしうば「ナニサ左様せずともか  
血筋のお嬢さまの事だから彌其れ調べに違ひないといふ沙汰が知れ、ば私が命を的に  
お願ひを出してお園さまを世に出しやさないで置さいヨト口には言ども女のこゝろも  
しや縁者の人の中より願を出す人のありて其手元から一軸をさし上られる事もあらば亦々  
あやしき願ひも成まじ再度左様ある事を言出して御苗字までも立そこちう誤りあしともい  
ふべからすいかいいたして宜かるべきと胸を痛めておのづから鬱氣を見てとるか園が心お  
八百もどもにさまぐと及ばせながら相談に額を合して居たる折しもとや告わたる初夜れ  
鐘まだ薄寒さ春風の庭の梢をさら一つ、いともの淋しき時こそあれ隣の明家の庭の方にて  
何やら物音聞ゆるを耳そばたて、乳母はあやしもうば「隣の明家の方で何だか人音かす  
るやうだからマア静になさいヨト密に庭より拔足して隣の方へしられぬ様に垣根越から伺  
ひ看ば暈の月も雲にれて照わたりたる庭の中美しくしき娘に手拭ひの猿轡をかけて引居手を  
もいましめんとするをしはられまじと争ふ風情男の脊丈もいと高き侍あるか腹立聲も四  
邊を憚かる小聲なればしかどは聞へず「エ、イ開分の匂りの女だかアコレヤイ今も言通り  
其方が黄字の料理屋で質屋の主人にもらつた一軸は元此方が盗まれたる日蓮の三拾番神だの  
表向で取戻す事の造作もないがそれぢやア此方も盗まれたといふ由断の御叱りを請でもし





て家を立る邪摩になるから穩便に取返して鎌倉へさし上るのぢは直に渡して仕廻ねへと命  
 と俱に取上るやと捻倒して女の懐へ手をさし込んとするを振拂ひ突退くくわり脱お園の  
 乳母が覗居居たる小笹垣根の際の方へ逃出して來りしがその垣根に少しばかりの築  
 山ありその築山へかけ上ると見へけるが此方の庭へ垣越に一生懸命の覺悟と思ひれいと身  
 輕くも飛下り自身に手拭をふりはさき戸の明かけたるか園の家の縁類へ駈入て女「何卒後  
 生でございますから少しお隠しなすつて下さいますしト言ながら遠慮もかく奥の方へはしり  
 込てうづくまるをお園か八百は驚ろき恐れ欠入し女にとばもかけず又も後より何者か追欠  
 來る者あるかと怖々ながら椽側の戸をびて明さる様も用心してゐるくふるへながら奥の  
 方を見返り庭の外を伺ひ泣聲にて「その八百早く乳母を呼でお呉三氣味の悪い事た子へ  
 八百「アレサマア無言てお在遊ばせまた何ぞ此所へ參ると行ませんからト身を縮めてお園  
 の側へ寄添ばお園もいよくもの恐ろしく息をこらしてさし俯く此時乳母の逃入し女の影  
 を見たれども夫をば左程に怖くと思はず後より追欠來りし者が俱に此方へ欠入ば大變あり  
 と恐れしがまづ早足に勝手口から宅へ入戸をびつしやりとかさ錠懸是もものさへ言かねて  
 呆れながらに駈入し人の方をさし覗けば今欠込でうづくまりたる女の乳母の方を見て隠れ  
 る身故かものをも言ず手を合して隠異よと恃む風情を乳母も心得やうくに氣を鎮め戸  
 りをよくくして女を奥の戸棚の中へ隠し置知らぬ風俗をば仕て居れども心とさらによす  
 まらず前後そのと見かへりて三人同居に寄こぞり貞見おはせてひそみゐる此時隣家の庭の



方ある彼侍の女を追欠築山へ走り上らんとして足ふみはづし中段からすべり落山の下なる泉水の中へ轉び入り池の岸にうち込たる柵の留杭に當り臙腹の骨をした、かに打てしはらく氣絶をして居たりける

○そもく此騒ぎの何故ぞや又女と侍は何者ぞと言に女の則三勝にて侍の彼惡漢の墨太郎なり扱いがあれば二人とも此所へ來り此段及びしどと尋るに三勝は黃字の料理屋にて客人に貫し一軸を懐中して駕に乗半七が方へと急がするを彼墨太郎は先刻より次の間に密に伺ひ見届駕の跡を付て途中に至間を見て駕昇を語らひ金を與へ道を間違させて途中に日を暮今此所へ引入往來のらぬ明別莊の荒たるを見て昇こませ駕昇は逃去せて墨太郎は跡に残り彼一軸を奪取三勝をも慰まんぞ非道を働を三勝は命を際と心を勵柔弱力なれども貞烈の操を難を遁れあやうくもお園が居ある別莊へと逃入しあり

亦曰此段都て人情の趣ならず殊墨太郎の行方當世の道理に當らず狂言綺語れ所爲を寫して語るのみ看官理屈を以て老實に批判をする事はゆるし賜へと願ふもれなり

蓮地庵主人痴志

第三十三回

再説お園は乳母諸共に暫時は息をつめ只外面の方より追欠て來るものあらばいかにせんと夫のみ怖れて居たるが一向に音もせねば漸く少し心を落着乳母の密に奥の方へ行つづくま

り隠れし三勝に向ひ聲をひそめらば「モシお前さんのマア何様破成て爰へお出なすつたのでござりますすへト聞れて三勝の黃子の料理茶屋より供も連を駕昇を心當にして繪岸の中村まで來たる途中にて惡漢に付られて駕昇も其惡徒と心を合せてなせし所爲なるか得しれぬ所を昇歩しと見へて夜に入て此所へ駕を下し何所ともなく逃行曲者のために捕押へられ所持の品を取上られんとおそのとかの既に非道の行ひをもおさんとせし故に遠慮もなく此家へ逃入し由を物語りければも甚根家の重寶とも成べし三十番神の一軸の事も半七の身上其身を三勝とも打明て云ねばお園の身に付ても大事の品を所持したる女あるとの察すべし様なく殊に乳母の病後にも兎角物忘れして万事他の思ふ様にのらざりしとぞ先此咄の暫時さし置て説ね心からぬ一條の譚有前後となるを能く讀得心給へかし爰に先達て半七の爲に恵みを請て安房の國へ行たる稻田安幸の古郷へ錦を飾る心にて立派に出立て親族縁者に其以前視かすめられぬ恥を雪めんと樂しめて彼地に至り長狹郡天津の在る神明村とかいへる所に兄なりける稻田安信の許へ着し所兄の安信の急病にて死去し兄嫁と先年故人にあり今年十歳になる娘計り残りてとかばかし親類もなく誠に血筋はありても農夫の小身なれば稻田の内外を世話にする器量もあらず只村中の人を相談して一昨日安幸方へ手紙を出したるまでの事にて今朝假に葬式を出し家督の事なぞの弟安幸の歸村次第に談合をする積にて彼娘を村役人の差圖にて隣家の者が入替り立代り世話をして居る所へ居たりしかば村の者の大きに悦び直に安幸を兄安信の遺跡とし兄の承諾て居たりし病家の不殘安幸



を尊み薬取に來る故安幸は當惑ながらも否應ならず是非なく藥帳に扣てある藥の法通調合して與へるを居るうち又新に病人を恃まれ一日片時も透問なければ一旦すてたるごとくして彰簡同様となり醫書をば久敷振向て覗きませざりしを亦朝夕くり返し他人の病氣を頭痛に病お醫師さまに立返りて其心配なる事言ん方よし此のへに思はずも鎌倉への歸らざりしあり安「チャイ」先刻左様云た茯苓と刻めたかノ女房「チャ」お前さん檳榔子を出して置いて葛藥を早く刻めどお云じやアないか何様して其様に幾色も製法が出来るものか子モウ「お醫師さまをばお止なね」私まで開しくつてなりやアしないヨ本道に療治が出来も仕ない癖にチホ、安「イヤ丈夫に向て防風なもの、言様をするな最一言其様事をいふが最期もあるさね」ぞ世間へ聞へても葷香が惡い當販の仕方がないが頼て男下女を置いて其方に藥を刻ませの仕ねへ女「ハイ」私が悪いからご免ささいまし黄芪に鹿末な事をやましたチホ、大棗腹をお立たチ羌活らしい安「洒落るさ」今に黄芩が出来るぞ細辛にも樂をさせて醫師の大黃になつて見せらア女「チホ……丞氣湯でも煎じて上様かへ安「アハ、否事かお真平は免だイヤ考へて察ると病人が能藥を服用ものだぞ己等アモウ蒼述だの細辛だの匂ひを嗅と胸がむか／＼してならねへその藥を晝夜三帖づゝも續けて吞たら大概な病人の往生を仕さうなものだ女「チホ、大きな聲でお言でない藥取の使でも來て聞とわるい」チホ

作者曰稲田安幸も元親の醫業を請繼心にて正直一途に醫道を學びしが實にも故人の

妙言のごとく醫之威なり威義嚴重ならざれば用ひられず醫の衣なり衣服美ならざれば用ひられずと世間の病家醫師の善惡を見わくる事與はず支關の立派あると上手と思ひ鹿服を着て袈裟に住ば嗜婆にまさるの術ありても草澤醫生と見受けあすもへ一旦醫業を捨ぬりしとぞ

爰に其頃鎌倉乃執權長崎兒玉の前司安宗の姫君は幼年より病身にてありけるもへは母君あり別ては秘藏ありければ兼ては信仰ある小湊の誕生寺へ大願を懸あつて漸くには全快わらせられしかば其は禮參りを仰出されけるが元來長狹郡小湊の領分なるも依て前司安宗にも承引あり随分穩便に供立して忍びの參詣あるべき様もとありしもへは母君と姫君は同道にて舟路をば參詣ありける所に思ひがけあはれ大變こそ出来たり夫をいかにと委敷すれば海路に馴たる者どもも天氣を能く見濟していと穩なる日和の日に船を走らし天津の此方ある濱萩といふ浦を押し折しもとるかに沖の方お異しき形の物浪の上に浮き出るとみへしが彼長崎家の舟を目かけて浪路を横ぎり走くるありさまなれば船中の上下の人々大きに驚かしてあれヨ／＼と言中に異死物の次第に近くあり忽ち逆波高く打揚風の小松原山の方より吹來るかと思へば亦東條のかたより吹付るもへ浦へも磯へも船を寄る事叶はず船へは大浪を打込様になりしかば女中方の泣聲お母公姫君の「驚言ん方お此時に至りては貴人高位の威光といへども千金の力といへども詮方なければ侍方も主人の身の上只案煩ふ計にて途方にくれ船頭の一世の大事と働けと風は強く浪は荒く殊に怪しき海魔の顯れ



障化をなせば怖れをなさぬ者もあし此時は母君も姫君も法花經をくり返し只一心に誕生寺の方へ向ひ日蓮上人を拜し賜ひしが既に待化物は船に近づき座の間へ飛入んとせしかば姫君はアツト叫びて打伏賜ひ正体なく母公の手お持賜ふ所の法花經一卷を高くさし上南無妙法蓮花經と唱へながら彼海魔に投つけ賜へば信心力と經文の功德におそれをなしたりけん破鐘を突きと音を發して浪を潜りて逃去ければ直さま浪風治まりて今まで揺上り下せし舟之疊の上へ引がごとくなれば上下の人々の夢の覺たる思ひをなし母公に大上人の利益をいよく尊と姫君を介抱せられしが此時より姫君の胸甚だしく痛いだしお附の醫師は早速薬を煎じてさし上げれどもそのまゝも暫時の間まは胸の通ひよさがりてか食物は更なり湯水も通らぬ様にならせたまひし故又母君には心くるしめられ種々といふ醫師も相談あれども薬が咽より胸へ通らぬといふは病氣あればさか／＼容易は療治もならず御是として時を移しけるがまづ兎も角もとやく陸路へは俱を舟上て又手段も有べしと是非なくその儘に舟をいそがせられ漸くは濱の磯より舟を上らせ賜ひて姫君を船に勞りりやお付の女中の心配を仕ながらは供をして法花經を唱へ漸やくの事にて誕生寺へは參詣ありけるが何故なるか姫君の病氣治り賜はず左のあれども只胸の通ひの止りしものにて外は少しもは腦を遊ばす所なきは病氣なればは空服ある事言ん方なし母君もは側の衆も何卒しては食事さし上られたくは氣をためらるれどもさか／＼薬も水も通らぬ程あればさすべし様さく追／＼近郷近在の醫師を呼わつめては脈を

伺がはせけれども何れも是を療治なしアさんと受するものさく只は大切の事とのみア上て退かき去るのみか身動かしア時直には命も危くあらせらる、事あるべしとアへ鎌倉へは歸りを上する事もならずとからず日敷を十日程過すまで誕生寺には逗留ありけるに付て此段を前司の御許へ注進し鎌倉よりも御病氣の御見舞として重役の面々上手の聞へある醫師を同道わつて小湊へ参られしが何とも手段さく手を束ねて扣居る事あれば母君も今は御思案に餘り此上はいかある様しき者なりとも姫君病氣を治すべき工夫亦は妙薬を知りも仕たる事ならば恩賞は望の儘に遣ひすべしと胸を山され御病症をも書附にしし御願分内外まで御侍わつて在々町々不殘告られけるが名にしおふ鎌倉殿第一の執權と聞へたる長崎兄玉の前司安宗の御姫君は事なれば此儀に付て手柄をなれば立身出世も自在なるべしとて聞傳る者各耳をそばだて何卒して其御病氣を治しまいらせたまひなりと噂の四方に満々あり此時まで稻田安幸の所詮其身なごの及ぶべき御病氣の療治と思はぬも只醫師を呼上らる、折に出もせず過しけるが此度の御書附に御病氣の事をしるしあるを覗みて看れば何ぞからんや親の代より家傳としたる咽の煩ひと有ければさては稻田の家の開進時節到來と思はれたり家の秘傳といふといへ共滅多に逢なき咽の塞かり方一煩ふ人あれば何の造作もいらざる療治只一度の療治にて忍ら全快有べき妙くう出々古今の名醫といはれ先祖の名とも顯のさん少しも猶探する譯あらずと村役人を同道して姫君の逗留せらる、誕生寺の假御殿へいたり御附の役人衆へ舟上て急度御全快を請合ける



中老尾美江「コレハはじめて御目に懸ります只今承りなりましたが御上の御病氣を御聞及  
 かれて御療治あらふとの事御奇特な思し召に存ます安幸「ハイイエ御曆々の御伺ひ上  
 られましたる御大切の御病症を村落醫師のおこがましいと思し召ませうが御領分に居ます  
 る御恩報じに何卒お脈を伺ひましてと參上仕りましてござります宜しう仰上られます様  
 に願ひ上ますト卑下して言と覺の妙藥家傳の神功万人に一人も仕様な事あれば自然なる  
 名醫の容体田舎醫師ぞと中老尾美江は心に侮り對面せしが豈はかふんや稲田安幸の鎌倉に  
 在て貴人高位の席をも伺ひ知り仁へ應對するの座配に馴たれば更に聽する風情もあく殊に  
 の衣服の模様もど野暮ある姿は少しもあしお醫師さま業よりは世事が上手の人物なれば  
 尾美江の誠に感心して直に奥さまへも程よくお取次申上しかば元來御療治お差支られてわ  
 らせられぬる御難病先兎も角もお脈を伺はせて看立が宜くは御療治を仰付られしかるべし  
 どて早そく姫君は御前へ召出され御脈を伺ひせられて御附の人々片唾を香如何申上るぞと  
 安幸の貞を詠めて扣居る尾美江「何もの御病症で被爲入りますか御親察を被仰まして安  
 ハイイエ誠に御輕い御病氣で入ッしやいます御藥を一服召上りましたらば直に御全快にあ  
 らせられませう先利らかにお病をお仕立なされて御上さざる御用意被成まし久しくお食事  
 を遊ばしませぬ上句に只の御飯は上られませんからトはや御病氣の治りし様に申上るを人  
 々と聞て呆れる互の目貞中老尾美江の堪へ兼て尾イエモ安幸さまのお食事が出來ま

す位あらば種々と御醫師方を召れと遊ばしません御飯所かお藥さへも御咽へ通らぬ御大病  
 何故左様に輕く敷かつしやいますり何様も合点が参りませぬトいふをお次に扣て聞とる  
 御手醫師「アイヤ安幸老何と御病氣を御見立なされたりなかく常体の御症ではござりま  
 せぬそ湯水も一滴御咽へは通りませぬぞ餘りとさせ七鹿忍事申上られませぬ桔梗甘草  
 荆芥などでお咽の開く様な儀でござらぬ連翹山豆根のやに及ばず通關散をその最初に上  
 て見ましたがなかく夫で申さません夫を手輕く申されるは定て妙手のお療治でござら  
 う何を主藥の方を立られますかト苦々しく答めて言も其職業の意地づくか君を思ふて言事  
 かお側の女中も奥附の侍衆も與をさせし其家体安幸と平氣にて安なる程鹿忍事申  
 申上るとか疑なざるも御尤の御忠節一かし兼々覺悟がございませぬ事あらば御療治願ひ  
 に罷出ませぬ第一湯水が御咽へ通らぬと申すにうかくは藥を上り致させん只今調製いた  
 す粉藥を粘り交ては身足の底は張置まして半時程立ましたらば只一服の藥をさし上夫が首  
 尾能おさまりました時まづお食氣が申すのを拙者が功と思し召させお咽の通がござらぬ  
 のにお藥を上る様な無法をいたす安幸でござりませぬと言放したる大言も最初にお口へ  
 入ざる散樂姫の足足の裏に張て其功能を顯はると聞ては實ハ一流の療治の仕方願母しと  
 奥方始姫君も思し召に叶ひしもへさらし其義と仰付られ稲田のか次の間において何の知  
 らねど家傳の粉藥粘を取寄せ煉ませて膏藥の様に紙に延是を女中の取次にて煙のは足の裏  
 の土踏すの真中へ張様と教のごとくお側の女中が其通にしてさし上り半時程を待間の長



さ奈何くどお時計を覗にたつわれの時の鐘を聞損すまじと耳をそばだて待意屈も心から  
 此半時の常よりも日が延たかど叫やさ台其刻限の至てかほ側に御看病中て居たる初音の  
 次へ立出お薬を台上げると被仰ますト言葉の下へ安幸が煎立たるお薬を持出 安直にお上被  
 成まし。サア是から御食物の御支度御用意なされましトいへどお次れ人々のまだ半分の餘  
 疑ひて返事も録にせざる所へ亦立出るお側の衆が 琴次只今のお薬のト言をいせす御抱  
 の醫師も女中も一同に 一同とてもお薬は通りますまい手 琴次「イ、エお心よく召上りま  
 してモウ御無病の様なお氣に成遊ばしましたから直に御膳を召上り度と意遊ばしますト  
 開て衆人一同に 大せ「エ、イト呆れて貝見合せ暫時ものを言者なく覺束あしどお中老尾  
 美江は姫君の御側へ立出 尾お心能と意遊ばす乃がは實正で被爲入ますか餘り俄のは全  
 快故何様やらは案事上ります ひめ「は膳を給てと悪いとかへト恥かしさずに莞爾とお笑  
 ひ遊ばすは白色此程絶てる事尾美江は夢見る心地にて此段を與さまへ上りと立所を  
 母ぎみにも立出賜ひ斯と聞し召れてお悦ひ限なく安幸をお側近く召寄られ 奥存懸ない  
 様お姫の容体最早案事とないのかや 安「ハ、は全快に相違ございませぬが何分お食事をさ  
 し上られませんかから此上之亦お空服ので他のは病氣が出ますも知れませぬお大名の姫君様  
 でもは膳を上らずにいらつーやると中事と出来ますまい些も早く召上りものを上度もので  
 おざりますヤレ」格い「は勝手役人衆でござります何卒早くお姫さまへは膳をわけさ  
 つて拙者へもは賞美には茶漬を一膳仰付られて下さいまし。アハ、ハ、ト高笑ひ遠慮もなさ

いる放氣者元來姫の命も救ひませし同様の安幸の事あれは母君はは機嫌克お笑ひ遊ば  
 し有がたさ意を下されけるもへ衆人一度にお目出たをす上るも賑としく以前譏りて侮り  
 し人は面目なきのみかほ上の首尾も氣味わるくお抱替と稲田へ貞向おらすこそく遊て下  
 宿へ下れば其間に漸く姫君へは膳をさし上らせしに何事なく召上られつねよりは機嫌麗は  
 しく稲田安幸へは當座のは賞美數多を下され猶望みの事あらばす出すべし鎌倉のは居敷へ  
 ナ達して何なりともは開濟ある様になし遣はさる思し思し召なりと仰出されければ安幸  
 と辞退をす上一向に欲心なき様なりければいよく衆人の評判よく姫君は全快の上は直に  
 鎌倉へは歸館なればは供をいたすべき由を仰付られるもは最負の意としられたり既に其  
 立のは用意ある所へ鎌倉のはやしきより早使走來り殿さま俄のは大病にては醫師方不殘  
 は大切とすは薬もは斷す上る様なれば姫君は病氣は大事成とも急ぎは歸館おらせらる、様  
 にどの事なれば奥さまにも姫君にももつての外のは驚きにてますく安幸をは供に仰付ら  
 れ何事もそよくに鎌倉へ御歸り遊ばされて殿様の御病氣を御伺ひありなるに兒玉の前司  
 にも姫君の御全快を不思議に思し召され御尋ねれば稲田安幸の事を御聞し上られしゆへ  
 早速殿様の御前へ召出さる御目見のすへ御自分の御病氣も安幸に仰付られしが是を稲田が  
 開運立身する時節至來といふものか鎌倉中の歴々が手を束ねたる御大病をいかあるお療治  
 をなしたるか日數わづかに十日を過ぎすして御本服遊ばしけるもへ長崎家の一同と稲田安  
 幸を生薬師如來と崇敬貴賤さどく是を信じ一家一門の方へも風聽なすのみか各々稲田



をひのきにあし病人ゆれば安幸に頼むに限る如くどあり亦安幸の薬をもらへば是非治ると  
 極りし様に思ひ町家の云に及ばず鎌倉の大小名長崎家の療治をせし手際を聞傳へて侍に  
 來らる、もへ安幸の若宮小路の中程へ普請をなし門がまへに敷石をして柵如輪の大立關  
 光りか、やく藥箱誠に鎌倉第一の名人醫師とありわふせ以前彰節を寄せし時に侮どりたる  
 ものも腰を屈めて侍みに來り半信半疑で療治をしてもらへば安幸は以前の洒落た心にあら  
 ず病人を親察事我子れごとく大事に薬を調合するにも分量お念いれて薬種を撰み價高き薬  
 品を貯はへて藥禮の聊も欲心なく内福にあるにしたがい貧家の病人の家内に施しををし米  
 を送り薬をわたへ日毎に欠廻るもへ十人の九人まで治せずといふ病人なければ今は舊來友  
 達も彰節醫師とは決ていとす實に上手にありわふせしと手柄はあしの風聴にぞんくと取  
 とやしけるもへ這所の武家御所の富隈扶持米をふくり衣るいをわたへしかば安幸夫婦の過  
 にし事をおもひ出して身をつゝしみいよく善事をこゝろに懸しが彼苗根家の一件半七の  
 事をはなれた氣の毒に思ひ病家病用のせわしき中にこれを第一のかなめと心配してぞ居た  
 りける

第三十五回

繪岸の里の別荘にてはお園主從三勝も物さへ言す恐れて在しが暫時して臺所の戸をト  
 くと叩者有ければすいやと家内への胸を轟かし居たりしを表の方にては猶はげしく  
 叩きながら「チトお侍です新町の天神山から近頃引越てお出さつたか方の御家は此方で

のございませんかト言れて乳母の耳を敲て聞ば何様やら聞馴たる聲と思ひて戸口に近付う  
 は「誰人でござりますす」ヤレレ其お聲で知れましたハイ菊平でござりますぞ。ア一大きに  
 苦勞をしてお尋ましたらば「チャ」菊平どのウヘト言ながら貫の木のを外して戸  
 を明きの兄の名を聞妹のお八百の手燭を照らして走り出脊後の方を視返りて八百「お園さ  
 ま菊平が歸つて参りましたお悦び遊ばせといふ間に這入る菊平が「ヤレレ」久しい間御  
 不自由でござりましたさぞお嫌さまがお心細ふござりましたらう御地忍被成ましその「チ  
 ヤ」菊平かへよくマア歸つてお呉だねへ乳母や早く此方へお呼あ子へさう諸方を歩行て  
 草臥たらぬ能休ましてお遣ヨト中の間まで立出るを三勝のさし覗き看ば半七の實家にて馴  
 染の深き菊平にて有ければ夢かとはあり驚きの中に嬉しく走り出かつ「チャ菊平さんかへ  
 誠にお久しく菊「イヤコレハ三勝さまでござりますのハテ是は珍しい所にお出被成す貴殿  
 が此所にお在さるからに定めて若旦那さまも御同居に御被座ませうそれどの知らず誠に  
 モウ」何様にか心を盡しました

○是より三勝お園の互にくわしく身の上の事を語り合乳母と菊平妹お八百と彼是と問と  
 はれて或は悦び或は悲しみ果は五人が車座に咄しも廻る過越方お園の艱難半苦乳母の  
 病氣菊平の妹お八百の零落て在し事判次郎の實心三十番神の一軸の利益その一軸の紛  
 失をお園が語れば三勝は今日一軸の手に入し事亦墨太郎に聞付られて既に一軸を奪ひ  
 取るべき危難を通れんと此家に欠入りたる一件お互がかりに物語る其長語と看官の



よませ賜ひし事なれば爰に又くしるさずとも菊平のくわしく聞とりて萬端を承知する  
事と察してよませ賜へかし

菊「イヤ夫のマア種々事でもさいますししたしかし期して三勝さまがお園さまのお在る  
所へ茜根の御家も當時所でなくて叶ない寶物を持ってお在なされるのみかお園さまが苦勞な  
さる半七さまのお行衛まで知れるとやう一通りでないの縁と思し召て何事もお交情を睦ま  
しくは相談を遊ばしませまづ何事もさし置ては家を再興被成すすが第一の事でもさいます  
から夜が明ましたらば亦よくは相談を致しませう私も甚だ草臥て居ますからおゆるしを願  
ひまして休足をうば「チ、ホンニ左様ならず手なそれではマア早くお休みヨお嬢さまも三  
勝さまもマアくお休みなされませ中く急にお咄しの極る事でもさいますませんヨ去なが  
らお嬢さまへ何事も菊平殿が歸つて呉ましたので氣が大丈夫になりましたモウ何でも怖い  
事ございませんヨト乳母も安堵の思ひにて各々其夜は休みける

○作者曰お園三勝乃對面に其趣を盡せし体なし斯ては人情のうすさに似たれど既に此  
巻は大詰の幕に等しく樂屋は道具を片付看官は履物を手に持の時に同じければ過にし  
事を繰返して互に愁歎する場を綴るのいとまなしお園三勝の温順なる生質實義の初編  
二編は細やかなれば今宵の風情はさうかしと宜く察したまへと願ふものなり  
更渡る鐘の音さへて深々と梢をあらす風の音兼耳に入て菊平は不圖目を覺す折節おれ中の  
間の方に人影のちらりと見れば誰なるぞと燈火の影に透しおがめ能く見れば家内にお女

の外に人さきものを何者なるか三勝とお園の臥たる一間の障子をしのびやかに徐明て入  
んとするはたしかに雲の物語り墨太郎ぞと心付夜具とね除て身繕ひ息を忍して佯がふとも  
知らで一間へ墨太郎頓て立入一軸を懸なく携へ次の間へ出れば此方に待構へて在ける所  
の菊平が脇の方より飛か、り墨太郎の利右手を捕へて忽ち一軸を引取かへして突倒すを墨  
太郎も足踏直し其儘直に抜打に菊平が奥向切付るを早くも開ひて突出す握り環は急所のわ  
て身うんどばかりに倒るれば物音聞付三勝お園乳母もお八百も一度に反起立騒ぐを菊平の  
聲を懸菊「ア、モシ最早宜ござりませす驚死騒いでお怪家をなさいますナ雲に三勝さまのお  
咄なされた墨太郎さんが一軸を盗みにござられたのを私しが今取返して些の間窮屈をさせ  
て置ますのだアハ、ト平氣な風情の菊平がと葉に少し胸さはぎり安まりながらも氣味悪  
く燈火を添て前後を見廻し、白見合せ五人が一度に溜息を吐より外におかりしが兎や角  
する間に夜も明渡り近隣の家毎にのや起出る其物音菊平は墨太郎を守りて居たりしが妹  
に差圖して雨戸を明させ其邊を殘らず片付させ朝飯の支度を調へて時分はよしと墨太郎に  
活を入菊「サアモシ夜が明ましたから最早お歸り被成すしト引起されて墨太郎氣拔の様を  
顔色なりしが目上の者の居ざるもへ猶押強ら我慢の負腹立上ツて眼を見はり墨「お咄めを  
請た身を以て遠慮もかく此邊に住ふお園が不届また三勝めが持て居る一軸の此墨太郎が伯  
父御養之進からもちつて置た茜根の重寶血筋の男子へ傳へる定めは先祖から遺言だは夫を  
已等が手にあつて濟ものか是から直當所の支配の役所へ參つて役人達を同道一た上綱を



かけて吟味を遂るぞ其時咆面しをるちト口にいへ心への怖をいなく身の悪事尻こそはよく此家を出んとせし其所へ急いで来かゝる判二郎とすれ違ひ互いに良を見合せしが心急げば出る人も亦入る人も其儘に外面と家裡へわかれしが判二郎は乳母に向ひ「イヤモシ昨日お咄しやた一軸の在所が知れたに付て其質屋へ直に往て懸合ましたらば最流れて仕廻ぬと返答てございますから一番むづかしく言ふと存ましたが左様した所が勝手の悪い事も有置主の名を聞ましても慥とした事がわかりませす荒立すに聞て視ると何様やら今門口で摩違つた墨太郎さんの様な事に聞きましたたが兎も角も一軸の置主の手元へと返らずに何様か半七さまの御手に入さうな咄しでございますから左様して見るとお願さまのお尋ねさる半七さまが則鎌倉の土地お在さる事と見へますかマア何様致すが宜らうかと御相談に参じましたトムを聞より乳母と菊平と昨夜中の事三勝の手に一軸の入り始末を物語りければ判二郎は其様ある混雑の咄しを漸くに聞解て判「イヤハヤそれはマアとんだ事でございまして左様して看ると質屋の主が心あつて番頭も一軸の出を知つて居て苗根のお家をお思ふから他へ放さずに置たのだと察へますまた今の墨太郎の天神山の宅へ忍び入て盗出したのを質に入たに違ひございせんしかし夫も是も寶物が此方のお手に返つてあればマア安堵でございます此上の少しも早く三勝さまか半七さまを是へお呼おさるかお願さまと御同伴も半七さまのお宅へお出さるかして御家をお立なさる御相談が第一でござります菊ある程夫が何寄の事でございます何所がお宅でございますかマア私が早く参つて此

事をかしらせませう三「夫じやア何卒私と同伴に行てお呉さ愛からは直たからト是より何れも急いで食事をしたためまづ三勝と菊平が半七の方へ行んといふにお園の半七の在所を開ては飛立様に思ふのみか父養之進が遺状を半七へ預し置罪を筆には懸まじとて離縁におよびたれと一旦御法が相濟なばお園と女の身も養之進の死後にさしたる咎めもあるまじきに依て其時の亦縁を結見捨ぬ様に頼入と死る際にも子の行するを思ふて尊の身の上までかばひし父の慈悲心を告てふしさに三勝と俱に往度心根をさそがに夫と言かねしが苦勞人として三勝と早くもお園の心を察し三「アお園さまへ途中で万一間違がわりも致しませうかと遠慮いたしやしたがお嬢のお家をお立遊りするのでございますから肝心の貴嬢がお逢なさらないと行ません何卒御同伴にお出遊をして下さいますしト進めを幸ひお園も俱に半七の方へ尋ね行

第三十六回

爰に浦次は半七を我方へ引入て其儘夫のごとくして置といふ程に三勝を余所にする心りかりしが此節半七の病氣俄に再發し既に危く見へしかば浦次の驚と周章つ、此所彼所の醫師を招ら療治を待みけれども何れも難治の趣にて七分通りと斷りゆへ奈何なさんと胸を痛めまづ婦多川の三勝も苦勞させじと扣しも今はあかく隠されねば此事を告て相談をなすべしと使を頼み遣りしけれども折あしく留守との事なれば途方に暮て居たる所へ長家の人が信切に頼み呉たる名醫師を伴ひ來りてその由をゆげれば浦次は嬉しく早速出迎ひ



病人の枕元へ伴ひ行ば半七と醫師の目見合せいしや「イヤ是の若旦那でございませうか半七」  
 エ、安幸さんかへ是のママ珍らしいト病を忘れて枕をのちれ床に起直れば安「ママ〜お  
 横の方が能ぢやアございませんかイヤ御大病に即功の丸薬がございますからまづ是を少  
 しお上り被成まし其中によく御容体を伺ひまして御樂の御相談も致しませうト以前に替  
 安幸が當時での鎌倉の大諸侯へ御樂調進の大先生形容衣服の立派なるのみかの自然と備  
 る其威光六枚肩の供廻り侮り難き人物なれども半七へ對してはひかしの替らぬ其手當自ら  
 立て白湯を汲安「サア先此丸薬を一度に召上りましお胸の痛が忽ちに開きませト言つ、半  
 七を介抱し安「マレ〜ママとんだ事でございます于此問始めて茜根の御家の事とイヤ肝  
 を洗しました夫ら何でも私が御恩報と存まして長崎さまへ段々御願ひ申して見ると最早  
 御養父養之進さまの忠義が顯されて男女に限らず其血筋を召出されて新たよ家をお立なさ  
 る思召若も養之進の血脉の者がさし當つて知れず先達て屈の上にて養子の披露をなした  
 半七と申者養之進の深き思案に依て離縁をせしものあらんと御推察あるに付てまづお前  
 さまを召れる筈のお内意がわつた所で私が御貴家へ参つてお聞やて見ると貞心院さまが  
 涙をお流し被成て貴君の御行衛も御存じさいどのお歎きと申すので私もがつかりと致ました  
 が是非お前さんをお尋や上ますと申合せて歸つてから八方へ持んで置て誠にモウ〜心  
 配をいたしましたしかし斯しては目通りをした上の大丈夫でございます少しも早く御病氣  
 を治して上げてまづ其間に兒玉お前司さまへ貴君の事を出して置ますから左様思召まし





半「イヤ夫の存がけかい此身の幸ひで殊にお前がマア其様に陰で信實を尽して呉なるといふは夢にも知らん事だ亦不躰ながらお前は何様して俄に立身をして仕合が能なつたのだか喜ばしい事たツけなら安「イエサそれとやも貴君のお影でございますト

是より久しき間安幸と半七の看病を仕ながらその身の田舎へ行って兄の家督を継たる始末亦執權なる長崎家の姫君のお療治をして功を立鎌倉に呼出されて醫業存の外に行れ當時の高運なる事勿体なき程あれば晝夜醫術を丹誠するまでの内外を例の可笑辨舌にて興ある様に物語ければ半七は思はず笑貞を催し暫時病を忘るゝとどく心も少しはれやかありしとど實に万病の發る所と大概氣より發るとやらいふに違はず此日安幸が煎薬を用ひ初めしかわづか七日の間に床を放れる様になりしかば其日數のうち日毎に安幸の見廻て茜根家再興の事を談じ。兼て三勝の元へも此趣を告てと相談しけれどもいまだお園の在家もしれず肝心の茜根の血筋お園をさし置三勝を携へてその家を繼興しては後日にお園へ對して義理立すとて是を告す一旦家名を興しおば自然とお園の在所も知れる事あるべしとて繪屏の里へも歸らず假又稻田の家に食客の浪人にて仕ししを中長崎家の言上に依て鎌倉の營中に召出され養父養母の忠死を不便に思し召れて新地八千貫の知行を賜りて先亡の名を其儘に現はして忠實を世上に知らず諸士の忠孝を勵さすべしとて半七を直に茜根養之進と名乗せ給ひたる斯て屋敷とは建長寺の東南にあたる地に置て下し賜りければ半七と十方に人を出してお園の行儀をたづ

ねもどめしにいまだ日數も四五日の間なればお園の方へも知れず判次郎も茜根家の再興を内々仰出されし時の事は聞たれども却て斯のごとく再興あり事はいまだ此四五日故知ざりしとぞ

再説お園三勝は菊平を供に連れて半七の隠家にいたりしところ今日も戸口に錠を下して留守の体近所の家にて聞合せたればその隣家の他急引越て行たる頃より半七も一向に家に歸らぬよしを言けるも三勝のいふかしくも心せだて菊平に言付近隣の家に自ら挨拶をすれば兼て其家の女房と知りたる事もへ咎めもせず錠を明て家内を見るに家財其外書物なども其儘あるもへ少しは安堵してお園に向ひ 三お園さまコレ御覽遊ばせ御浪人の中にも猶大事に被成た御本や何かく斯してございますから必ず遠くの方へお出さつたのでございませんヨ當時の貴嬪のお住居から近ふございますから是非様子が知れますヨ今日お逢かさらないでもお祭事被遊ますなへ その「ハイ左様でございませうねへ何様して此様にお宅を明てお置でございますかろしてお前さんの方へもお便りが久しくかいのと少し氣に懸るでございませんかト言れて實に三勝も其始めから安心せず何故あるかと當惑の折なら垣根の外の方に多くの人音物音に何事やらんとお園三勝縁の端に立ながら表の方を伺ひ見れば箱狭箱引馬の同勢行列さそやかに先徒士衆も立派の人々早くも木戸へ駕籠を下せば駕に引添し待衆が開く戸の中より出る茜根半七八千貫の殿さまと言でも知るゝ威義嚴重昨日に替る立身も暫時なからの古郷の家に飾心か安幸か進めて今日は隣家の者へ祝儀の品を遣りし



て以前の近付馴染の人を賑はす爲に來りしありされば後より稲田安幸同じく此家の木戸の口安アハくくくイヤ是が御浪人中の假のお屋敷でございましたか途中御家來衆に立派な下屋敷を見せると笑ひながらの御意だから何様も合点の行ないと存じてお供をいたしぬが案のごとく洒落を遊ばすのだしは是が英勇のお心ざしてございます手大公望の昔を思ひ出しますせ半イヤ否お事を譬へて言ノウ己らアまた八十にはあらあいせ安アハ、それは仰には及びませぬ其代り貴君は大公望の様に内室さんに捨られないで美備しいのを幾人も捨てお置なつたから早くそれを尋出してお上遊ばさないと濟ませんと言つ、半七を先に立して木戸口を這入ッ、兩個の向ふを借と視て是のと驚く此方より様に立たる三勝お蘭前後を忘れて椽側を轉び落つ、走り倚呆れてイハ半七の左右の袖に取すがらんと手を出せしめ柴垣の外に扣へ大勢の供人達の視る眼に耽てお園三勝二人とも互いに半七の貞を視上涙に咽臥しつじ稲田安幸は双方へ立か、り安コレハくどばかり花の山ども梅櫻ども何どもかども上様れないお二人さまが何様して此所にお揃でお出遊ばしたのでございますかサア早く其理をお聞せおされて下さいまし。ア、一餘り嬉しくつて和尙も逆上がいたします万一狐か狸の所為ではないかト眉毛をぬらす生得の道外に流石愁歎の涙を拂ふ頼智の安幸安モ戯言の置にして實正にマア御兩女さまのお身の上を早くおはあしなされまし。イヤしかしお庭でも如何な筋だまづわれいらつしやいましたト半七を家内へ進めさせてお園と三勝の兩女をいたはり安サアくゆれへお出なつてくわしくお咄

しをなさいますし若旦那。ではない殿さまの事を私今私がお咄しやますがマア御覽遊ばさる通り御連が開けてお園さま御家が立まして今日が六日めでございますとやての何様やら角力のお咄しをいたす様だが誠に今日は大吉日でござります是から直にお二人さまを此安幸がお供をして御殿へお入申上るから御安堵遊ばしませ明日の八味の地黄が大補湯を加減をいたして旦那さまへはさし上げておきますから奥さまも御部屋さまもお氣を丈夫にお持遊のしませアハ、くト以前に替らぬ安幸が陽氣の可笑み三勝の泣笑ひの愛敬に莞爾して立上り三サアお嬢さま入ッしやいましたト手を引て勝手覺へし庭の椽石段より伴あひのばれば椽の端に菊半が首を下てぎづまり半七を拜すれば半ハテ珍らしい菊平かコレハくど驚くのみ更に不審のはれざりけり

○斯て三勝が手より三十番神の一軸を半七の前に出し首尾を物語り昨夜の危難をお園の家に退れ入て救これお園に出合し折から菊半が上方より歸り來つて再度の難をすくひ墨太郎と戀したる事を言上ればお園は父の遺したる半七への遺状をいだし乳母の忠義に依て日を過せし事などをかたる測より菊半も漏たる事を言添て果しもあらぬ物語りに安幸は氣轉をさかして万事とはからひ他聞もあればくわしき事御屋敷にてしかるべしと言上るゆへ實に尤と人々が大概にして扣しかば苗根氏の諸事のはからひを不殘稲田に待み置行列正しく揃ひたる供人にかしづかれ駕籠に乘移るを暫時ながらも見送る兩女安幸の菊平に此家の取片付隣家への祝儀を透一にさしづをなして夫よりお園の假住居に